韓国日本言語文化学会

2023年度 秋季国際学術大会

發表論文集

- 日 時 : 2023年 11月 4日(土)
- 場 所 : 全州大学校 人文大学(真理館)
- 主 催 : 韓国日本言語文化学会
  全州大学校
- 後 援 : 国際交流基金ソウル文化センター

JLC 韓國日本言語文化學會
Japanese Language & Culture Association of Korea

目　次

〈基調講演〉

• 韓國日本言語文化學會 學術大會 改善方案 ……牟世鍾(仁荷大教授, 學會運營委員長)… 11

〈言 語〉

• 母語場面と日韓接触場面の異学年大学生による初対面会話の分析 ……小林友美(立教大学)… 15
—参加者間の相互作用に着目して—

• 意味地図はヴォイス形式の対照分析に有効なのか ……鄭宇鎭(帝京大)… 19
—日韓両語の場合—

• 東野圭吾作品における色彩語分析 ……張歌(香港中文大学)… 24
—『秘密』など四作品を中心に—

• 明治·大正期資料における確認の叙法副詞類の使用状況と文体的傾向 ……林禔映(全南大)… 31

• 明治・大正期の落語資料における待遇表現 ……宋世連(全南大)… 37
—人称代名詞を中心に—

• 韓国語話者の「ながら」の過剰使用の原因に関する一考察 ……崔真姫(白石大)… 43

• 韓国人日本語学習者の日本語教育の実態と問題点 ……上野由香子(全州大)… 48
—謙譲語「ご＋漢語名詞＋する」を中心に—

• 朝鮮空襲の記録について ……樋口謙一郎(椙山女学園大学)… 53

〈文 学〉

• 『日本婦人 朝鮮版』ーその内容と展開 ……崔世卿(早稲田大学)… 57

• 『日本婦人』(朝鮮版)からみる在朝日本女性の生活戦 ……張慧珍(カトリック関東大学)… 63

• 戦時期の日本語雑誌における古典教育 ……李芙鏞(江原大)… 66

• インドネシア日本語文学の発展と展開 ……朴祉侯(九州大学)… 69
—『爪哇日報』の文芸欄と無名作家たち—

• 芥川龍之介「蜃気楼」論 ……早澤正人(仁川大)… 72
—錯視の手法—

• 三島文学に描かれたゴシック ……李佳呟(嘉泉大)… 78
—女性と家庭の関係—

• 近代日本における幽霊概念の変遷 ……柳政勲(高麗大)… 82
—黒岩涙香『幽霊塔』を中心に—

• 松本清張研究 ……申鉉泰(祥明大)…87

〈文 化〉

• 惑星的な地域研究と居住可能性 ……李康元(仁川大)… 93
—人新世の日本地域学—

• ＜スズメの戸締り＞とダークツーリズム ……片龍雨(全州大)… 97

• DBを活用した19世紀日本のコレラ流行の考察 ……金美眞(蔚山大)…101
—公衆衛生と下層階級を中心に—

• 日本社会とKカルチャーの新たな可能性 ……曺圭憲(祥明大)…105
—文化融合の観点から—

• 宮崎駿『風の谷のナウシカ』に関する一考察 ……阿武正英(祥明大)…109

• 日本アニメと地域ブランディング ……宋淑正(中央大)…114

• 近代日本の試験と李舜臣 ……金俊培(海軍士官學校)…118

• 石川啄木の「ローマ字日記」について ……尹在石(ハンバッ大)…123

韓国日本言語文化学会

2023年度 秋季国際学術大会

◉ 日　時：2023年 11月 3日(金) 18:00～20:00 ── 運営委員会
　　11月 4日(土) 10:00～20:00 ── 学術大会

◉ 場　所：全州大学校人文大学(真理館)

▶ 日程 ◀

＊ 10:00～10:30 登録 …… 3階ロービ

＊ 10:30～11:00 開会式 …… 聖淵ホール(307号)

歓迎辞：朴均轍 Superstar College学長

開会辞：金賢廷(会長･白石大) …… 司会：片龍雨(総務理事･全州大)

＊11:00～11:30 基調講演： …… 聖淵ホール(307号)

牟世鍾(学会運営委員長･仁荷大) …… 司会：權赫仁(副会長･光雲大)

「韓國日本言語文化學會 學術大會 改善方案」

＊ 12:00～13:00 常任理事会

＊ 13:00～14:20 企画発表

<言語分科> …… 聖淵ホール(307号)

<文学分科> …… (308号)

<文化分科> …… (311号)

＊ 14:30～17:10 学術発表会

<言語分科> …… 聖淵ホール(307号)

<文学分科> …… (308号)

<文化分科> …… (311号)

＊ 17:10～17:45 研究倫理教育 …… 聖淵ホール(307号)

＊ 17:45～18:00 閉会式 …… 聖淵ホール(307号)

＊ 18:00～20:00 Reception

＜言語分科＞ 企画発表(307号)

座長：朴蕙成(ハンバッ大)

時間	発表者	発表題目	討論者	司会者
13:00 14:20	小林友美 (立教大学) zoom	母語場面と日韓接触場面の異学年大学生による 初対面会話の分析 ―参加者間の相互作用に着目して―	張允娥 (釜慶大)	宋殷美 (白石藝術大)
	鄭宇鎭 (帝京大) zoom	意味地図はヴォイス形式の対照分析に有効なのか ―日韓両語の場合―	全紫蓮 (慶尚国立大)	
	張歌 (香港中文大学) zoom	東野圭吾作品における色彩語分析 ―『秘密』など四作品を中心に―	尹榮珉 (延世大)	郭銀心 (中央大)

＜言語分科＞ 研究発表(307号)

座長：朴英淑(水原科学大)

時間	発表者	発表題目	討論者	司会者
14:30 15:00	林禔映 (全南大)	明治大正期資料における確認の叙法副詞類の 使用状況と文体的傾向	金殷模 (全北大)	林序衍 (木浦海洋大)
15:00 15:30	宋世連 (全南大)	明治・大正期の落語資料における待遇表現 ―人称代名詞を中心に―	井口有子 (仁荷大)	
15:30 16:00	崔真姫 (白石大)	韓国語話者の「ながら」の過剰使用の原因に関する 一考察	方允炯 (水原大)	宋洙珍 (仁荷大)
16:00 16:10	Break Time			
16:10 16:40	上野由香子 (全州大)	韓国人日本語学習者の日本語教育の実態と問題点 ―謙譲語「ご＋名詞＋する」を中心に―	大谷由香 (全北大)	朴英淑 (水原科大)
16:40 17:10	樋口謙一郎 (椙山女学園大学)	朝鮮空襲の記録について	都基弘 (韓南大)	

＜文学分科＞ 企画発表(308号)

座長：金孝順(高麗大)

時間	発表者	発表題目	討論者	司会者
13:00 14:20	崔世卿 (早稲田大)	『日本婦人 朝鮮版』ーその内容と展開	金素嬉 (全州大)	崔泰和 (群山大)
	張慧珍 (カトリック 関東大学)	『日本婦人』(朝鮮版)からみる在朝日本女性の 生活戦	金聖姫 (全北大)	
	李芙鏞 (江原大)	戦時期の日本語雑誌における古典教育	崔泰和 (群山大)	

＜文学分科＞ 研究発表(308号)

座長：申鉉泰(祥明大)

時間	発表者	発表題目	討論者	司会者
14:30 15:00	朴祉候 (九州大学) zoom	インドネシア日本語文学の発展と展開 ―『爪哇日報』の文芸欄と無名作家たち―	朱蕙貞 (全南大)	金孝順 (高麗大)
15:00 15:30	早澤正人 (仁川大)	芥川龍之介「蜃気楼」論 ―錯視の手法―	洪聖牧 (蔚山大)	
15:30 16:00	李佳呟 (嘉泉大)	三島文学に描かれたゴシック ―女性と家庭の関係―	朴秀淨 (聖潔大)	
16:00 16:10	Break Time			
16:10 16:40	柳政勳 (高麗大)	近代日本における幽霊概念の変遷 ―黒岩涙香『幽霊塔』を中心に―	柳芝娥 (圓光大)	吉美顕 (又松大)
16:40 17:10	申鉉泰 (祥明大)	松本清張研究	趙柱喜 (長安大)	

<文化分科> 企画発表(311号)

座長： 尹在石 (ハンバッ大)

時間	発表者	発表題目	討論者	司会者
13:00 14:20	李康元 (仁川大)	惑星的な地域研究と居住可能性 ―人新世の日本地域学―	金學淳 (忠南大)	金學淳 (忠南大)
	片龍雨 (全州大)	<スズメの戸締り>とダークツーリズム	朴濚興 (全州大)	
	金美眞 (蔚山大)	DBを活用した19世紀日本のコレラ流行の考察 ―公衆衛生と下層階級を中心に―	金俊培 (海軍士官学校)	

<文化分科> 研究発表(311号)

座長：権赫仁(光云大)

時間	発表者	発表題目	討論者	司会者
14:30 15:00	曺圭憲 (祥明大)	日本社会とKカルチャーの新たな可能性 ―文化融合の観点から―	李鈗周 (群山大)	権赫仁 (光云大)
15:00 15:30	阿武正英 (祥明大)	宮崎駿「風の谷のナウシカ」に関する一考察	崔泰和 (群山大)	
15:30 16:00	宋淑正 (中央大)	日本アニメと地域ブランディング	申鉉善 (全北大)	
16:00 16:10	Break Time			
16:10 16:40	金俊培 (海軍士官学校)	近代日本の試験と李舜臣	林晟澤 (全北大)	文亨子 (全北大)
16:40 17:10	尹在石 (ハンバッ大)	石川啄木と(ローマ字日記)	崔俊鎬 (全北大)	

基調講演

韓国日本言語文化学会 学術大会 改善方案

牟世鍾(仁荷大教授, 學會運營委員長)

1. 학술대회 현황

일본학계의 학술대회는 일반적으로 1년에 2번 개최하고 있는데 대게 국제학술대회로 치루고 있다. 1년에 2번이면 적절한 것으로 볼 수 있겠으나 한국 일본학계의 현실을 고려하면 쉽지 않은 상황이다. 또한 국제학술대회로 개최하고 있지만 이 또한 진정한 국제학술대회로 볼 수 없는 경우가 적지 않다. 즉 학술대회개최의 하드웨어적 측면에서 그 적절성을 살펴볼 필요가 있어 보인다.

1년에 두 번을 이것도 국제학술대회로 치루기 위해서는 많은 나라의 많은 발표자가 참가해야 하는데 이것이 정상적인 모습을 갖추기 위해서는 쉽지 않은 준비가 필요할 것이다.

한국 일본학계의 연구자 수가 격감하고 있는데 학술지를 발행하는 학회는 무수히 많아 적은 수의 연구자들로 수많은 학회의 학술대회를 치러내는 것은 물리적으로 불가능에 가까운 상황이라 할 수 있는데, 아직 각 학회가 기존 학술대회 모습을 지켜내려 하고 있어 학술대회개최가 매우 어려운 상황이다.

2. 학술대회 개선 방향

학술대회는 연구자들의 연구성과를 학계에 발표하여 연구자로서의 학문적 가능성을 평가받는 매우 중요한 과정이다. 그런 만큼 연구자들은 각자의 연구능력을 인정받기 위해 최대한의 연구성과를 발표해야 한다. 한편의 논문을 완성하기 위해 본인으로서는 가능성을 인정받을 만한 논문을 발표하고 추후 심사에 통과되어 학술지에 게재되도록 해야 한다.

한국의 연구성과평가시스템의 터무니없다고 단정할만한 제도 탓에 모든 연구자가 연구업적달성이라는 형식을 클리어해야 하는 상황인 탓에 세상에 발표되는 수많은 논문의 수준이 전혀 평가받지 못하는 경우가 많은데, 그렇다면 그 전 단계인 학술대회의 논문발표도 탁월한 연구성과를 선보이기는 매우 어려운 구조라고 할 수 있다.

오랜 연구 결과를 토대로 이를 우수 학술지에 투고하여 심사에 통과할만한 논문을 학술대회를 통해 그 가능성을 검증받는 과정이 학회의 학술발표회라고 할 수 있는데, 이를 진정으로 실현하기 위해서는 연구성과의 발표에 모든 연구자가 자신들의 연구력의 명운을 걸어야 하는 것이 진정한 발표의 모습이어야 할 것이다.

본회의 학술대회는 오랫동안 국내와 국외 개최를 이어왔는데, 이는 명목만이 아닌 국제학술대회의 진정한 모습을 실현하기 위한 방편이다. 나아가 모든 연구자가 일본이나 일본과 관련된 연구를 하는 학문 분야의 성격상

사용언어가 일본어여야 하며 학술대회에도 일본인 연구자의 참가가 반드시 이루어져야 연구성과의 진정한 평가를 받을 수 있어 본회는 이를 충실히 이행하려 노력하고 있다. 하지만 전혀 터무니없이 일본 연구자의 평가를 받기 위한 공통의 언어인 일본어를 상용하지 않고 한국어로 발표하는 사례도 많아 정상적인 평가를 받지 않으려는 발표를 서슴없이 행하는 경우도 많다. 마치 한국어를 연구하면서 한국인 연구자들이 전혀 읽을 수도 없는 언어로 논문을 발표하는 경우가 본 학계에도 만연하고 있다.

본회 학술대회의 정상적인 개최를 위해서는 다음과 같은 개선방안을 마련해야 할 것이다.

첫째는 난립한 학회를 줄여 본 학계 연구자 수에 어울리는 학술대회를 개최해야 할 것이다. 이를 위해서는 학회를 통폐합하거나 아니면 공동으로 개최하는 것이다. 즉 일본학계의 학술대회가 전체적으로 줄어야 한다. 그래야 많은 연구자들이 한데 모여 활발한 학술대회를 개최할 수 있다. 발표자 수가 절대 부족인 현 상황에서 발버둥 치며 억지로 발표자를 모집하는 행위는 지양되어야 한다.

둘째는 현행 연구업적평가시스템을 타파하여 연구발표의 본연의 모습을 회복해야 한다. 학술대회의 발표 및 학회지 논문게재가 매우 신중하여 가치 없는 논문이 양산되는 시스템을 반드시 개선해야 한다.

시간을 들여 오랜 연구 끝에 학술대회에 발표하여 높게 평가받을 만한 성과를 냈는지를 신중히 판단하여, 잘못 발표하면 연구자의 자질을 심각하게 의심받아 연구자의 길을 포기해야 할지도 모른다는 각오로 발표에 임해야 할 것이다. 완전하지는 않더라도 발표를 통해 발전 가능성을 평가받을 만한 논문을 발표해야 한다. 많은 연구자가 학문의 발전을 경험하고 새로운 연구성과를 확인하기 위해 애써 발표장을 찾는데 발표 내용이 이를 충족시키지 못한다면 발표는 무의미한 것이 되고 만다.

현행 학술대회는 발표신청 논문에 대한 아무런 사전 심사가 없이 신청만 하면 이루어지는 구조이다. 자칫 발표를 듣는 연구자들에 대한 모독이 될 수도 있는 것으로 향후 발표의 질을 높일 수 있는 방안을 마련해야 한다. 이를 위해서는 연구발표의 분야를 나눠 신진연구자 발표와 중진의 초청발표 등으로 발표를 나눌 필요가 있을 것이다. 신진연구자의 발표는 사전 심사를 거쳐 발표 가능 여부를 결정해야 한다. 나아가 학술대회가 연구자들의 연구력에도 도움이 될 수 있는 것으로 하기 위해서는 우수한 연구자의 사전 준비된 논문발표가 이루어져 많은 연구자들에게 학문연구에 도움을 줄 수 있는 발표가 되어야 한다.

言語

母語場面と日韓接触場面の異学年大学生による初対面会話の分析

―参加者間の相互作用に着目して―

小林友美(立教大学)

1. はじめに

本研究は、日本語の会話教育に応用するための基盤的研究として、日本語母語場面と接触場面の初対面会話を分析するものである。社会的属性として上下関係のある異学年の大学生は、交流を目的とした初対面場面において、どのように会話を展開させるのであろうか。本研究は、母語場面と日韓の接触場面の異学年大学生による初対面会話を対象に、参加者間の特徴的な相互作用を明らかにすることを目的とする。特に、参加者の上下関係が反映されると考えられる発話数、話題展開、会話の主導権に焦点を絞り、分析を行なう。

2. 先行研究

日本語の初対面会話の相互作用を分析した先行研究は多種多様である。母語場面の初対面会話において、上下関係に着目した宇佐美・嶺田(1995)は、大学院生と大学教官の会話を分析した結果、目上が話題を導入して会話をリードする役割を果たしていること、目上が質問、目下が答えるという「質問－応答型」の話題の展開パターンが多いことを明らかにした。異学年大学生間の会話の情報交換の対称性に着目した三牧(1999)は、対称的な情報交換と非対称的な情報交換がほぼ同率であったことを報告し、「上位者が話題管理をする傾向」があることを明らかにした。本研究も話題展開や会話の主導権において、先行研究と類似した結果が出ると予想されるが、本分析では母語場面と接触場面の相違に関しても明らかにする。次に、母語場面と接触場面の初対面会話の話題展開に関して、佐々木(1998)は、異文化間コミュニケーションの場面では、日本人が「インタビュー・スタイル」をとり、日本人同士では、「話し合いスタイル」をとる傾向がみられたと指摘している。小林(2023)は、母語場面の話題展開は、互いに質問をし合い、共通の話題や共感を示す「相互型」であるのに対し、接触場面は、先輩の質問と後輩の応答の発話連鎖から形成される「一方方向型」になる傾向を明らかにした。本研究は小林(2023)の発展的研究として、「相互型」と「一方方向型」の話題展開における情報交換の対称性や会話の主導権についての分析を試みる。

3. 研究方法

分析対象は、同じ学部の異学年の大学生による初対面の交流会話である。表1に資料の概要を示す。母語場面3資料と、日韓の接触場面の3資料からなる全6資料(各資料　約15分間)を収集した。会話参加者は、母語話者の2年生の先輩2名、1年生の後輩の母語話者3名と韓国人上級日本語学習者3名である。会話終了後、会話感想シートを記入してもらい、別日に話題区分調査とFUIを実施した。話題区分調査とは、鈴木(1995)の「内容のまとまり」による区分をスクリプトに記入し、各区分の内容を端的に示す「タイトル」を付ける調査のことで、参加者2名と筆者の計3名の調査結果を基準に話題を認定した。

表1 資料の概要

資料	会話参加者と発話数	発話総数
資料1(母語場面)	先輩J1(328発話/51.2%)・後輩J1(313発話/48.8%)	641発話
資料2(母語場面)	先輩J1(288発話/54.3%)・後輩J2(242発話/45.7%)	530発話
資料3(母語場面)	先輩J1(199発話/54.4%)・後輩J3(167発話/45.6%)	366発話
資料4(接触場面)	先輩J2(194発話/59.1%)・後輩K1(134発話/40.9%)	328発話
資料5(接触場面)	先輩J2(176発話/61.1%)・後輩K2(112発話/38.9%)	288発話
資料6(接触場面)	先輩J1(205発話/59.1%)・後輩K3(142発話/40.9%)	347発話

話題展開の特徴を明らかにするために、情報交換の対称性の実態を把握した。「開始の挨拶」と「終了の挨拶」以外の大話題において、同じ話題に関して参加者相互が情報を提供した場合を「対称」とし、一方の参加者のみが情報提供するが、もう一方が提供しない場合を「非対称」とした。会話の主導権の分析には、三牧(1999)の「情報交換の形態」を参考にした。三牧(1999)は「情報交換の形態」を「導入質問型情報要求」、「対称質問型情報要求」、「導入自発型情報提供」、「対称自発型情報提供」、「応答型情報提供」に整理し、「導入質問型情報要求」と「自発型情報提供」を用いて、小話題を単位に非対称的な情報交換を分析した。本分析は、大話題の話題に関して、発話権を自ら獲得し、相手に情報を求めているか、それとも自発的な情報提供により相手に情報を与えているかという点に注目し、「質問型情報要求」と「自発型情報提供」に分類した。

4. 分析結果

4.1 発話数

表1の発話総数を見ると、母語場面より接触場面の発話数が多く、資料1に関しては641発話と、接触場面の倍に近い数である。参加者別にみると、全6資料で、先輩の発話数の割合が50%以上で後輩より多く、先輩のほうがやや積極的に会話に参加しているといえる。次に、母語場面と接触場面の参加者別の発話数に注目すると、母語場面の先輩Jは約51～54%で後輩Jが約46～49%であるのに対し、接触場面の先輩Jは約60%で後輩Kが約40%と、母語場面より接触場面のほうが先輩Jの発話数が多い。これにより、母語場面のほうが活発にやりとりがあり、後輩Jは後輩Kより積極的に会話に参加していることが分かる。

4.2 話題展開と会話の主導権

表2に大話題の番号、話題、情報交換の対称性「対称/非対称」、情報交換の形態「質問型情報要求/自発型情報

提供」、発話者「先輩/後輩」を示す。まず、情報交換の対称性であるが、母語場面は、20話題中「対称」が18話題(90.0%)、「非対称」が2話題(10.0%)であり、三牧(1999)の「ほぼ同率」と異なる結果となった。三牧(1999)は他学部の学生同士の会話であるのに対し、本研究は同じ学部生同士の交流会話であるため、より共通話題が多くなり、相互が活発に情報交換をしたと考えられる。接触場面は、23話題中「対称」が8話題(34.8%)、「非対称」が15話題(65.2%)であった。母語場面のほうが「対称」の情報交換が倍以上多いということになる。情報交換の形態に注目すると、「対称」は、母語場面は18話題のうち「質問型/質問型」が15話題(83.3%)、「自発型/自発型」が2話題(11.1%)、「質問型/自発型」・「自発型/質問型」が1話題(5.6%)であった。一方、接触場面は8話題のうち「質問型/質問型」が4話題(50.0%)、「自発型/自発型」が3話題(37.5%)、「質問型/自発型」・「自発型/質問型」が1話題(12.5%)であった。これにより、母語場面の参加者は一つの話題について相互に情報要求、情報提供をする「対称」の話題展開をし、接触場面は「非対称」の話題展開をする傾向があるといえる。

表2　情報交換の対称性と形態

大話題	資料1 母語場面	資料2 母語場面	資料3 母語場面	資料4 日韓接触場面	資料5 日韓接触場面	資料6 日韓接触場面
1	開始の挨拶	開始の挨拶	開始の挨拶	開始の挨拶	開始の挨拶	開始の挨拶
2	調査	調査	出身地	サークルの共通の友達	学部を選択した理由	後輩K3の出身地
	対称 先:自発型/後:質問型	非対称 先:質問型	非対称 先:質問型	非対称 先:質問型	非対称 後:質問型	非対称 先:質問型
3	授業	出身地	1年生の授業	授業	学部の授業1	入試の方法
	対称 先:質問型/後:質問型	対称 後:質問型/先:質問型	対称 先:質問型/後:質問型	非対称 先:質問型	対称 先:自発型/後:自発型	非対称 先:質問型
4	留学	フェイスシールド	サークル	アルバイト	関心がある分野	学部の授業
	対称 先:質問型/後:質問型	対称 後:自発型/先:自発型	対称 先:質問型/後:質問型	非対称 先:質問型	非対称 後:自発型	対称 後:質問型/先:質問型
5	第二外国語	サークル	留学	サークル	学部の授業2	学生サポーター
	対称 後:質問型/先:質問型	対称 先:質問型/先:質問型	対称 先:質問型/後:質問型	非対称 先:質問型	対称 後:自発型/後:自発型	非対称 先:質問型
6	課題1	学部の学生	第二外国語	留学先の大学	カルチャーショック	第二外国語
	対称 後:質問型/先:質問型	対称 先:質問型/後:質問型	対称 後:質問型/先:質問型	対称 先:自発型/後:質問型	非対称 先:質問型	対称 後:質問型/先:質問型
7	サークル	アルバイト	学部の授業	語学学習	カルチャーショックの克服方法	留学
	対称 先:質問型/後:質問型	対称 先:質問型/後:質問型	対称 先:質問型/後:質問型	非対称 先:質問型	非対称 先:質問型	対称 先:質問型/後:質問型
8	課題2	留学	終了の挨拶	韓国語の授業	挫折したこと	先輩の出身地
	対称 後:自発型/先:自発型	対称 先:質問型/後:質問型		対称 後:自発型/先:自発型	非対称 先:質問型	非対称 後:質問型
9	終了の挨拶	終了の挨拶	—	終了の挨拶	終了の挨拶	大学のイメージ 対称 後:質問型/先:質問型
10	—	—	—	—	—	おすすめの日本の食べ物 非対称 後:質問型
11	—	—	—	—	—	終了の挨拶

注１）「先」は先輩、「後」は後輩を示し、発話者を指す。

注２）「質問型」は「質問型情報要求」、「自発型」は「自発型情報提供」を示す。

次に、会話の主導権を明らかにするために、情報交換の先行発話の発話者に焦点をあてる。母語場面は、20話題のうち14話題(70.0%)が先輩が先行している話題で、そのうち「質問型」は13話題(92.9%)であった。接触場面は、23話題のうち14話題(60.9%)が先輩の先行しており、「質問型」は12話題(85.7%)であり、両場面とも先輩が後輩に質問をして話題を導入したり、展開する傾向があることを確認した。つまり、異学年の大学生の初対面会話では、先輩が質問により会話を主導しているといえる。これは、宇佐美・嶺田(1995)と三牧(1999)の上位者の話題管理の傾向と同様の結果であるが、本研究で分析した接触場面でも同じ結果となった。また、接触場面では、「非対称」の15話題のうち11話題(73.3%)が先輩の「質問型」であったため、先輩が質問をして会話をリードし、後輩が答えるという話題展開になる傾向があるといえる。

5. おわりに

母語場面と日韓接触場面の異学年の大学生の初対面会話を対象に、特徴的な相互作用を分析した結果、母語場面では、参加者が積極的に会話に参加し、先輩Jの質問の後に後輩Jも同じ話題の質問をして情報交換をするという対称的な話題展開をする傾向があるのに対し、接触場面では、先輩Jの質問と後輩Kの応答という非対称の話題展開が多く確認された。また、両場面とも母語話者の学年の上位者が「質問型情報要求」で話題を導入し、展開するなど、会話を主導しており、特に接触場面でその傾向が強いということが明らかになった。同じ大学の学部と共通点が多くあるため、後輩Jは先輩J同様、人間関係の構築のためにも共通点を見つけながら会話を進行していたと考えられる。また、接触場面では、先輩Jが後輩Kに言語ホストとして調整を行っていたことが示唆される。以上のような相互作用の特徴を踏まえ、日本語の会話教育において、初対面場面では、会話に積極的に参加し、相互に質問をして共通点を見つけ、それを深めるための話題展開の方法を学習することが必要だと考える。今後はFUIの資料を対象に、相互作用と参加者間の参加意識の関連を分析し、その結果を会話教育のために応用したいと考えている。

【参考文献】

宇佐美まゆみ・嶺田明美(1995)「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二者間の会話分析より—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2、130-145.

小林友美(2023)「大学生の初対面会話における日本語母語話者と韓国人日本語学習者の話題選択と話題展開」『日本語・日本語教育』6、79-92.

佐々木由美(1998)「初対面の状況における日本人の『情報要求』の発話—同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12、110-117.

鈴木香子(1995)「内容区分調査における『話段』設定の試み」『国文目白』34、76-84.

三牧陽子(1999)「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性—異学年大学生間会話の分析—」『日本語の地平線吉田弥寿夫先生古稀記念論集』くろしお出版、363-376.

意味地図はヴォイス形式の対照分析に有効なのか
―日韓両語の場合―

鄭宇鎭(帝京大)

1. はじめに

本発表では、日韓両語において受身を表すとされるラレル(以下、ラレル構文)と-eci-(지다)(以下、-eci-構文)を分析対象とし、両形式の対照分析における意味地図の有効性を検討する。

2. 意味地図の出発点となった『受身のプロトタイプ』分析

Shibatani(1985：837)は、次のに示すように『行為者の脱焦点化』(defocusing of agent)という語用論的機能や行為対象のaffectednessという意味的特徴などによって規定される、普遍的な『受身のプロトタイプ』を想定し、各言語における受身を表す形式が表す複数の意味を、このプロトタイプとの適合度に応じた成員性を持つ『受身』カテゴリーの一員として位置づけることを試みた[1)]。

(2) Characterization of the passive prototype
- a. Primary pragmatic function: Defocusing of agent
- b. Semantic properties: (ⅰ) Semantic valence: Predicate(agent, patient)
  (ⅱ) The subject is affected
- c. Syntactic properties:
  (ⅰ) Syntactic encoding: agent →(not encoded).patient → subject
  (ⅱ) Valence of P[redicate]: Active = P/n;Passive = P/n-1
- d. Morphological property: Active = P;Passive = P [+passive]

かしながら、この分析は、通言語的に他の用法・機能との通時的・共時的連続性がある『受身』に、プロトタイプという特別な資格を与える根拠が示されていないという理論的な問題がある(坪井2004)。

1) -eci-構文に対する『受身のプロトタイプ』分析を行なったものとしては、Yeon(2003)・ヨン，チェフン(연재훈)(2011/2023)が挙げられる。

3. 意味地図は『受身のプロトタイプ』分析の代案になれるのか

このような普遍的な文法的プロトタイプを設定する必要がない分析法として意味地図を用いるアプローチがある(Haspelmath 1987、2003、Croft 2001など)。

日本語のラレル構文には受身・自発・可能・尊敬の用法があり、韓国語の-eci-構文には受身・自発(非意図)・可能・状態変化(主体変化)の用法[2)]があることが知られている。両形式の担う用法は次のような意味地図にまとめられる。

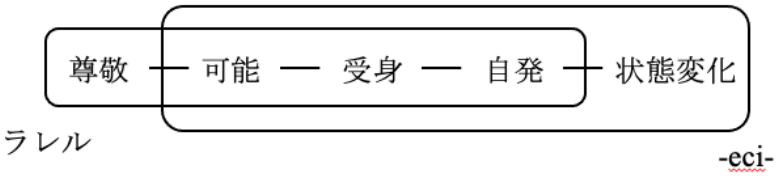


図1ラレルと-eci-の意味地図(抽象度高)

図1から、両形式は受身・自発・可能の用法を持つ点で共通する一方で、ラレル構文は『状態変化(主体変化)』の用法を持たず、-eci-構文は『尊敬』の用法を持たないという点で異なることがわかる。このように意味地図は、文法形式の多義性のあり方に対する通言語的分析から得られた、文法的な意味・機能の普遍的な相互関係図(すなわち概念空間)上に、個別言語の文法形式の多義の広がりを描いて示すことで、他言語の対応する文法形式との類似性や相違性を視覚的に対照できるという利点があると考えられている(Haspelmath2003：230f.)。

しかしながら、以上のように設定された意味地図には、個別言語の詳細な意味的特徴を捉えきれないという問題がある。細かく見ていくと、構文認定の基準となる個々の意味機能の内容自体が各言語で異なるのである。たとえば、ラレル構文の『可能』(potential passive)用法は『太郎は納豆が食べられる』のように、行為者の行為遂行の可能性・能力を表すことができるが、韓国語の-eci-構文はこのような用法を持たず、『～することができる』に相当する表現を用いなければならない。また、逆に、-eci-構文の『可能』用法は、냉장고에넣어놓은사과도(예상보다빨리)썩어지더라.『冷蔵庫に入れておいたリンゴが(予想よりも早く)腐った。』(鄭聖汝1999：196、括弧は筆者)のように、状態変化の自動詞と結びつくことができるが、同様の例をラレルで表現することはできない。

このように比較に用いられる意味機能ラベルは、一見すると明確に規定されたもののようであるが、個別言語の実情からすれば、かなりの程度大づかみなものであると言わざるを得ない。

本発表の観点から重要なのは、日本語のラレル構文の『可能』用法で『太郎は納豆が食べられる』のような表現ができる理由、や、韓国語の-eci-構文の『可能』用法で냉장고에넣어놓은사과도(예상보다빨리)썩어지더라.『冷蔵庫に入れておいたリンゴが(予想よりも早く)腐った。』のような表現が可能なのはどうしてなのか[3)]とい

---

2) -eci-構文の各用法に該当する例の一部を挙げると次のようになる。
(a) 한글은세종대왕에의해**만들어졌다.**
『ハングルは世宗によって作られた。』 [受身用法]
(b) 잘못해서 셔츠가 반대로 **입어졌다.**
『間違えてシャツを裏表に着てしまった。』 [自発(非意図)用法]
(c) 굴뚝이 겨우 **막아졌다.**
『(話し手の行為によって、なんとか)煙突がふさがった。』 [可能用法]
(d) 비가 점점 **그쳐졌다.**/건물 벽이 **무너졌다.**
『雨がどんどん止んできた。』/『建物の壁が崩れた。』 [状態変化(主体変化)用法]

3) -eci-構文の可能用法および自発(非意図)用法というラベルのもとにまとめられる個々の用例を統一的に扱

うような、個別言語における個々の使用例をいくつかの意味機能へとまとめ上げる仕組みなのである(坪井2004：233f、Tsuboi 2008、坪井2012：33-36、坪井2020)[4]。

4. 意味機能ラベルに個別言語の意味的特徴を過不足なく反映させれば問題は解決できるのか

円山(2016の第2部)は、ラレル構文・-eci-構文の詳細な意味的特徴と文法カテゴリー(アスペクト、ヴォイス、モダリティ)を組み合わせた意味機能ラベルを設定し[5]、次の図2のように両形式を比較している。個別言語の当該形式の分析から得られた意味・文法的特徴にもとづいて日韓両語に特化した意味地図を提示しているのである。

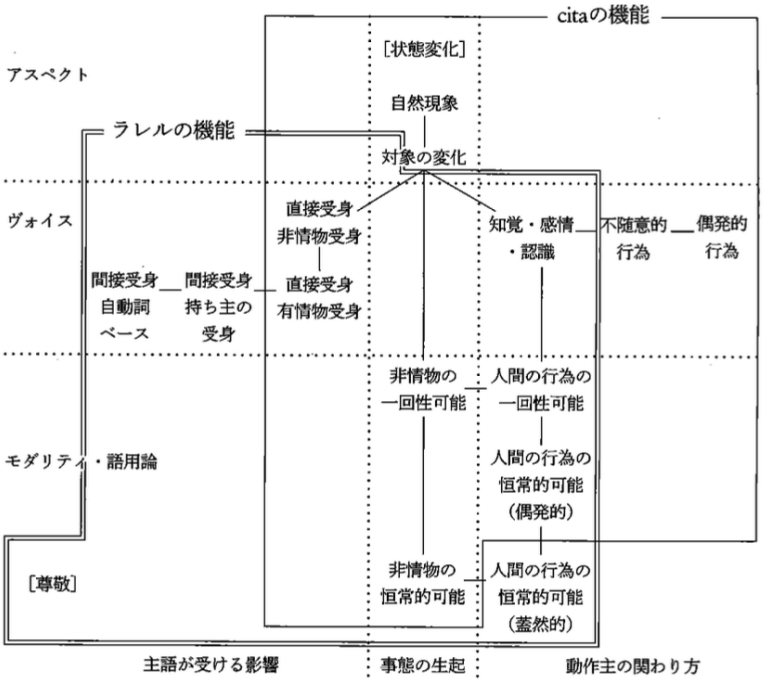


図2ラレル構文と-eci-構文の意味・機能分布(円山2016：291)(抽象度低)

意味的に類似する形式を対象とした語法研究の成果を意味地図に詳細に書き込むことも不可能ではない

う試みについてはそれぞれ、鄭宇鎮(2020)・鄭宇鎮(2022)を参照。

4) むろん、個別言語における個々の例が各用法の下にまとめられる理由とともに、各形式に図1に描かれるような意味機能のまとまりが見られる理由、たとえば、どうしてラレル構文は「受身」、「自発」、「可能」、「尊敬」の用法をもち、-eci-構文は「受身」、「自発(非意図)」、「可能」、「状態変化(主体変化)の用法を持つのか、について考えるのも重要であろう。鄭宇鎮(審査中)は、-eci-構文に見られる複数の用法は、話し手が事象をどのように捉えるかという事象に対する捉え方の違いの現れであり、-eci-構文に見られる多義性はそのような事象に対する捉え方の違いに由来するものであると述べている。

5) 縦軸は上から下に向かってアスペクトに関する用法→ヴォイスに関する用法→モダリティ・語用論的な内容に関する用法という順に並ぶ構成となっており、横軸は話し手が事象を捉える視点の置き方によって「主語が受ける影響」や「事態の生起」、「動作主の関わり方」という順に並ぶ構成を成すものとされる。

が、そうすると、意味機能ラベルとしてふさわしくないものまで意味地図上に含まれてしまうという問題がある。たとえば、図2には「間接受身(持ち主の受身)」や「間接受身(自動詞ベース)」などが設定されているが、いずれもラレル構文に用いられる動詞類(他動詞か(行為)自動詞か)による分類となっており意味・機能ラベルとしては不十分である。「間接受身(持ち主の受身)」と「間接受身(自動詞ベース)」はそれぞれ「所有者と所有物の変化と行為者の背景化」と「事態からの影響による変化」に言い換えられるが、そもそも-eci-構文においても나는그놈들에게입이벌려졌다.「私はあいつらに口をこじ開けられた。」のように「所有者と所有物の変化と行為者の背景化」を表す場合が存在することを考えると(鄭宇鎮・田中2020)、図2はいずれにおいても両形式の意味を十分に反映しているとは考えにくい[6)]。

図2の意味地図は具体性の高い意味機能を設定しているという点で、図1のような抽象度の高い意味地図が持つ問題を解決しているように見える。しかしながら、図2の分析は、図1の概念空間より、概念空間を構成するパラメータが詳しくなってはいるものの、たとえば、日本語のラレル構文の受身用法に「直接受身(非情物受身)」や「直接受身(有情物受身)」、「間接受身(持ち主の受身)」、「間接受身(自動詞ベース)」といったパラメータがまとまるのはどうしてなのか[7)]という、図2に描かれるような複数のパラメータから各用法が構成される理由は、結局のところ手つかずのままである。

【参考文献】

Croft, William.(2001) *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford University Press.

Haspelmath, Martin.(1987) Transitivity alternations ofthe anticausative type. *Arbeitspapiere*. 5：1-50. Cologne: Institut für Sprachwissenschaft der Universität zuKöln.

Haspelmath, Martin.(2003) The geometry of grammatical meaning：Semantic maps and cross-linguistic comparison. In Michael Tomasello(ed.)*The new psychology of language：Cognitive and functional approaches to language structure*. 2：211 - 242. New York/London：Psychology Press.

鄭聖汝(1999)『他動性とヴォイス(態)－意味的他動性と統語的自他の韓日語比較研究－』 神戸大学大学院博士学位論文.

鄭宇鎮(2020)「韓国語-eci構文における可能用法の意味記述－その使役的性質の観点から－」『東京大学言語学論集』42：87-104. 東京大学人文社会研究科言語学研究室.

鄭宇鎮(2022)「韓国語-eci-構文の非意図用法における非意図性とは何か－意図に反する結果の発生と期待に反する行為の実行－」『朝鮮学報』260：27-64. 朝鮮学会.

鄭宇鎮(審査中)『ヴォイス形式の表す捉え方と多義性－韓国語-eci-構文の場合－』東京大学大学院博士学位論文

鄭宇鎮・田中太一(2020)「韓国語の目的語保持型受身－身体とはどのようなものか－」『日本言語学会第160回大会予稿集』160-166.

円山拓子(2016)『韓国語citaと北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』東京：ひつじ書房.

6) 他にも図2に設定されている意味機能が日韓両語以外の言語にも同様に存在するとは限らないため、意味地図の強みであったはずの普遍性を捉える機能が損なわれてしまうという新たな問題に直面する。たとえば、ドイツ語のwerdenはEs wirdgetanzt「多くの人々が踊っている(Lit.ダンスが踊られている)」のように自動詞が用いられる非人称受身とされる場合があるが、(行為)自動詞が用いられるラレル構文と異なり「間接受身(自動詞ベース)」(事態からの影響による変化)を表すわけではない。

7) 日本語の通常の受身に並ぶ「迷惑受身」や「属性叙述受動文」、「持ち主の受身」の統一的扱いについてはTsuboi(2000)や坪井(2002)、Tsuboi(2010)、田中(2019)などを参照。

Shibatani, Masayoshi.(1985) Passives and related constructions：A prototype analysis. *Language*.61(4)：821-848.

田中太一(2019)「日本語受身文を捉えなおす－<変化>を表す構文としての受身文」森雄一・西村義樹・長谷川明香(編)『認知言語学を紡ぐ』343-365. 東京：くろしお出版.

Tsuboi, Eijiro.(2000) Cognitive models in transitive construal in the Japanese adversative passive. In. Ad Foolen and Frederike van der Leek,(eds.) *Constructions in cognitive linguistics*. 283-300. Amsterdam/Philadelphia：John Benjamins.

坪井栄治郎(2002)「受影性と受身」西村義樹(編)『シリーズ認知言語学2 認知言語学Ⅰ：事象構造』63-86. 東京：東京大学出版会.

坪井栄治郎(2004)「他動性と構文Ⅱ－態と他動性－」中村芳久(編)『シリーズ認知言語学入門5 認知文法論Ⅱ』205-246. 東京：大修館書店.

Tsuboi, Eijiro.(2008) Semantic maps and grammatical imagery：Universal and language-specific aspects of grammatical meanings. In. Jean-Remi Lapaire, Guillaume Desagulier and Jean-Baptiste Guignard(eds.)*From gram to mind：Grammar as cognition*. 133-145. Bordeaux：Presses Universitaires de Bordeaux.

Tsuboi, Eijiro.(2010) Malefactivity in Japanese. In Fernando Zuniga and Seppo Kittila(eds.) *Benefactives and Malefactives: Typological Perspectives and Case Studies*. 395-409. Amsterdam: John Benjamins.

坪井栄治郎(2012)「個別言語の固有性と通言語的な一般性－認知言語学の観点から－」『国語と国文学』89(11)：32-41. 東京：明治書院.

坪井栄治郎(2020)「ヴォイス」池上嘉彦・山梨正明(編)『講座言語研究の革新と継承5 認知言語学Ⅱ』349-372. 東京：ひつじ書房.

Yeon, Jae-hoon.(2003) *Korean grammatical constructions：Their form and meaning*. London：Saffron Books.

연재훈(2011/2023)『한국어구문유형론』파주：태학사.

東野圭吾作品における色彩語分析

—『秘密』など四作品を中心に—

張歌(香港中文大学)

1. はじめに

色彩語は言語表現を豊富させ、文学作品で多用されている。本研究は、数量的統計により、小説における色彩語の使用状況、及び作品や登場人物の構築に果たす機能を考察する。

今や、社会派推理の代表小説家・東野圭吾は、著作日本国内累計発行部数が1億部を突破し、大きな社会的影響を及ぼし、しかも、東野作品の色彩語の使用状況と色彩感覚は特別な傾向と特徴を示し、それを明らかにする必要がある。

今回の調査対象は、東野氏の『秘密』、『白夜行』、『幻夜』及び『容疑者Xの献身』である。紙幅の制限により、以下は『秘』、『白』、『幻』、『容』と略称する。

本稿の基本色彩語は赤、黄、青、白、黒である。色彩語抽出に関しては、大藤(1993)に従い、色彩を表す語は品詞を問わず抽出する。ただし、色名を含むが、色彩を表さない結果を除外する。さらに、色彩語の対象語は『分類語彙表』(2004)に従い分類し、各対象語の意味番号を確認する。多義語の場合、その文脈に合わせ、適切な意味番号を選び出す。

2. 色彩語分析結果

本稿は、四作品を調査対象とし、その色彩語の使用状況を観察した。その結果、色彩語の出現語数は合計529個、色彩の種類は26色である。

表1　系統色別色彩語出現個数と割合

	赤系	黄系	青系	白系	黒系	総計
出現個数	106	35	95	146	147	529
割合(%)	20.0	6.6	18.0	27.6	27.8	100

＊ 赤系…赤(70)、茶(21)、ピンク(13)、ダークブラウン(1)、レンガ(1)
黄系…黄(11)、ベージュ(7)、オレンジ(6)、栗(6)、クリーム(3)、金(2)
青系…青(37)、紺(22)、緑(18)、紫(7)、ブルー(7)、水(3)、蒼白(1)
白系…白(138)、銀(4)、乳白(2)、灰白(1)、無色(1)
黒系…黒(94)、灰(30)、グレー(23)

2.1 数量的傾向

合計529個の色彩語のうち、黒系、白系は最も大きな割合を占め、その次は赤系、三者合わせて全体の四分の三を占めている。そして、青系と黄系が合わせて全体の四分の一を占め、他の三色系と比べて極めて少ないが、青系は黄系の三倍である。

2.2 下位色彩語の種類と個数

数量的に圧倒した黒系と白系は、その下位色彩語(各色系に基本色を除いた色)について、黒系は下位色彩語の種類が少ないが、用例数が比較的に多い。白系はその逆で、種類が多いが、用例数が極めて少ない。そのかわりに、青、黄、赤三色系の下位色彩語は種類が多く、出現個数も多い。特に紺と緑で、両者合わせて基本色の青をも上回っている。

3. 東野作品における全体的な色彩語対象別傾向

日本の文学作品において、顔・植物などの自然物はより頻繁的に色彩語に修飾されている。しかし、東野作品には、色彩語の修飾対象は異なる傾向を示している。表2では、生産物および用具の用例数は自然物および自然現象のほぼ二倍であり、多いに上回っている。また、着物や人の外見の色彩描写に重きが置かれる。さらに、自然や植物の項目は出現個数が少なく、自然景色の描写に注目していない点も東野作品の特徴の一つといえよう。

表2　四作品の色彩語分布表(対象別)

	生産物および用具								自然物および自然現象								他	総
	物品	資材	衣料	食料	住居	道具	機械	計	自然	物質	天地	植物	動物	身体	生命	計		
総	1	11	206	4	39	53	34	348	8	21	6	4	2	124	2	167	14	529

表3 対象物の分類項目の出現順位及びその個数と割合

順位	分類語名	個数	割合	順位	分類語名	個数	割合
1	上着・コート	123	23.25%	6	乗り物(陸上)	17	3.21%
2	頭・目鼻・顔	59	11.15%	7	家屋・建物	16	3.02%
3	衣服	39	7.37%	8	札・帳など	15	2.84%
4	皮・毛髪・羽毛	38	7.18%	9	骨・歯・爪・角・甲	14	2.65%
5	袋・かばんなど	21	3.97%	10	戸・カーテン・敷物・畳など	13	2.46%

4. 各基本色・色系の色彩感覚及び対象別傾向

色彩語は対象を修飾して初めて、その機能や心理的傾向が現れる。本節では、各基本色
・色系の対象別傾向を示し、それらの色彩感覚、いわゆる色彩語の背後に潜む感情傾向を明らかにする。ただし、用例数と紙幅のため、ここは基本色を中心に論を進める。

4.1 赤・赤系

日本文化では、赤は豊富な意味を持ち、健康や活気な色であると認識される一方、暴力、怒り、危険を示し、俗悪や低俗の意味にも繋がる。後者の場合は東野作品に多いに見られ、恥、恐ろしい、卑劣、罪悪感といったマイナスのイメージで捉えている。

4.1.1 身体

赤は身体(特に目、顔)の用例が最も多い。恥や屈辱の他、ほろ酔いや酔っ払いの生理的状態、それに、恐怖や愁傷、卑劣、ドキドキなど、多種多様な心理的傾向を表す。

例1では、顔を対象物とし、卑猥で低俗の中年男の人物像がいきいきと登場した。また、例2の「真っ赤な目」は、殺人の事実がバレた美里の恐ろしい限りの気持ちを伝えている。

例1　顔は赤く、吐く息は熟れた柿の臭においがした。(『幻』)
例2　美里はびくっと顎を引き、恨めしそうに母親を睨んだ。目が真っ赤だった。(『容』)

また、よく茶色でおしゃれな女性の髪に向けられている。

4.1.2 衣料

次に多いのは「衣料」(上着・コート)である。例3では、30代の主婦たちは若い男子とのデートのため、赤い服や装身具を選んだが、強引に若作りをする印象を与える。

例3　真っ赤な丸いイヤリングがぶらさがっていた。若作りしているのだろうが、(中略)その下に着た赤いTシャツ。少しも似合っていない。(『白』)

4.1.2 天地

天地(空)の用例は3個しかないが、いずれも罪悪感、虚無感などのマイナスの感情につながっている。例4は父親を殺した亮司が警察の事情聴取を受ける際の描写であり、例5は美佳が宅配便に扮した男(亮司)にレイプされた後の光景である。

この二つの例文に出た赤い空は非常に興味深い。小学校五年生の亮司は、父に犯された少女雪穂を守るため、雪穂をレイプしている父親を殺した。しかし、大人になった亮司は、雪穂の欲望を満たすため、父親と同じようなことをし、少女美佳をレイプした。即ち、東野は赤い空を通して、この運命的な輪廻を暗示している。

例4　(亮司は)そしてため息をつき、窓のほうに目を向けた。夕空が赤かった。(『白』)
例5　美佳はぼんやりと遠くを見た。空が赤みを帯びかけていた。(『白』)

4.2 黄・黄系

日本では、黄は希望や輝きを象徴し、明るい太陽の色だと認識され、プラスのイメージを与える一方、枯葉の色で、死の兆しともされている。東野作品では、黄は不潔、低俗あるいは死といったマイナスな色彩感覚を示している。

4.2.1 身体

「黄」の対象は半分「歯」に向けられている。例えば、『幻』の俊郎、『容』の富樫など、仕事もせず、女や親戚に金を毟り取ろうとする不潔でだらしない人物像が描かれている。しかも、面白いことに、前述の歯が黄色い人物はほとんど殺害された結末を迎えた。

黄系の場合、栗色はほとんど髪を対象物とし、おしゃれな女性像を描くのである。

4.2.2 衣料

黄とオレンジは衣料に向けられる用例はそれぞれ2例だけが、死、低俗などの意味に傾く。例6は西本文代の死亡現場における色彩描写であり、黄と死の関連性を示した。例7は桐原弥生子の初登場のシーンである。鮮やかなオレンジを出発点として、元ホステスで、母性に欠落し、不倫をしている中年女というキャラを立たせはじめた。

例6　女は薄い黄色のセーターにジーンズ(中略)、畳の上に横たわっていた。(『白』)
例7　最初に笹垣の目に飛び込んできたのは、鮮やかなオレンジ色だった。(『白』)

一方、黄系に属すベージュとクリームは黄色と正反対な色彩感覚を持ち、シンプルや暖かいイメージを与えている。例えば、『秘』で、主人公を助けようとした登場人物がいる。「ベージュのコート」という描写を通して、親切で優しい青年像を描きだした。

4.3 青・青系

青は自然の色で、希望や生気、落ち着くなどの意味を表すが、未熟や地位低下もある。青系に属す緑は自然、調和や安らぎといった共通イメージを持っている。東野作品では、青と緑は概ねマイナスの傾向であり、特に緑は罪悪、緊張、礼儀悪いなどの場面で多用されいる。それに反し、紺と紫はプラスのイメージに繋がっている。

4.3.1 身体

青の用例が最も多いのは身体(顔)である。恐怖や怯びえの時、また、体調悪化や病弱の暗示として、「青ざめる」や「青白い」などが多いに用いられている。「蒼」も使う。

4.3.2 衣料

基本色の青は衣料の用例が3例しかないが、青系の用例が多い。紺は合計22例で、そのうちの21例が衣料で，特に(男性の)服を絞っている。その原因として、紺は冷静や信頼感というイメージを与え、日本企業では、紺を制服の色とするのは多いからであろう。

緑は合計18例で、その8例が衣料である。『幻』では、緑の防寒服を着ている雅也は、父親を亡くし、大震災に見舞われ、叔父を殺害した。東野は緑を2回使い、殺人現場を描いた。例8は挑発的な態度を取り、礼儀悪い人間像である。

例8　緑色のスーツを着た若い男が、すぐ目の前にいた。(中略)友彦は瞬時に危険を察知し、ドアを閉めようとした。(中略)土足で部屋に上がり込んだ。(『白』)

紫は合計7例で、その5例が衣料である。東野作品に登場した女性の中、紫の服を着たことがあるのは『幻』倉田頼江と『白』の唐沢礼子などである。二人とも上品で高雅な中年婦人というキャラ立ちで、紫を用いてこの

印象を一層深める役割を果たせるであろう。

4.3.3 住居

青は合計37個で、住居に向けられる用例数は10例であり、主にビニールシート、小屋や畳を対象物とする。『容』の冒頭部で、東野はホームレスたちの住まいをごく細かく描いた。その描写手段の一つとして、6回も青を使い、ビニールシートと小屋を修飾するのである。ここで使う青は、貧困や衛生状況が悪い住居を読者に対して目に浮かばせるだけでなく、青が持つ庶民性や地位低下などの色彩性格をも示す役割を果たした。

4.3.4 機械

青・青系の機械の用例は合計10例で、その中の8例は緑である。前述のように、緑は罪悪といったマイナスの場面使われる。例9は、松浦勇の死体発見を暗示するシーンである。

例9　笹垣は摘まんだガラス片を日に透かした。それは薄い緑色をしていた。(『白』)

4.4 白·白系

日本文化において、太陽の光の色であり、貴族の服装の色でもある白は、古来から神聖や純潔な存在だとされている。東野作品で、白は豊富な機能と感情傾向を担っている。職業・年齢提示という中立的な機能の他、清潔、及び同情や尊敬の念といったプラスの傾向の一方、偽りや見せかけ、恐ろしいなどのマイナスの色彩感覚もある。特に『白』は、白の用例が最も多く、感情傾向も最も豊かである。

4.4.1 衣料

用例数が最も多いのは衣料(59)、その中の40例は服である。白は職業や身分を提示する。例えば、湯川学(理系研究者)は白衣、花岡靖子(飲食店の店員)は白い帽子など。

『白』において、雪穂の服装に使う色彩描写は6例しかないが、義母の喪に服す期間の黒とグレーを除き、残りの3例も白である。それについては4.4.2で詳しく説明する。

4.4.2 身体

次に多いのが身体に関するものであり、合計44例である。そのうち、用例数が多い対象物は以下のようである。髪(14)、歯(9)、肌(6)、顔・頬(6)。

髪が白の場合、老年であることを提示し、人物の落魄を表し、人物への同情も含む。例えば、『容』で、東野は白髪を4回使い、ホームレスの落ちぶれる状態を表す。さらに、人物に対する尊敬も見られる。『白』で、東野は笹垣潤三の外見を描写する際、白髪を5回も使った。力を尽くし、19年も続いて真実を追求した元刑事の苦労さを暗示している。

それに対し、肌、顔・頬に向けられる白は、女性の美しさを表すのは言うまでもないが、偽装、偽りの仮面といった意味に繋がる。『白』で、東野は7回も雪穂の顔、手や肌などの白さを詳しく描写し、並外れた美人像を描きだした。高雅で上品な人を偽装してきた雪穂に対して、彼女のお気に入りの白い服も、人形のような白い外見も、彼女の偽装の一部分である。ここの白はむしろ人物の内心の闇をかえって強調するではないであろうか。

その他、顔に向けられるとき、白は恐ろしい、恐怖の際にも使われる。

最後、歯に向けられる白は黄の正反対で、清潔、無邪気で爽やかな印象を与える。

4.5 黒･黒系

東野作品では、黒と灰は罪悪、不潔、暗鬱、秘密、死といったマイナスのイメージを繋がっている。一方、グレーはビジネススーツの基本色の一つとして、基本的に衣料類に向けられ、冷静やクールな印象を演出している。

4.4.1 衣料

用例数が最も多いのは衣料である。黒・黒系合わせて68例で、それぞれ黒(39)、グレー(17)、灰(12)である。黒と灰の多くは地味さを表すが、クレーの場合、例10のように、グレーは仕事ができる印象を与え、職場で愛用されている。

例10　グレーのスーツを見事に着こなした姿は、すっかりビジネスマンだった。(『白』)

4.4.2 身体

次に多いのは身体であるが、合計17例で、衣料類と比べ非常に少ない。対象物は顔である場合、黒は単に皮膚の色を描写するが、灰は死体の顔や、精神崩壊などの際に使われる。

4.4.3住居

住居に向けられる用例は合計16例である。ここで使う黒・黒系(主に灰)は豊富な意味を持ち、災難、死、地位低下、衛生状況が悪いなどのマイナスのイメージに多用。『幻』で、阪神・淡路大震災のシーンで、「真っ黒に焼けこげた建物」という表現がある。また、例11は文代の死亡現場であり、文代と雪穂の住居、いわゆる細民窟に対する描写である。

例11　煤すすけたような灰色の外壁には、ところどころどす黒い染みがある。(『白』)

『白』で、「黒い長椅子」という死体発見のところが3回出現し、死との関係を強めた。

4.4.4　植物

植物(薔薇、花びら)の用例は2例で、罪悪と死に繋がる。養母を殺害し、黒い喪服を着ている雪穂を「黒い薔薇」と比喩し、彼女の暗くて罪深い内面を読者に伝えた。

4.4.5　その他

黒・灰はよく人物の暗くて暗鬱な気分を表す。その時に使う対象物は多種多様である。例12は、雅也が惚れぬいた相手が自分を利用してきたことに気づいた時の描写である。例13は、実在の手の修飾ではなく、殺人の暗い記憶と心の闇を比喩的に表したのである。

例12 夕焼けに染まった空が、灰色に変わった。(『幻』)
例13(前略)脅迫状は、過去から伸びてきた黒い手に思えた。(『幻』)

5. 終わりに

以上は東野圭吾の四作品の色彩語に観察を行い、その使用・対象傾向と色彩感覚をまとめた。黒・白・赤は色彩語数が多いが、青と黄は下位色彩語が豊富。対象の面では、人工物の色彩描写、特に服と身体の外見描写を好んでいる。それに対し、自然景色などの描写ほとんど見られない。さらに、東野の色彩感覚は表4のように、概ねマイナスに傾き、大衆イメージと共通するのもあり、東野氏の独特な色彩感覚を示しているのも見られる。

表4　四作品における各基本色及び色系の主要色彩感覚

赤	黄	青	青系(紫、緑)	白	黒・灰
恥、恐怖、低俗、罪悪	不潔、低俗、死	恐怖、病弱、地位低下	高雅 罪悪、礼儀悪い	職業・年齢提示、清潔、落魄、尊敬、偽装、恐怖	罪悪、暗鬱、死、地味

【参考文献】

[1] 上村和美. 1999. 文学作品にみる色彩表現分析芥川竜之介作品への適用. 東京:双文社
[2] 大藤幹夫. 1993. 宮沢賢治童話における色彩語の研究. 東京:日本図書センター
[3] 国立国語研究所. 2004. 分類語彙表―増補改訂版. 東京:大日本図書
[4] 野村順一. 2014. 色の秘密色彩学入門. 東京:文芸春秋
[5] 山口幸祐・藤本紗貴子. 2006. 未明童話における「色彩語」について: 調査報告. 富山大学人文学部紀要, (45): 85-139
[6] 潘峰. 2015. 漢語顔色詞文化義論. 武漢：武漢大学出版社

明治･大正期資料における確認の叙法副詞類の使用状況と文体的傾向

林禔映(全南大)

1. はじめに

本発表は明治・大正期(1868-1926)資料(以下、近代資料)の文体の異なりによる叙法副詞[1]の使用傾向を探る研究の一環として、叙法副詞のなかで事態の実現を確かめる語類(以下、確認の叙法副詞類)の使用実態について文体の面から分析することを目的とする。ここでいう「確認の叙法副詞類」とは工藤(1978)の「注釈の副詞」や工藤(1982・2016)の「下位叙法」の一部の副詞[2]、益岡・田窪(1992)の「発言の副詞」、小柳(2019)の「確認副詞」に該当し、典型的な例として「概して、実は、そもそも」が挙げられる。近年、通時的かつ共時的な観点から副詞研究が盛んに進められてきているが、近代語における叙法副詞類の使用状況を網羅的に調査した研究は評価副詞類を扱った林(2022)以外はほとんどなされていない。その一方で、近代語における「おおいに、ずいぶん、たいそう、たいへん」などの程度副詞類については市村(2012、2015)の考察がある。特に、市村(2015：33)は従来の程度副詞研究が文語・口語について区別されずに行われてきたと指摘したうえで、近代雑誌『太陽』と『明六雑誌』における程度副詞類の文体別の使用状況を調査しており、本発表において示唆的である。このような現状を踏まえ、本発表では市村(2012・2015)、林(2022)の調査方法を参考に、文語・口語の別による文体的特徴[3]から、近代資料における確認の叙法副詞類がどのように使用されているのかについて検討する。

2. 調査対象と分析方法

用例調査には国立国語研究所が構築・提供する『日本語歴史コーパス(Corpus of Historical Japanese)』:明治・

1) 工藤(1982・2016)によれば、「話し手の立場からする、文の叙述内容と現実および聞き手との関係づけの文法的表現」(p.50・p.8)をいう。本発表では叙法性(文の語り方、modality)を示す副詞類に関する工藤(1982・2016)の捉え方に従っている。

2) 工藤(1978)の「注釈の副詞」は工藤(1982・2016)において修正が加えられ、「注釈の副詞」としたもののうち、評価的・感情的なものだけを評価副詞として残し、その他は叙法副詞のなかに＜下位叙法sub-modality＞の副詞として繰り入れている。ここでいう下位叙法の副詞類は、広義の平叙文に限られるという叙法的な共起制限はあるが、「どうぞ、ぜひ、けっして、もし」に比べると、積極的に一定の述語形式と呼応する現象が見られないものである(工藤2016：14)。

3) 野村(2011:5-11)と西田(2020:36)の捉え方に従い、文末辞を基準として書き言葉の文語体と口語体に区別する。

大正編』(以下、【CHJ近代】)を用いる。検索システム「中納言」を介して【CHJ近代】におけるサブコーパス(小説と雑誌をはじめ、教科書・新聞・落語)をすべて選び、コア・非コアの区別のある場合はコアに指定する[4)]。またジャンル・文体別の出現傾向を検討するため、本文種別(会話、地の文)・文体(文語、口語)を指定する。さらに、対象とする語を短単位検索(語彙素・語彙素読み・書字形出現形)を中心に検索するが、必要によっては文字列検索で補完する。このように収集した用例の文体情報(文体「不明」や「混在」は除く)は【CHJ近代】の提供するXMLタッグによって比較的に容易く判断できるが、個々の語における副詞用法の確例は目視によって対象外の例(例えば、連体用法や述語用法など)[5)]を選別する。

次に、調査対象の選別に際して、副詞は捉え方によってその外延(所属語類)が異なってくるため、下位分類が困難であるが(小柳2019：305-306)、特に工藤(1982・2016)は叙法副詞類を網羅的に分析しており、本発表において参考になる。前述した通り、本発表で調査対象とする語類は、工藤(1978)の「注釈の副詞」や工藤(1982・2016)の「下位叙法」の一部の副詞、益岡・田窪(1992)の「発言の副詞」、小柳(2019)の「確認副詞」に該当する。ただし、工藤(1982・2016)が指摘するように、「いったい、いかにも、たしかに」のように複数の叙法性にまたがっているもの[6)]や、「思い起こせば、思えば、考えてみると、たしかに」のように副詞とするか用言の一語形とするかについて議論の余地があるものは扱いにくいため今回の調査において対象外とした。その一方で、「実は、本当は、実のところ、実をいえば」は「語としての単位性(複合副詞化の程度)について議論の余地がある」(工藤2016：14)とはいえ、「なんらかの程度に一語化ないし慣用句化したもの」(同上：49)である。さらにこれらは共通して「真実性」という語彙的意味を持っており、近代語における当該形式間の使用状況を比較検討できるため、調査の対象とする。また、予備調査を踏まえて、現代語の分析で確認の叙法副詞類と分類されている場合でも「正直」[7)]や観点・側面を表す「正しくは、正確には」等[8)]は今回用いる近代資料の調査範囲では用例が得られなかったため除外した。以上のような選別基準を踏まえ、本発表で調査対象とする確認の叙法副詞類を以下に示す。

案外[9)]、案の定[10)]、一般に、概して、元来、現に、事実、実のところ(は)、実は、実をいえば系[11)]、 実際(は)、総じて、そもそも、道理で、なるほど、本当は、本来、もともと、やはり

4) 間淵・近藤(2021:4)によれば「機械による形態素解析を実施した結果に対して人手で形態論情報を修正したサンプル」を指す。

5) 次は、対象外とした連体用法と述語用法の例である。
ⅰ）堂々と反旗を翻して来たが、そもそもの最初の刺戟を与へたのは僕達の『猟人』である。
(読売新聞・読書界出版界・1925・p.4)
ⅱ）「ふうむ、それで、厭とおつしやるか」さも案外だといふやうに、 (『太陽』1925・鼬つかひ・p.153)

6) 「いったい」は説き起こしのほかに「質問・疑念」、「いかにも」は確認のほかに「比況・譲歩」の叙法を持ち合わせている(工藤2016：12-14)。

7) 現代語において頻繁に見られる「～いえば/いうと/いって」等の形式を伴った「正直を言はば」は1例見られる。
「心を尽すといふ誠に其意味ばかりを取らねばならぬ事で、正直を言はば箇様な事は致してはならぬ事でござる」 (百一新論・1874・10ウ)

8) 他にも「厳密には、詳しくは、技術的には、時間的には、文法的には、～によれば、～従えば」等がある。

9) 参考までに「案外」の語誌について『日本国語大辞典(第二版)』(第1巻・p.708)では「「案の外(ほか)」という言い方が「今昔-二五・九」にあり、「案のほか」を「案外」と表記したことによって生じた和製漢語と見られる」と説明されている。本調査において「案外(あんがい)」のもとになっている「案のほか」は1例のみ見られる。
例)「定めし親分も別段悦ぶならんと持参り差出せしに、案の外不興顔ゆゑ何か間が悪くそこそこにして立戻り気が済ぬから、(後略)」(読売新聞・1875-05-04-第92号・p.2)

10) 『日本国語大辞典(第二版)』(第1巻・p.743)の「あんのじょう【案定】」の項によれば「「定」は…の通り、様子などの意の名詞。「案の定」と熟して副詞として用いる」とある。本発表で用いる副詞の表記は基本的に『日本国語大辞典(第二版)』の記載に従うが、表記にゆれがある場合は工藤(1982・2016)、益岡・田窪(1992)、飛

用例の分析に際しては、上記の語類が明治・大正期資料の文語体・口語体においてどの文体に出現するのか確認する。これによって各語が文語寄りか口語寄りかという文体差が見られるであろう。また、その際、現代語のような文体的特徴を有するかについても比較して検討できる。現代語における副詞の意味用法を整理した飛田・浅田(1994)は共起する述語の種類だけでなく、文体面の特徴についても記述しており、本発表の考察対象に関連する文体面での言及が見られる。例えば、「概して、元来、総じて」について「ややかたい文章語」(p.115・p.131・p.222)であると述べている。また、「実は」の項には「日常会話でよく用いられる」との言及がある(p.185)。「そもそも」についても提示された用例や類義語の「いったい」との比較内容から日常会話に用いられる(pp.231-232)という文体的特徴が窺える。さらに「道理で」は「くだけた日常会話で用いられ」(p.333)、「やはり」も提示された用例やそれのくだけた表現類(やっぱり・やっぱし・やっぱ)の説明において「日常会話中心に用いられる」(pp.566-568)と記載している。このように、調査対象語の大部分はそれぞれ文体的特徴を有しており、近代資料にはどのような使用傾向を見せるのか分析する。

3. 近代資料の文体の異なりによる確認の叙法副詞類の使用状況

下記の表は本発表の考察対象の各語について、近代資料の文語体・口語体における出現数をジャンル別に集計したものである。各語における「▶」は口語寄り、「●」は文語寄り、「※」は文語と口語両方、「無表示」は非常に例が少なく、文体差の判定ができない場合を示す。

		初期口語(1871-1879)	雑誌 明六(1874-1875)	東洋学芸(1882)	国民之友(1887-1888)	女学雑誌(1894)	太陽(1895)	太陽(1901)	太陽(1909)	女学世界(1909)	太陽(1917)	太陽(1925)	婦人倶楽部(1925)	小説(1887-1926)	新聞(1875-1925)	落語SP盤(1903-1926)	教科書(1904-1918)	計
▶案外	文語														1			1
	口語						1			2		4		3	3			13
案の定	文語																	0
	口語														2			2
※一般に	文語		1				1	3	3						14		4	26
	口語	6					1	1	2				2		5		3	20
●概して	文語		10						1						13			24
	口語			1						3			1		2			7
▶元来	文語		6	4	1		1			2	1			2	17		6	40
	口語	39			3	1	1	1		2	2	4		7	3		1	64
●現に	文語		10	6	1	1	5	2	2		5				18		2	52
	口語	5				1	1		1			2		8	5	1	2	26
※事実	文語		2		1		1											4
	口語										2	1		1			1	5
実のところ(は)	文語																	0
	口語											1		3				4
▶実は	文語	3	1	1	2				4	1					8		5	25
	口語	15	1				4	3	4	1		4	3	24	16	10	4	89
実をいえば系	文語																	0
	口語													2	1			3
▶実際(は)	文語		1	2							1	1			8		1	14
	口語						3	3			3	6	1	18	13	1	3	51
総じて	文語														1			1
	口語				1			1										2
●そもそも	文語		69	16	5	9	3		1		1			1	17		23	145
	口語	10				1	1	1			2	4		1			1	21
▶道理で	文語														1			1
	口語	11										1				2		14
▶なるほど	文語		2		4		1	1						1	7		1	17
	口語	74	3		3	4	2	1	1		2	5	6	20	22	63	25	231
本当は	文語																	0
	口語												1			2		3
●本来	文語	1	4												1			6
	口語		1								1							2
▶もともと	文語																	0
	口語	11			1					1				2	4	1		20
▶やはり	文語	1	7		3	1									8		1	21
	口語	117	2		2	7	15	3	14	9	8	5	10	60	20	21	37	330

田・浅田(1994)を参考にしている。

11)「～いえば系」は「～いうと、～いったら、いって」等を含む。

上記の表に基づき、近代資料の文体による各語の使用状況を見ると、まず、確認の叙法副詞類は全体的に口語体に多く出現している。そのなかでも口語体に出現する使用率が8割を超えている語には「案外、道理で、なるほど、もともと、やはり[12]」がある。約6割以上も含めると、「元来[13]、実は、実際(は)」も口語的な副詞類といえる。その一方で、文語体に出現する比率が高い語には「概して、現に、そもそも」がある。「本来」の場合も用例数は少ないが、文語体での使用率が高い。次に、文語体・口語体の両方で用いられる語には「一般に、事実」がある。この他に、「総じて」は両文体における例が見られるものの、十分な量ではなく、使用実態の把握が難しい。なお、「案の定、実のところ(は)、実をいえば系、本当は」は用例が非常に少なく、文体差の判定を保留したものではあるが、得られた例からすれば口語文での使用例に偏って用いられている。

以上、調査の結果を概観したが、以下ではいくつかの例を挙げ、注目すべき点を述べる。まず、現代語の分析(前掲の飛田・浅田1994)で指摘された文体面の特徴に関連して、本調査においても「実は、道理で、やはり」は口語的な表現、「概して」は文語的表現であることが見て取れる。しかし、飛田・浅田(1994)では「元来」は文語寄りの語、「そもそも」は口語寄りの語と捉えられているが、調査の結果によると、近代資料における「元来」はやや口語寄りの語、「そもそも」はかなり文語寄りの語であることが確認できる。

(1) a. 同じ学校へかよへば私立私立とけなされるも心わるきに、<u>元来</u>愛敬のなき長吉なれば、
(文語・たけくらべ・1895・p.411)

b. こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。<u>元来</u>人間といふものは自己の力量に慢じて皆んな増長して居る。
(口語・吾輩は猫である・1905・p.13)

次に、「実は」に関連する表現として「実のところ(は)、実をいえば系」の例も少数ながら見られる。これらは「実は」と同じ語彙素「実」から形成された副詞句である。本調査において「実のところ」は4例、「実をいえば系」は3例、興味深いことに「実のところをいえば系」のような例も2例確認できる。

(2) a. 「さうともネ幾程母親さんの機に入ツたからツて肝腎のお前さんの機に入らなきやア不熟の基だしかしよくお話しだツた。<u>実は</u>ネお前さんのお嫁の事に就ちやア些イと良人でも考へてる事があるんだから是れから先き母親さんがどんな事を言ツておよこしでもチヨイと私に耳打してから返事を出すやうにしてお呉んなさいヨ」 (口語・浮雲・1887・p.65)

b. 「唯挨拶をしたばかりの男なら、私は<u>実の処</u>、打棄つて置いたに違ひはないが、快からぬ人と思つたから、其ままに見棄てるのが、故とするやうで、気が責めてならなんだから」と宗朝は矢張俯向けに床に入つたまま合掌していつた。 (口語・高野聖・1900・p.24)

c. この年になる迄、細々ながら私を養つてくれた私の原稿の、その三分の二或ひは四分の三迄は、<u>実を云へば</u>僕はそれきり貴女のお名前を忘れてゐたほどです。 (口語・蔵の中・1919・p.83)

d. 一体蝦夷の馬は性来温順殆んど猫の如くにて唯之に駕して馬首を其志す所に差向くれば夫にて足るべく候、<u>実の処を申さば</u>これ人、馬を御するにはあらで、馬人を御して駛ると可申候、 (文語・読売新聞・北海の名物・1901・p.1)

また、副詞の形成(副詞化)において「実は」に似ているものに「本当は」が挙げられる[14]。「本当は」の例は僅か

12)「やはり」の調査では代表形の「やはり」のほかに「矢張、弥張、矢張り、弥張り、猶且、ヤハリ、やっぱり、ヤッパリ」の表記例が確認できる。

13)「元来」の調査では「元来」と出自を共通にする「原来」が文語体資料に3例(紙幅上省略)見られる。

に3例(すべて口語の例)見られるが、参考までに「なら」を後接した「本当なら(ば)」の例も7例(同上)見られる。勧誘・申し出の叙法として機能する「何なら」と比較して、「なら」を後接した「本当なら」を一つの副詞として認められるかは議論の余地がある。

(3) a. 桃の花咲く三月が、雑誌の上に訪れてきました。がほんたうは、一月の中旬、寒さの最中なのであります。 (口語・『婦人倶楽部』1925・三月来る・p.255)

b. 「あら、さう、ほんとうなら随分お安くないわね」「ほんとうならとは何だい。疑りつぽい奴だな」 (口語・腕くらべ・1916・p.19)

なお、「実は」と同様、「本当は」の場合も語彙素「本当」からなる「本当のところ(は)、本当をいえば系」という類似表現を有し得る。ただし、今回の近代語の調査範囲では用例が得られなかったが、現代語においては使用例が見られる[15]。

4. おわりに

本発表では明治・大正期資料における確認の叙法副詞類について文語・口語の別による文体的出現傾向について考察した。今後さらに、近代資料における特定の形式と呼応する典型的な叙法副詞類(例えば「きっと、どうも、どうぞ、決して」)の文体的な出現傾向について調査するとともに、用例収集の範囲を広げ、昭和以降から現代語における叙法副詞類の文体別の使用状況も明らかにしていきたい。

【調査・引用資料】

◎明治・大正編Ⅰ雑誌／Ⅱ教科書／Ⅲ明治初期口語資料／Ⅳ近代小説／Ⅴ新聞／Ⅵ落語SP盤…国立国語研究所(2023)『日本語歴史コーパス』バージョン 2023.03 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/、◎『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ、中納言2.7.2 データバージョン 2021.03、https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search)、◎辞書類:『日本国語大辞典(第二版)』小学館、『基礎日本語辞典』角川書店、飛田・浅田(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版

【参考文献】(紙幅の都合上、本文に取り上げた文献のみ載せる)

市村太郎(2012)「副詞「たいそう」の変遷—近代語を中心に—」『国文学研究』167, 早稲田大学国文学会, pp.83-94

市村太郎(2015)「雑誌『太陽』『明六雑誌』における程度副詞類の使用状況と文体的傾向」『日本語の研究』11-2, 日本語学会, pp.33-49

林禔映(2022)「明治・大正期資料の文体差による評価副詞類の使用実態」『日本語教育』102, 韓国日本語教育学会, pp.131-141,

14) 関連して、「事実」に「は」の付いた「事実は」の形も4例見られる(紙幅上省略)。形態面でみると、「事実は」は疑いのない真のことを表す名詞から副詞化した「実は」に類似している。しかし、「実は」に比べて「事実」において「は」は脱落したほうが副詞らしくなるように思うが、「(真実性の)名詞＋は」から形成される副詞類についてはなお後考を期したい。

15) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の調査では「本当のところ」は217例、「本当のいえば系」は10例見られる。

工藤浩(1978)「「注釈」の副詞をめぐって」国語学会昭和53年度春季大会口頭発表
(http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~kudohiro/tyuusyaku.html)
_____(1982)「叙法副詞の意味と機能―その記述方法をもとめて―」『国立国語研究所報告71・研究報告集』3, 国立国語研究所, pp.45-92
_____(2016)『副詞と文』ひつじ書房, pp.1-80
小柳智一(2019)「副詞の入り口―副詞と副詞化の条件―」森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を拓く』くろしお出版, pp.300-324
西田隆政(2020)「日本語の「文体」研究の「用語」を見直す―「口語体」「文語体」と「話しことば」「書きことば」と「位相」―」『甲南国文』67、甲南女子大学、pp.112-124
野村剛(2011)『話し言葉の日本史』、吉川弘文館、pp.4-11
益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版、pp.41-48
間淵洋子・近藤明日子(2021) 国立国語研究所「第8回コーパスを用いた言語分析」
(https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sougoushomotsu.web/text/kokugo_8_kondou.pdf)

明治･大正期の落語資料における待遇表現
―人称代名詞を中心に―

宋世連(全南大)

1. はじめに

本発表は、明治期･大正期の落語を対象に、その時期に使われた一人称代名詞の待遇価値を明らかにすることを目的とする。落語を対象に一人称代名詞を扱った先行研究には、祁(2007)や山田(2012)などがあるが、本発表では特に、プラス及びマイナス待遇表現の観点から分析する。第2節では、調査対象及び待遇価値判断の基準を提示する。第3節では、第2節で示した基準に従い、明治･大正期の落語資料において観察された一人称代名詞の待遇価値を分析する。

2. 調査方法

『口演速記 明治大正落語集成』全7巻(以下『集成』と表記)[1]に収録されたすべての作品を調査対象として、まず『集成』で観察される一人称代名詞を抽出する。[2]次に、収集した一人称代名詞は共起する文末表現形式の丁寧度を基準に分類する。それと共に、該当の一人称代名詞が使われた文脈的意味も観察する。また、例文分析における明治･大正の時代的状況を基に、以下のような分析基準を設け、一人称代名詞の待遇価値について調べる。

1)内的関係性: 話者及び聴者の持つ属性
- 生得的属性: 性別、年齢
- 社会的属性: 地位、職業

2)外的関係性: 話者の聴者に対する目的意識及び意図性
- プラス及びマイナス待遇表現[3]: 話者の心理状態、ニーズ

---

1) 落語が日本近代文学に及ぼした影響は非常に大きい。落語は文学作品が文語文から口語文に移行する言文一致運動に大きな影響を及ぼし、落語速記は直接的な橋頭堡の役割を果たした。『集成』は明治･大正期の落語雑誌の中で最高峰と呼ばれる『百花園』と『文芸倶楽部』に掲載された落語を中心に編纂された本で、当時の言語習慣や言葉遣いなどを忠実に採録した資料と評価される。

2) 各落語の対話部分のみを対象とし、マクラの部分は除く。

3) 西尾(2015)でも、対象を低く悪く扱う表現を一括して「マイナス遇待表現形式」と称している。ここには言語的表現の他に非言語的表現形式までが含まれる。このような用語及びその概念は本発表と一部重なるが、本発表では人称代名詞を中心として<表1>のように丁寧度及び謙譲度を基準に提示している点、具体的な状況で話者と聴者との関係性を中心に把握しているという点で区別される。

–スタイルシフト[4]: 話者の心理変化及び状況の変化

2)外的関係性のプラス･マイナス待遇表現は、相手及び話者自身に対する丁寧度と謙譲度の高低により区分するが、これは話者と聴者との関係上の有･不利とも関係する。これに関して表に示すと、次のようになる。

<表1> プラス及びマイナス待遇表現

	意味	具体的場面	待遇価値評価
プラス 待遇表現	相手に対する丁寧度: 高 自分に対する謙譲度: 高 ⇒話者と聴者の関係に得	褒め･感謝･謝罪 配慮･依頼など	高
マイナス 待遇表現	相手に対する丁寧度: 低 自分に対する謙譲度: 低 ⇒話者と聴者の関係に損	怒り･罵倒･拒絶･無視 虚勢など	低

3. 一人称代名詞の待遇価値分析

本節では、内外的関係性の条件に該当する主要な一人称代名詞について調べる。[5]

3.1 内的基準

3.1.1 男性

･ワタクシ: 下位者→上位者

(1) 泰 「ウム、コリヤ六兵衛、其方は重き掟(おきて)を知りながら過ちたりとも鹿を殺した罪は言語道断であるぞ。生国(うまれ)は何処(どこ)ぢや」

六 「恐れながら私(わた)くしは……」 (春日の鹿(二)泰↔六)[6]

⇒ 話者の六が町奉行に取調べを受け、自分を弁論している場面

･ワタシ: 下位者→上位者

(2) 小僧 「子供だッて一概には云へません、俺(わたし)見たやうナものも有ます。」

(成田小僧(一)小僧→若旦那)

⇒ 小僧が若旦那に

･テマイ[7]: 下位者→上位者

(3) 久 「エー……先生……手前(てまい)に附(つ)かんことをうかゞひますが……尊公(あなた)も御好きで御坐い

---

4) 話者の心理的変化や状況の変化によって人称代名詞を転換する場合が多く見られるが、このようなスタイルシフトは該当の人称代名詞の待遇価値を把握するのに重要な要素である。

5) 3 つ未満の例は分析対象から除外した。例)みども、こととら、よ、お宅様、わて　など

6) 用例の出所は(作品名(巻)話者→聴者)式で表記し、以下同様であり、下線は筆者が加えた。

7) てまいは待遇価値が高い方に属する一人称代名詞で、てまいの語源となるてまへ(てまえ)が2例、てめへが3例観察される。それぞれの待遇価値を見てみると、てまへはてまいと似た様相を示すが、てめへは夫婦喧嘩をする時に、夫が妻に対し自分を称する際に使うなど、非常に低い待遇度を示す。

ますが、私方の主人も囲碁は好きで御坐いますなア」　(碁盤割(二)久→格)

⇒ 大店の手代である清が格(家来出身)に、店の大金の行方を謹んで尋ねる場面

・**ワシ**: 上位者→下位者、 同等の関係、 下位者→上位者、夫→妻

(4) 主　「(前略)何の彼んのと剛情は言ふ様な者の、私の様な者でも亭主と思つて使ひに行く所は感心だよ……(後略)」　(三百餅(四)主→女)

⇒ 夫の主が妻の女に、能力のない夫だが自分の頼みを聞き入れてくれたと感動

・**ワッシ(ワッチ)**: 下位者→上位者(話者が職人の場合が全体用例の約20%を占める)

(5) □　「エー親方聴いてお呉んなさい。小哥達が仕事をして居ると此野郎奴が彼処に来やがつて、小哥等の仕事が出来るとか出来ぬとか生意気の言を吐ひやがりましたから……」　(大黒(二)□→親)

⇒ 大工の□が親方に訴える

・**オレ**: 親密で対等な関係、上位者→下位者、 夫→妻、 独り言

(6) 旦　「アレダもの……コレ、汝はまだ乃公に匿して黙つて居るな」 (隅田の馴染め(一)旦→小)

⇒ 話者の旦那が店の金を盗んだ小僧に怒っている

・**オラ**: オレに類似、助詞「は/か」が後続することが多い(「おらア」などの長音で発音)

(7) 客　「大層な景気だな……乃公兄弟分の的を拝見したいが、お供は出来無いかへ……」　(美人の乳(五)友→客)

⇒ 友と客は義兄弟の間柄

・**オイラ**: オレに類似

・**ボク**: 相手に対する尊大と自らに対する自尊の意味が内包(尊大語の性格)、特に『集成』では下層話者が使用する場合、自分を誇張したりいばる意図がうかがえる。

(8) 小　「僕一人で喰べるので」

番　「僕なんて言ふな、生意気に・・・・・・其なに食べるか」　(「仏だん」(五) 小↔番)

⇒ 小僧が番頭に

・**ワガハイ**: 自尊の意味が内包、下層話者は観察されない (cf)ボクと共起することもある)

(9) 甲　「それは君、あまり頑固だ。わが輩も桜島へ妻子を立ち退かして出張したが、君は子をもたんから左様に思し召さうが、それは御承諾なされたがよからう……」　(御船の戦争(五)甲→香)

⇒ 官軍同士の対話

・**ワタイ**: 計11例中6例が男性、親交のある同等の関係、3例は子供である話者が母親に対して

(10) ○　「彼の……だつて皆が……私斗りぢや無い、皆が然う云ふのだよ、阿父さんが無いつて……て遣らう。彼のね、私い皆に然う言つて遣らう。(후략)」　(子供の洋行(五)○→花)

⇒ 幼い息子(○)と彼の母親(花)との会話

・ワレ: 友人の仲、夫→妻（総6例）

(11) 三　「ナーニ平常乃公が堅くして居る御華主だから、難有いことにや快く貸して下すつたんだ」　(江戸ツ子(五)三→女)

⇒ 夫(三)が妻(女)に、以後妻に怒るときはオレに切り替え

3.1.2 女性

・ワタクシ:下位者→上位者、(上層の夫婦の間で)妻→夫、初対面の相手に

(12) 妻　「妾の差し上げた御茶は御意に入りますまい。良人の御意に叶つた処で召し上がつた方が宜しう御坐います」　(星野屋(一)妻→平)

⇒ 大富豪の夫婦の間で妻(妻)が夫(平)に

・ワタシ: 妻→夫(社会階層に関わらず)

(13) 妻　「(前略)素より合せ者は離れ者我生だつて宿小屋のない人間ぢやアないから離縁状を出してお呉れ」　(子別れ(一)妻→亭)

・ワシ: 話者の大半が老人

(14) 婆　「馬鹿なこと云ふな、俺は和郎も知つてる通り若けへ中から鯉は嫌ひだ」　(二十四孝(二)婆→熊)

⇒ 年老いた母親が自分の息子に

・おれ: 男性に劣らぬ勇猛性を示す(計521例中、女性話者は4例(1%))

(15) お勘「夫れからお前様誰も喰はねへなら乃公が喰ふちうて、お勘ちふ女が三日ばかりで一人らで喰つちまつたちふことでがす」　(甲子待(三)お勘→町の人々)

⇒ 話者のお勘が、千年古狸を捕まえて煮た汁を誰も食べないと大声で叫ぶ

・ワタイ: 主に女性話者(計11例中、女性話者が5例(いずれも遊女の身分))

(16) 小　「サア、梅喜さん此方へお出で……サア一ぱいお食り。妾がお酌するから」　(心の眼(五)小→梅)

⇒ 遊女が客に

・ワチキ: (女性話者のみ)計4例の中、遊女身分の話者が3例(図々しい人物として描写)

(17) 染　「ハイ妾が染と云ふの……」　(品川情死下の巻(二)染→親方)

⇒ 遊女が客に(話者の初は恋人と心中しようとしたが、計画的に自分だけ生き残った人物)

3.2 外的基準[8)]

3.2.1 プラス待遇表現

・ワタクシ: 丁寧・謝罪など

(18) 娘　「妾も失礼を致しまして。何卒御勘弁を遊ばしまし」　(連理の梅枝(一)娘→徳)

---

8) 外的関係性でプラス及びマイナス待遇表現が観察される一人称代名詞に関して、これらの一人称代名詞が話者の特定の心理状態を直接的に表現しているというわけではない。ただし、本稿では、話者の心理及び状況の変化により、当該の一人称代名詞の使用傾向が明確である場合またはある一人称代名詞に転換して使用する場合について記述する。

⇒ 道中に偶然ぶつかった相手に謝罪

・**ワタシ**: 丁寧・依頼など

(19) 爺　「モシ女房さん……騙術たア何だ……騙術たア何だ……私しア此処のところへ置いたに相違ない……騙術たア何だ……」　(最う半分(五)爺→妻)

⇒ 話者の爺が自分の金袋の行方を問う。 以前の状況では、ワレとオレ使用(スタイルシフト)

・**テマイ**: 丁寧・依頼など

・**ワシ**: 丁寧・配慮など

(20) 爺　「(前略)何うもハヤ誠に済まねへで御坐エますが、然云ふ貴顕方が来るか来ねへか知らねへもんですから私あイ、ハー秋刀魚を焼きました。(後略)』

(目黒のサンマ(二)爺→×)

⇒ 魚を焼いていた爺が聴者の×(家来の身分)へ。 後で怒るときは、オラと転換(スタイルシフト)

3.2.2 マイナス待遇表現

・**オレ**: 憤慨・怒りなど

(21) 油屋「ナニー、小哥も江戸ツ子だ、忌な言を云ひなさんナ。(中略)是は乃公の所有だから叩ツ毀して仕舞へば済むんだ、何にを云やアがる。上方贅碌めエ、何にをキヨロキヨロ見やアがるんでエ」　(波天奈廼茶碗(一)油屋→金)

⇒ 話者の油屋が売ろうとしていた茶碗を見て聴者の金に不格好だと言われて怒る

・**オラ**: オレに類似

(22) 作　「是ら、能くもハア、己ア娘エおツ殺したナ、此の野郎……太助へ……打ツ擲け……」　(泗の医師(五)作→医)

⇒ 作の娘が聴者の医からもらった薬を飲んで死ぬ。憤慨。この以前の場面ではワシを使用(スタイルシフト)

・**オイラ**: オレに類似

(23) 主　「手前のやうな奴があるから、己らが家の衰微になる、(後略)」

(おかめ団子(六)主→藤)

⇒ 団子屋の主人が客に不親切な従業員(藤)を叱る

4. おわりに

文末表現形式による一人称代名詞の待遇度を表で表すと、次のとおりである。

<表2> 文末表現形式による一人称代名詞の待遇価値

待遇価値	高 ←			→ 低
文末表現形式	ーデゴザイマス	ーマス	(ーデゲス)	ータ
一人称代名詞	わたくし てまい　わっち わたし（ぼく） わし （わがはい）			おれ わたい （ぼく）われ わたい （わがはい）

『集成』で観察される一人称代名詞の中で待遇価値が最も高い一人称代名詞は「わたくし」であり、次に「てまい」、「わたし」が挙げられる。高い待遇価値の一人称代名詞の性別使用頻度は、女性は「わたくし」が69%、男性は「てまい」が98%を占めた。男性が主に使う一人称代名詞は「おれ」と「わし」であり、これらは年齢別に使用実態の違いがうかがえる。女性が最も多く使う一人称は「わたし」であり、これは内的･外的関係性に関する要因の影響を大きく受けない。また、女性は男性に比べ待遇価値の高い一人称代名詞を使う傾向がある。外的関係性でのスタイルシフトは主に男性に見られ、特に「おれ系」と「わし系」との間で観察される。

【参考文献】

山田実樹(2012)「鈴木重吉の童話作品における一人称代名詞」『論叢 国語教育学』3, 広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座, pp.37-47

角岡賢一(2021)『上方落語にみられる待遇表現』くろしお出版

祁 福鼎(2006)「明治時代語における自称詞―その全体的様相」『文学研究論集』26, 明治大学大学院文学研究科, pp.25-43

真田信治 他(1992)『社会言語学』おうふう

鈴木孝夫(1972)「日本人の言語意識と行動様式―人間関係の把握の様式を中心として―」『思想』572, 岩波書店, pp.102-113

西尾純二(2015)『マイナスの待遇表現行動 対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮』くろしお出版

野村雅昭(2000)「口語資料としての明治期落語速記」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』46, pp.37-52

三輪　正(2000)『人称詞と敬語―言語倫理学的考察』人文書院

韓国語話者の「ながら」の過剰使用の原因に関する一考察

崔真姫(白石大)

1. はじめに

文法書では「PながらQ」は付帯状況の一つで、ある主体が動作Qを行うときに同時に別の動作Pを行うとし、なお、Pの特性について時間的な幅がある動作であると説明している。

(1) 彼はいつもテレビを見ながらごはんを食べる。
(2) 辞書を弾きながら英語を読むのは疲れます。　庵他(2000:193)

村松(2019)では日本語学習者は「ながら」の用法「同時並行、状況的意味[1]、手段的な意味」のうち、状況的意味の正答率が低いと報告している[2]。

(3) 本を読みながら寝てしまった。　村松(2019:57)

韓国語話者の場合、母語の干渉による誤用が多いと予想されるが、本研究では韓国語話者の「ながら」の誤用パターンについて分析し、その原因を考察したい。

2. 先行研究

2.1 日本語学における「ながら」の研究

三宅(1995)は付帯状況「ながら」「たまま」「て」の差異を説明し、「ながら」「たまま」「て」は付帯状況として成立するためにはアスペクト的に一時点的なものであってはならないと指摘している。「ながら」の成立条件について次のように述べている。

「過程」を持つ動詞の場合、付帯状況として成立する。ただしその場合、主節に対する相対的

1) 村松は状況的意味をV1の動作が進行している状況下でV2の瞬間動詞が生じることを表すとしている。
2) 全体の正答率は39.4%であり、中国人学習者は28.9%、その他学習者は57.7%であった。韓国人学習者はいなかった。

な「過程」であってよい。「過程」を持たない動詞の場合は基本的に不成立であるが、繰り返しの意味の場合、または「維持」を持つ動詞の場合は成立することがある。これらは「過程的な持続性を持つ場合に成立する」としてまとめることができる。尚、動詞が「維持」を持つ場合は、タママ、テ[3)]に置き換えが可能な場合がある。 三宅(1995:450)

鄭・坂口(2001)では小説などの日本語と韓国語の対訳資料を用いて「ながら」と「면서」の対照を行った。その結果、「면서」のほうが「ながら」に比べ使用上の制約がなく、主節と従属節の時間関係に幅があっても使えることが明らかになった。具体的には4点にまとめている。

・「면서」は「ながら」を持つ同時進行と逆接の他に、始点を表す用法を持つ。
(4) 나이가 사십이 되면서부터 기억력이 많이 떨어졌어요.
＊年が四十になりながら記憶力がかなり落ちました。
・「면서」は「ながら」の逆接の用法を含む一段広いカテゴリとして相応・不相応性を示す用法を持つ。
(5) 가족과 함께 있으면서 가족을 위해 뭔가를 해 주고 있습니다.
＊家族といっしょにいながら家族のために何かをしてあげたいです。
・「ながら」は主節に出来事が持続性を持たなければならないが、「면서」にはこのような制約はなく、瞬間的な出来事でも主節に来ることができる。
(6) 좀 더 여기에 있으면서 동정을 살펴보겠습니다.
＊もうすこしここにいながら様子を見ます。
・従属節の述語が表す時間的な幅が広く、主節の述語が表す時間的な幅との差が大きい場合、「ながら」は非文になりやすい。一方、「면서」は従属節が主節に対して背景のような働きを持つことがある。
(7) 부검하면서 이런 솜씨는 처음이에요.
＊解剖しながらこんな腕前は初めてです。

2.2 日本語教育における「ながら」の研究

韓(2008)は「ながら」はごく早い時期に導入されているが、意味と構文上の制約があるあめ、誤用が意外と多いと指摘している。韓国語話者を対象に、韓国語の「면서」では文が成立するが、日本語の「ながら」では成立しない文について正誤判断の調査を行っている。その結果、最も判定の誤用率が低かったのは「瞬間動詞、自動詞」であった。「ながら」の正解率が低い(50%以下)例をまとめると「繰り返し、瞬間動詞、自動詞、主語の不一致」であった。

(8) 繰り返し　お金を借りながら、なんとか生活した。
(9) 瞬間動詞 ＊おじいさんは老眼鏡をかけながら新聞を読みます。(→かけて)
＊校門を出ながらなわとびをした。(→出る時)
(10) 自動詞　＊心臓がどきどきしながら、体を震わすほどでした。(し、)
(11) 主語の不一致　＊私は本を読みながら、彼は手紙を書きます。(→読み、)

3) 三宅(1995:447)は「て」は付帯状況だけでなく、「手段・様態、継起、原因、並列」などを意味を表し、「ながら」や「たまま」に比べて、付帯状況を表す場合の制約が多いと述べている。

坂口・鄭(2006)では日本語学習者の作文・談話資料を分析している。「始点、背景性」の誤用は中級・上級レベルになると減少するが、「相応性、不相応性、瞬間性」については顕著に減少するとは言えない、つまり、習得しにくいものであると報告している。「ながら」と混同する形式を見ると、「始点、相応性、不相応性」において「て」を使うべきところに、「ながら」を間違って使用していることが確認された。

そして、持田・伊吹(2017)も韓国語話者の場合母語転移の負の干渉が起りやすいと指摘している[4)]。韓国語「면서」に「ながら」が対応しない5つを対象に授業で指導を行った後、その効果を明らかにしている。同時進行は指導前にも正解率が高く、「くなる、ないながら、主語の不一致」においては指導の成果が大きいと確認された。一方、瞬間動詞は指導の効果があまりないと報告している。

(12) 子犬は死にながら、動かなくなりました。(○・×)　　(持田・伊吹、2017:25)

以上をまとめると、韓国語話者は従属節の「始点、瞬間動詞」に対して「ながら」を過剰使用する傾向があり、「ながら」の習得が困難であるということが明らかである。

3. 韓国語話者に見られる誤用パターン

3.1 調査の対象者

H大学の日本語作文の授業(2年生、28名)で提出された作文から「ながら」誤用の例をまとめている。この授業ではグーグルスプレッドシートに記入するようにし、共有している。今回は「ながら」は12例のみであり、そのうち、正用は3例、誤用は9例であった。そして、2次調査では、韓国語話者(11名[5)])に日本語作文で確認された誤用例を用いて、穴埋めテストを実施している。

3.2 調査結果

日本語作文[6)]に現れた誤用の分析から従属節の動作動詞「勉強する、見る、作る、見物する、散歩する」においても「ながら」を使ってしまう傾向があると報告している。付帯状況、継起、原因の「て」にも「ながら」を使ってしまうパターンが見られた。これらは主節の制約による不自然さであると考えられる。

(13) どんな時に日本語の勉強が楽しいと感じますか。
　アニメを見ながら(→**見て**)内容がわかる時に楽しいです。
(14) 一般的にどんなことをしますか。
　みんなが手を握って丸い形を作りながら(→**作って**)歌を歌います。
(15) 日本語を勉強して大変だった経験、失敗した経験、残念だった経験はありますか。

---

4) 先行研究をまとめると、7つ「同時進行、逆接、始発点、手段、理由、相応、不相応」において韓国語は「면서」は使えるが、日本語の「ながら」は使用できないということが指摘されている(持田・伊吹、2017:22-23)。持田・伊吹(2017)は教育の観点から「ながら」に「면서」が対応しない用法について大まかな5パターンに分類している。
(1)自分から行動・動きではないとき、(2)前の文と後ろの文の主語が違うとき、(3)く/になりながら(変化)、(4)ないながら(否定形)、(5)原因・理由ときっかけの話題のときを対象に調査を実施している。
5) レベルはN3からN1まででバラツキがある。
6) 日本語作文は2023年度1学期に行われた。

日本語を勉強しながら(→**日本語を勉強していて**)大変だったことは文法に合わせて話すことが難しかったです。

(16) 一番印象に残っているのはどんなことですか。クリスマスマーケットで見物しながら(→**クリスマスマーケットを見物して**)、バンショーを飲んだのが一番記憶に残っています。

そして、「～時に」を使うべきところに、「ながら」を使用している誤用がある。「～時に」は主節の出来事に関わる時を表すものであるが、韓国語話者は従属節の事態が進行する途中、主節の事態が起り得るので、同時進行と認識する可能性が高いと考えられる。

(17) どんな時に日本語の勉強が楽しいと感じますか。
日本のドラマを見ながら(→**見ている時に**)知っている単語を見つけた時です。

(18) 一般的にどんなことをしますか。
一般的に久しぶりに連絡が取れたり、会った友達や親戚や同僚と別れながら(→**別れる時に**)「今度ご飯食べましょう」と話します。

2次調査の結果、最も誤用が多かった例を以下に挙げる。

(19) 日本語を勉強して大変だった経験(けいけん)、失敗(しっぱい)した経験、残念(ざんねん)だった経験はありますか。

＊日本語を(勉強しながら)大変だったことは文法(ぶんぽう)に合わせて話すことが難しかったです。

(20)＊ソウルはハンカンが有名で(散歩しながら)ラーメンを食べることができます。

韓国語話者は「ながら」をある程度理解しているが、従属節の持続性より主節の制約が習得困難なようである。

4. おわりに

本稿では韓国語話者の「ながら」の誤用パターンとして「ながら」の過剰使用について分析した。中・上級レベルでは「ながら」の持続性について理解しているが、特に主節の制約について注意する必要があると考えられる。

【参考文献】

庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク, pp.193-194

坂口昌子・鄭恵先(2006)「ナガラ節に見られる日本語学習者の母語転移―韓国語母語話者が用いる「ながら」の始点的用法を中心に―」『京都外国語大学論叢』京都外国語大学国際言語平和研究所, pp.191-198

鄭恵先・坂口昌子(2001)「誤用分析にもとづく「ながら」と「면서」の比較―始発の用法と述語の持続性を中心に―」『世界の日本語教育』11, 国際交流基金, pp.153-166

韓先熙(2008)「日本語の「ながら」と韓国語の「면서」の比較対照」『日語日文学研究64輯』韓国日語日文学会, pp.

281-298
三宅知宏(1995)「～ナガラと～タママと～テー付帯状況の表現ー」『日本語琉意義表現の文法(下)』くろしお出版, pp.441-450
村松由起子(2019)「「ながら」の周辺的な意味用法に関する一考察」『日本学刊』22号, 韓国日本語学会, pp.49-64
持田祐美子・伊吹早耶香(2017)「韓国語母語話者への「マス形+ながら」の効果的な指導ー「면서」との対比を通じてー」『日本語学研究』52, 韓国日本語学会, pp.19-31

韓国人日本語学習者の日本語教育の実態と問題点
―謙譲語「ご＋漢語名詞＋する」を中心に―

上野由香子(全州大学校)

1. 本稿の背景と目的

日本語において敬語表現は人間関係を円滑に築く上で大変重要なものである。この敬語表現はその他の言語にもなんらかの形で存在しており韓国語も同様である。しかし、韓国語の場合、尊敬語は発達しているが謙譲語はそうでもない(景2010、油谷2012:196など)。また、韓国語には「お＋動詞の連用形＋する」や「ご＋漢語名詞＋する」のような添加形式は存在しない(曺2003)。そこで、本稿では韓国人日本語学習者(以下、KLとする)を対象として、謙譲語「ご＋漢語名詞＋する」の日本語教育における実態と問題点を分析する。

2. 研究の概要

本稿の対象者であるKLは韓国のJ大学、日本言語文化学科に在籍する3年生35人である[1)]。調査は2023年10月の第6週目に対面式で行なった。KLは2年生で謙譲語を学習済みである。しかし、調査の前に改めて謙譲語について学習しさらなる理解を促した。また、わからない単語がある場合は辞書で調べてもいいことにした。調査内容は全13問である。そのうち12問は韓国語で書かれた文を日本語にする問題である。13問目は「ご＋漢語名詞＋する」の形式で自由に文を書くものである。以下はその一例である[2)]。

다음 겸양어를「ご+한어 명사+する」의 형태로 일본어로 쓰세요. 겸양어는 자신을 낮춤으로써 상대방을 높이는 표현이다. 3) A:월요일 오후라면 시간이 비어 있습니다. B:그럼 월요일에 **방문하겠습니다.** 4) (모두 앞에서) 저희 가족을 **소개하겠습니다.** 5) 티켓을 **예매해 드릴까요**? 9) (A사장님을 대접하다.) 여기는 제가 **계산하겠습니다**. 10)차를 **준비해 드릴 테니** 잠시만 기다려주세요. 겸양어「ご+한어 명사+する」의 형태로 자유롭게 문을 만드세요. 13)

<図-1> 調査に用いた謙譲語の問題例

1) 紙幅の関係上、詳しい属性は発表時にPPTにて提示する。
2) 紙幅の関係上、詳しい調査内容は発表時にPPTにて提示する。

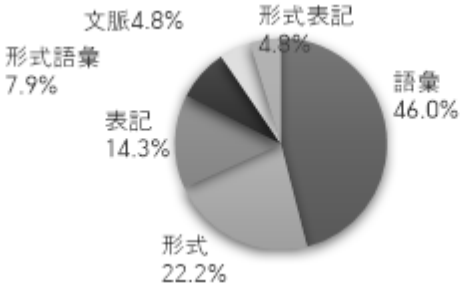
調査に使用した12問は筆者が任意に選定した14教材の例文や練習問題である[3]。14教材の「ご＋漢語名詞＋する」の漢語名詞を頻出度の高い順に並べると案内(10例)、連絡(6例)、紹介(4例)、説明(4例)・確認(3例)である。さらに、手配・会計・用意・利用・訪問・予約・報告が1例ずつである。これら漢語名詞が添加された「ご＋漢語名詞＋する」の文を筆者が韓国語にする。また、謙譲語が使われる場面がわかりにくいと考えられるものには目上の人との対話文とした。

このようにして得られた回答を丁寧に書き取り誤用判定を行なう。誤用判定には10人の日本語教育に携わる日本人教師に協力を依頼した。彼らの日本語教師歴の平均年数は9.2年で男女比は1対9である[4]。これらの誤用を語彙、形式、文脈、表記にわける。例えば、語彙の誤用は漢語名詞「報告」を「告」とするものである。形式の誤用は「ご＋漢語名詞＋する」ではないものとする。文脈の誤用は「車をご手配しますので少々お待ちください」を「ご準備しましょうから」とするものである。表記の誤用は「ご報告します」を「ごほこくします」とするものである。また、「ご予約する」を「ご予買させていただいてもよろしいでしょうか」とするのは形式と語彙の誤用が重なったもので形式語彙とする。最後に、「ご説明する」を「ご説明もしあけます」とするのは形式と表記の誤用が重なったもので形式表記とする。

これらの誤用について、母語の影響なのか教材の影響なのかを見ていく。先述した通り、韓国語の謙譲語は日本語ほど発達していない。そのため、様々な母語の影響による誤用が予想される。また、教材はKLにとって最も身近な存在であり、学習には欠かせないツールである。そのため、教材の分析は大変重要である。そこで、本稿では母語と教材の分析を行ないKLの誤用にどのように影響しているか実態と問題点をみる。

3. 結果

問題1～12の結果は次の通りである。誤用を分類すると、語彙29例(46.0%)、形式14例(22.2%)、表記9例(14.3%)、形式語彙5例(7.9)、文脈3例(4.8%)、形式表記3例(4.8%)の順に誤用がみられた。そこで、特に多くみられた語彙、形式の誤用をみていく。



<図-2> 誤用の結果

次に、問題13の結果より、語彙の誤用が8例(57.1%)でもっとも多く、次に文脈の誤用が4例(28.6%)、形式と表記の誤用がそれぞれ1例(7.1%)の合計14例であった[5]。以下に代表例をあげる。なお、誤用には下線部を引

3) 紙幅の関係上、調査に使用した14教材は発表時にPPTにて提示する。
4) 日本語教師歴は5～10年が8人、11～20年が2人である。
5) ()は誤用率を示す。

き、()はどのような誤用なのかを示す(以下同様)。

(1)　私から社長にご伝達します。　(語彙)
(2)　私が先輩の代わりにご完成します。　(文脈)
(2)　明日の会議の前にご連絡をします。　(形式)
(4)　ケーキをごじゅうんびします。　(表記)

自由文の問題13では最も多くみられた語彙の誤用をみていく。

4. 分析

分析では語彙と形式の誤用、自由文を書く問題13からは語彙の誤用をみる(以下、自由文の語彙の誤用とする)。

4.1 語彙の誤用

語彙の誤用のうち、問題9「ご会計する」の誤用が18例で最も多い。次に問題5「ご予約する」が4例で多くみられる。

(5)　ここは私がご計算します。　(語彙)
(6)　チケット、ご予買しましょうか。/ご先買しましょうか。/ごよまいしましょうか。　(語彙)

(5)は漢語名詞の部分に「計算」を入れたものである。韓国語では代金を支払うとき「계산하다」を使うため、そのまま日本語にも当てはめた結果と言える。

(6)は漢語名詞の部分に「予買(2)・先買(1)・よまい(1)」を入れたものである[6]。韓国語の「예매」を辞書で引くとはじめに「予買」、その次に「先買、予約、予売」と出てくる[7]。これは「예매」がわからないKLが辞書で「예매」を引いて上位に出てきた「予買」をそのまま書いていることがわかる[8]。

以上より、「ご会計する」「ご予約する」の語彙の誤用は母語の影響を受けていることがわかる。

4.2 形式の誤用

形式の誤用のうち、問題3「ご訪問する」と問題9「ご会計する」が最も多くそれぞれ4例である。

(7)　それでは月曜日にご伺います(2)。/ご訪問伺いします。/ご訪問。　(形式)
(8)　ここは私がご払いします(3)。/お会計いたします。　(形式)

(7)のうち、まず「ご伺います」をみていく。これは「訪問する」の交替形式の謙譲語「伺う」の連用形に、接頭語「ご」をくっつけた「ご+動詞の連用形」である。動詞の連用形で完了しているばかりか「訪問する」の交替形式

6)「よまい」は予=よ、枚=まい、ということが追加調査で確認済みである(2023年10月15日現在)。
7) e-hanja 사전(http://www.e-hanja.kr/)2023年10月15日午後2時検索
8) 追加調査として「티켓을 예약해 드릴까요?」ではどうなるかをみた(2023年10月15日現在)。結果は誤用率が2.9%となりそのほとんどが「ご予約しましょうか」であった。1例だけ「ご予約してあげますか」がみられた。

の謙譲語「伺う」を入れている。次に「訪問伺い」についてである。これは「訪問」と「伺う」を複合化させ、その連用形「訪問伺い」を漢語名詞の部分に入れている。最後の「ご訪問」は途中で書き忘れている単純な誤用だろう。

(8)は漢語名詞の部分に動詞の連用形や接頭語「お」を入れている。まず、「ご払いします」をみていく。これは動詞「払う」の連用形を入れており、漢語名詞と動詞のどちらを入れるかをきちんと理解していないことがわかる。次に、「お会計」をみていく。これは接頭語「お」をくっつけたものである。この「会計」の漢語名詞は例外として「お会計」「ご会計」のどちらも使われる。「会計」のようにどちらも使えるものを教材で取り扱う場合、学習者が混乱しないように補足説明をする必要がある。教材を分析したところそのような補足はみられなかった。つまり、教材の影響といえるだろう[9]。この学生に追加調査をしたところ、「ご会計」より「お会計」が正しいので「お会計」としたということだった。「ご」で書かなければならないなら空欄で提出したと答えている。本調査の接頭語は「ご」であるため形式の誤用とした。しかし、日本語でどちらも使われる漢語名詞の「会計」を教材で取り扱うことがはたして適当なのかを教材作成のときにきちんと精査する必要がある。

以上より、形式の誤用には漢語名詞と動詞、接頭語「お」と「ご」、交替形式と添加形式の混用がみられた。韓国語には添加形式の謙譲語がないため形式通りに当てはめることが難しいのである。これは母語の影響をうけているだろう。また、「会計」は接頭語「お」と「ご」のどちらも使う漢語名詞である。教材で取り扱う際にはその漢語名詞が適当かどうかをきちんと精査する必要があることが考えられ、教材の問題点を指摘することができる。

4.3 自由文の語彙の誤用

自由文の語彙の誤用は「出張・作成・整理・購買・業務中・伝達(2)・献呈」の漢語名詞を入れた文である。以下に代表的な例を示す。

(9)　明日、書類をご作成します。　(語彙)
(10)　このプレゼントを明日、ご伝達します。　(語彙)

(9)の「作成」は書類を作成するのであって相手を高める行為ではない。その他の出張や業務中などの漢語名詞も私がどこかへ出張したり、私が業務中という状況であったりするだけで相手を高める行為ではない。これらの漢語名詞を入れても謙譲語の意味を表すことはできない。KLは漢語名詞ならなんでも入ると理解していることがわかる。

(10)の「伝達」はモノの授受を表わす漢語名詞である。「伝達」の文が書かれた調査用紙には韓国語で「이 선물은 내일, 전달해 드리겠습니다.」とあった。韓国語からわかるようにプレゼントを相手に渡すという意味である。そのほか、モノを目上の相手に差し上げる意味の漢語名詞「献呈」がみられた。「献呈」にはすでに謙譲の意味が含まれており、この漢語名詞を添加形式に当てはめることは二重敬語のようになってしまう。そのため「献呈」を使う場合には接頭語をつけず、そのまま「献呈します」と言うべきである。このことから、KLは謙譲語と授受表現を混用していることがわかる[10]。謙譲語「ご＋漢語名詞＋する」はモノの授受ではなく相手を高める行為の謙譲語であることをKLに理解させなければならない。

9) 堀尾(2010)「御(お)と御(ご)の統語的特徴−「お電話」「お時給」はなぜ「お」か−」を参考にしてほしい。
10) 筆者が2023年9月に「お＋動詞の連用形＋する」の調査を行なったときも同様の混用がみられている。

5. 結論と今後の課題

本稿ではKLの謙譲語「ご＋漢語名詞＋する」の誤用を中心に日本語教育の実態と問題点をみた。これらを母語の影響と、母語と教材の両方の影響に分けた。まず、母語の影響は語彙の誤用「予約」、形式の誤用である。さらに、自由文の語彙の誤用から相手を高める働きのない普通の漢語名詞をいれること、授受表現との混用である。次に、母語と教材の両方の影響には「会計」がある。「会計」は母語「계산」の影響を受けている。さらに、「会計」は接頭語「お」と「ご」の両方をとるため、教材で取り扱う際にはその漢語動詞が適切かを考える必要がある。

今後の課題として母語の異なる日本語学習者とKLの結果を比較検討したい。

【参考文献】

油谷幸利(2012)『日韓対照言語学入門』白帝社, p.196(以下、紙幅の関係上省略)

朝鮮空襲の記録について

樋口謙一郎(椙山女学園大学)

第二次世界大戦に関する日本人の集合記憶の一つに空襲と疎開がある。東京、名古屋、大阪など、米軍による大規模な空襲があった地域には、関連の資料館が建設され、それらはほぼ一様に記憶継承と平和教育の重要性を強調している。

一方で、同時期に日本統治のもとにあった朝鮮半島に対して、計画、実施された空襲については、よく知られているとは言い難い。

朝鮮半島への空襲は、なぜ、いかになされたのか。その際、人々は何を認識し、いかなる体験をしたのか、その経験と記憶は人々と社会にいかなる影響をもたらしたのか。また、朝鮮空襲への関心度が低いとするなら、それはなぜなのか。――かような問いに接近する一歩として、本発表では、朝鮮空襲に関する記録を整理し、現段階での発表者の見解を述べる。

米軍による朝鮮空襲に関する記録は、総じて断片的であるが、本発表では、主に次の二つの手がかりを中心として情報整理を行う。

第一に、当時の朝鮮で発行されていた『京城日報』に掲載された一連の記事である。朝鮮への「空襲」「来襲」に関連する記事は同紙1944(昭和19)年7月9日付から掲載されている。当初は、主に「侵入」「偵察」などの報道が主であるが、次第に米軍機の数・規模が拡大し、「戦果」や「損害」が伝えられるようになった。

大戦末期の翌45年7月5日付では「半島に敵無差別爆撃開始」との見出しで大田と光州が空襲にあったことが報じられ、国民学校への攻撃も伝えられた。一方、同年7月25日付には「敵機の狙ひは、以前、交通施設の攻撃にあり」との認識が示され、この間には偵察飛行と船舶攻撃は頻繁にあったことも伝えられている。

第二に、米国立公文書館(NARA)に所蔵されている米軍の公文書である。公開された資料を読むと、京城日報で報じられた内容とはある程度の齟齬がある。特に空襲の対象について、米軍は入念な計画のもとに選定していたことが読み取れる。

関連して、朝鮮空襲への備えは早い時期から行われていたようである。『皇民日報』1942年7月4日付は「空襲は空と心の隙間から」と題し、朝鮮各地で空襲に備えた避難訓練が行われたとの記事を掲載している。

空襲への備えの最たるものである疎開についても若干触れておきたい。1945年に入ると、京城、釜山、平壌(北朝鮮)が「疎開区域」に指定され、施設や人員の疎開、疎開区域内の建築・転入などの制限が実施された。『京城日報』1945年3月31日付は「疎開は逃避ではない。必勝への防衛戦法だ。施設も人も物も、残るものは戦ふもの」と述べる記事を掲載している。つまり、当時の「疎開」は、敗色濃厚ゆえに都市部住民や産業を空襲から避難させるという「負け戦」としてではなく、不要不急の施設と人員を移転させ、消防・避難道路を造ったり防空態勢を強化したりする戦闘的なものだと唱えられたことが読み取れる。

文 学

『日本婦人 朝鮮版』ーその内容と展開

崔世卿(早稲田大)

1. はじめに

大日本婦人会朝鮮本部機関誌『日本婦人 朝鮮版』は、1944年4月に月刊誌として創刊された。大日本婦人会というのは1942年2月に既存の愛国婦人会、大日本連合婦人会そして大日本国防婦人会を一つに統合して設立された婦人団体であり、『日本婦人　朝鮮版』は帝国日本が外地で発行した女性雑誌なのである。そもそも機関誌は会員向けのため雑誌の発行主体や発行目的などが明確である。『日本婦人　朝鮮版』は大日本婦人会朝鮮本部の情報媒体として戦時体制下戦時動員や増産労働など朝鮮総督府の政策実行を円滑にするため刊行された。

しかし官製プロパガンダ誌としてその資料的価値が高いにもかかわらず、同誌についての先行研究は少なく本格的な調査もされていない。それはおそらく同誌が稀覯本でかつ欠号が多いことに起因しているだろう。発行期間は13ヶ月と短いが、現物の確認できない号が目立ち、雑誌の全貌が明らかでない。そこで、本発表では『日本婦人　朝鮮版』を通覧、精査して執筆者を目録化する基礎作業や掲載記事を整理・分析を行い、その全貌の解明を試みたいと思う。また、そうして雑誌の特質や様相などを詳細に考察することで『日本婦人 朝鮮版』の資料的価値も新たに検討することも期待できよう。

2. 発行主体及び目的

1942年2月2日に発足した大日本婦人会の綱領は次のようである。

> 私共は日本婦人であります。神を敬ひ、詔を畏み、皇国の御為に御奉公致しましょう。
> 私共は日本婦人であります。誠を尽し、勤労を楽しみ、世の為人の為に努力致しましょう。
> 私共は日本婦人であります。身を修め、家を斎へ、日本婦道の光輝を発揚致しましょう。

戦局が激化しつつある時期に日本婦人たるものは国に奉公し、勤労に励み、修身斎家することで報国すべきということである。そしてその一ヶ月後の三月十四日、朝鮮に大日本婦人会朝鮮本部が結成されるが、その構想はかなり早い段階でなされていたことが『毎日新報』に報じられている。『毎日新報』2月5日付の記事「大日本婦人会朝鮮本部来月結成」によると、「朝鮮でも内地と歩調を合わせ大日本婦人会朝鮮本部を設置することとなり、さきほど総督府と国民総力連盟とで機構組織について協議中」で、「総力連盟の外郭団体としてその指導下に置く」となっている。総力戦体制下の「内地と歩調」を合わせたったの3日後朝鮮本部を設置するという総督府のこの判断は大日本婦人会の位相や戦局下の朝鮮の情勢が緊迫していることを示していると言えよう。

さて、大日本婦人会朝鮮本部の会員資格をみると、「二十歳以下の未婚者を除いた朝鮮在住の日本婦人全体」(『京城日報』3月18日付)とし、朝鮮での会員資格者数は約650万人としている。もちろんこの数はあくまでも会員資格者数であって会員数ではない。当時朝鮮の人口が2,600万人であるから、その中の20歳以上の「朝鮮在住の日本婦人全体」の数ということとなろう。さらにここで注目すべきはこの「朝鮮在住の日本婦人全体」というところである。「全体」と強調し、朝鮮婦人と在朝日本婦人とも含んでいることを明らかにしているのである。

そして朝鮮本部設置から2年後の1944年4月に『日本婦人　朝鮮版』が創刊されている。大日本婦人会結成からわずか半年で『日本婦人』(1942年11月)が創刊されているのに対し、『日本婦人 朝鮮版』は朝鮮本部設置からだいぶ間が空いての創刊となっている。現在朝鮮本部に関する資料はほぼ皆無であるため、当時の事情を知ることは出来ないが、物資不足で次々と雑誌が廃刊していた物理的要因と外地で発行する官製雑誌という政治的要因が相まってそう簡単には創刊できず2年遅れの創刊となったのではなかろうか。実際、大日本婦人会の組織図によると外地支部として朝鮮の他台湾と樺太、南洋諸島が置かれているが、この中で雑誌が出ているのは智見の限り朝鮮のみなのである。

それでは、なぜ朝鮮版と銘打った雑誌の創刊が必要となったのだろうか。『日本婦人　朝鮮版』の創刊号に寄せた大日本婦人会会長の山内禎子の「創刊を祝す」をみると、「朝鮮の会員の皆様方には内地版のままでは十分に御了解できにくい方」もいるところから「この度の計画となった」としている。また、朝鮮本部長の小磯馨子は同号の「創刊のことば」において「今度朝鮮半島の風俗習慣に適し、朝鮮婦人に解り易い雑誌」を発行しており、この雑誌は「特に朝鮮婦人やお子様に読めるやさしい明るいもの」と述べている。なるほど言葉や風俗の異る朝鮮で内地版のままでは読んでもらえないため、朝鮮半島に適した朝鮮版を出したわけである。

ところが、機関誌というのはあまり売れ行きにこだわらないはずだが、大日本婦人会が多くの朝鮮婦人に読める「解り易い」雑誌を企てたのはなぜなのであろう。戦時体制の下、男性に代る女性の労働力が切実に必要とされるなか、朝鮮婦人を動員するため「国語」と朝鮮語を併用しかつ風俗習慣に適した「解り易い」雑誌を企画したのであろう。

3. 出版状況

『日本婦人　朝鮮版』の発行人は藤江崎一、編輯人は小野利幸とある。この両者についてはほとんど知られていることがないが、当時の新聞の人事記事などによると、藤江崎一は1934年京城府学務課長、1936年6月から馬山府尹をつとめ、1942年の退官後大日本婦人会朝鮮本部総務部長兼厚生部長に着任している。なお、小野利幸は帝国通信社の記者をつとめていたものの、1930年12月朝鮮新聞社春川支局員となり、以降1943年6月から『毎日新報』専務をつとめていた人物である(『朝鮮新聞』1930年12月付な参照)。要するに、発行人と編輯人とも日本人でかつ発行人は元総督府官僚、編輯人は総督府機関誌の役人であり、作り手の顔触れにも『日本婦人 朝鮮版』の性格と位置づけが明確に表れるのである。

前述したように『日本婦人　朝鮮版』は欠号が多く全巻を通覧することができないので、雑誌の全貌は分かりづらいが、出回っているものを参照し、ここに刊行状況を表で示しておく。

[表1]『日本婦人 朝鮮版』の刊行状況

発行年月	44.4	44.5	44.6	44.7	44.8	44.9	44.10	44.11/12	45.1	45.2	45.3	45.4	45.5
巻号	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5
現物	○	×	×	○	○	×	×	○	×	○	○	○	○

『日本婦人　朝鮮版』は1944年4月から1945年5月まで全巻13冊出されている。創刊年に8号、翌年に5号を刊行しているが、そのうち第1巻第2号、第1巻第2号、第1巻第3号、第1巻第6号、第1巻第7号、第2巻第1号は現物が確認できない。そのため、先行研究では創刊号以降第1第4号までは隔月刊という見解をしめしている。しかし、通巻番号のふり方は創刊月から1年間を第1巻とするのと、年度毎にふるのとがあり、『日本婦人　朝鮮版』は後者にあたる。通巻と発行年月を対照してみると1944年11月のみ休刊し、それ以外は毎月毎号刊行していることが分かる。

さて、奥付をみると発行日は毎月一日となっているが、創刊号の発行日は四月三日となっており、注意を引く。これは「あとがき」によると、「婦人雑誌を出すのならぜひ四月三日の神武天皇祭に出そう」ということだったらしいが、創刊と初代とならともかく、いまいち婦人雑誌と神武天皇とが結び付かない。さらに、創刊号においてもうひとつ気を引くのは創刊号発行の3ヶ月前に創刊予定や購入予約の知らせが会員に伝わっていた点である。『釜山日報』1944年1月12日付「婦人の啓蒙へ『日本婦人朝鮮版』昌原連盟が頒布」というタイトルの記事によると、「朝鮮婦人層の重大責務にかんがみこれが啓蒙指導を加え速かに時局要請に応うべく日婦朝鮮本部で発刊準備中の　『日本婦人朝鮮版』一五八七冊を購入一人漏れなく頒布することになった」とある。4月発行予定の創刊号をすでに購入(予約)しており、昌原郡の会員に漏れなく配布できるよう構えている様子が報じられている。

一方、第1巻第8号は11月・12月の合併号として出されるに際して「あとがき」に次のように述べており、その言を引いてみる。

> 決戦下の非常措置として合併号を出すことにしました。新年号からは憤激を新たにして蓄積された戦力を発揮する積りですから御諒承下さい。

「決戦下の非常措置」としてやむを得ず11月を休み12月と合併して出すことになったとしているが、確かにこの時期はすでに戦局が悪化している。というのも1944年6月にはマリアナ沖海戦で敗退し、翌月にはサイパン島が陥落、内地への空襲も本格化していて甚大な被害を受けている。商業雑誌ならともかく官製雑誌の『日本婦人 朝鮮版』の場合、戦勢の影響を強く受けるのは当然と言えよう。

ところが、こうした戦勢の刊行への影響は以後にも続き、1945年2月号(第2巻第2号)の「あとがき」に「月遅れの本誌を今月こそは取り返すべく尽しましたが、工場の関係やら資材の不円滑などでどうしてもまた不本意なことになりました」とあるが、ここで「月遅れ」という言葉に注目したい。おそらく印刷工場の都合や紙不足などで奥付に書いてある印刷日や発行日より遅れて世に出していたと推察できる。また、1945年4月号(第2巻第4号)の「本誌一週(ママ)年を迎えて」において朝鮮本部事務総長の倉茂周蔵は「顧れば本誌は決戦の唯中に生れ、そして決戦と共に育ち、凡ゆる隘路を克服して来ただけに紙不足や運営上の不敏活に加えて輸送の円滑を欠いたりして配布が遅れ」ていることを明らかにしている。月五万部を朝鮮内に配布していたはずなので、紙不足や輸送の不円滑は少なからず応えたことだろう。

4. 執筆者構成

次に『日本婦人　朝鮮版』の執筆者構成について考察してみたい。本誌には朝鮮人・日本人・男女を問わず多様な人々が文章を寄せている。ひとまず目を引くのは当時流行っていた野談作家が大勢誌面を飾っていることである。朝鮮古来の情緒を描く野談は当時娯楽物として人々に親しまれ、方仁根、金東仁、金濯雲、申鼎言な

どは雑誌や新聞、ラジオを通じて多くの野談を発表している。しかし、『日本婦人　朝鮮版』の執筆陣には彼ら以外にもすでに名前の知られている朝鮮の文人が参加している。香山光郎,鄭飛石,朴泰遠,盧天命,桂鎔黙など指名度の高い彼らを執筆者として迎えられた原動力は何だろうか。それは本誌が総督府の官製雑誌でかつ発行元が毎日新報社であることが大いに働いていると言える。彼らのほとんどが『毎日新報』に作品を書いており、『日本婦人　朝鮮版』は彼らにとって横並びの発表の場なのである。

他にも女性教育者の寄稿も目立っているが、創氏名を出している福沢玲子,永河仁徳,伊原圭や裵祥明など当時女学校長だった人物の中には、教育者でありながら「戦争は有り難いものだ」とまで言っている。

上記の人々はすべて内鮮一体や皇民化を扇る文章を他にもいろいろな媒体で書いており、こうした植民地知識人の積極的な参加はまさに負の順応と言えよう。

一方、在朝日本人の執筆者も多く見られるが、在朝日本人執筆者の大半は総督府の関係者か教育者であるなか、黒田しのぶのような朝鮮生れの文人がいて異色を放つ。

以下に執筆陣を挙げておく。

[表2]『日本婦人 朝鮮版』の執筆者一覧(創氏名の場合、分かる限りで括弧書きで本名を併記した)

	朝鮮人	在朝日本人	内地日本人	不詳
文人/言論人/芸術家	張徳祚, 鄭飛石, 金村たけを, 조풍연, 鄭人沢, 香山光郎(이광수), 金濯雲, 方仁根, 金鐘漢, 朴啓周, 素木柾夫, 金村竜済(김용제), 牧洋(이석훈), 金東仁, 平沼文甫(윤두헌), 児玉金吾, 高野在善, 呉竜淳, 李昌洙, 桂鎔黙, 申鼎言, 金安羅, 朴泰遠, 盧天命	黒田しのぶ, 辛島驍, 大沼千代子, 奥平修一郎, 新羅園子	岩下俊作	
医師/著名人	徳山徳鎬, 鄭鎮旭, 鄭奉燮, 趙東秀, 常山盛弘			徳山高康
教育者	裵祥明, 福沢玲子(송금선), 永河仁徳(박인덕), 伊原圭(손정규)	松月秀雄, 藤元緑, 永田市蔵, 金沢庄三郎, 荻原浅男		馬場かと
政府・総督府属		小磯国昭, 板垣征四郎, 倉茂周蔵, 長屋尚作, 松本一郎, 甘粕重太郎, 長崎祐三, 生田平八, 宮地ハル子, 甘粕重太郎	広瀬久忠, 杉山元, 島田俊雄	
大日本婦人会	李賢淑, 白山福女, 松田良子, 額賀茂乃	小磯馨子, 永田市蔵	山内禎子, 穂積なか	百済園子, 小野照代
生徒	河鄭貞淑, 慎喜子			
不詳	李福男, 趙昌順, 朱乙男, 朱永姫, 崔永秀, 李曦均, 朴山仁煖, 心耕生, 崔英濬, 崔秉一, 白石哲朗, 崔大鉉, 閔正愛, 牧山璇求, 額賀茂乃	高木たかね		小野寛, 高島淑子, 神林庄三郎, 栗栖万寿夫, 白川極浩, 加藤一郎, 山内正人, 碓井一史, 山中英雄, 頭山漢六, 林雄次, 中島一雄, 正木浩, 平田恵子

5. 誌面構成及び内容

雑誌の誌面構成には編輯者の趣向が反映される。しかし『日本婦人　朝鮮版』のような機関誌は団体が運営母体となっていて、その団体の情報伝達や宣伝媒体としての役割を担っているため編集者の趣向は他の雑誌より多くは反映されないと言える。ところが、『日本婦人　朝鮮版』は一見総合文芸雑誌のように思える程様々なカテゴリの文章が誌面を飾っている。小説や詩、随筆などの文学、礼法や歴史などの教養、戦時生活の情報、時事解説、漫談漫画、国語教室、探訪記、銃後の構え、家庭健康、女性の勤労など実に多岐に渡っている。もちろん金属回収や増産、貯蓄運動を呼び掛ける記事、応徴や戦死の美談など大日本婦人会朝鮮本部の活動と呼応する記事も多く見られるが、目次に載っていない埋め草も内容が豊富で表面的には多種多彩な読み物の雑誌とも思われる。

特に『日本婦人　朝鮮版』には更生小説や回覧板小説、銃後小説、大和小説といった面白いカテゴリの小説が複数載っていることを特記しておきたい。まず、創刊号と第1巻第4号に置かれている更生小説「世紀の旗」と「反転」はそれぞれ張徳祚と香山光郎(李光洙)の作品であるが、果たしてこの「更生小説」はどのようなものを指すのであろうか。「世紀の旗」では、夫が不倫して作った婚外子を朝鮮婦人の美徳として立派に育てたが、出陳されることになる。悲しみと夫の浮気相手への恨みで苦しむが、いざ浮気相手を探し出したら出家していて“人間の正しい道は他人のために生きること”と言われ、駅前の民家の「祝入営」の文字と旗が目にしみるという内容が語られている。「反転」も5年間学費を援助していた女性に裏切られ呆然と街を歩くが、心配になった女性が彼の後をつけ“女の尻を追いかけ回す男は最低”と言われ、目の前の海軍志願兵募集の看板を見つめるという内容が語られている。「更生小説」はこの2作きりだが、おそらく人生の試練の先に徴兵(または志願兵)にめぐりあい、晴れて徴兵に行ったり見送ったりして「更生」する内容を指していると考えられる。

一方、『日本婦人　朝鮮版』第1巻第5号には「特輯回覧板小説」と銘打って3篇掲載している。方仁根の「1年」、金鐘漢の「睡蓮」、朴啓周の「祖国」だが、いずれも2～3頁ほどの短い文章という点が共通している。そもそも回覧板というのは隣組で戦時生活の情報や会報を伝える際用いられるものであるが、隣同士で監視、統制する用でもあった。「更生小説」の場合、落ちのところが「徴兵(志願)」という内容面の統一性があるが、「回覧板小説」はどうなんだろうか。「1年」は素朴だった田舎の娘が会社員となりお金を稼ぐと日に日に派手になっていってついには会社を辞めて女給になる。お金遣いも男遊びも派手になるいっぽうだったが、大家さんの忠告を聞かされてモンペをはいて軍需工場に入るという内容が語られている。ここまで読むと、「回覧板小説」というのも「更生小説」と同様落ちが一緒かと思われるが、「祖国」は古代ギリシャのある国賊と息子に誰より先に石を投げる母の物語で、「睡蓮」は転々と引っ越しているうちに連絡の途切れたと思った友人から実はハガキが送られていてそのハガキには従軍している近況が書かれていたという内容である。もう一篇第1巻第8号に「回覧板小説」として牧洋の「十年後」が掲載されているが、南洋諸島を訪れた主人公が多くの半島出身に出会い、彼らの活躍を喜ぶ内容が語られている。「回覧板小説」は程度の差こそあれ友情や強き母や植民地移住といった多様な素材に総動員への扇動が込まれていると言える。「回覧板小説」がどのような意図をもって命名されたか定かではないが、内容面ではなく回覧板のように分量の少ない小説を指しているように思われる。

6. 나가며

『日本婦人　朝鮮版』は小説や詩など創作が多く組み込まれていること、多角的な記事が載っていること、朝鮮人の執筆者はもちろん大勢の在朝日本人が参加していることなどから一見多元的な性格を帯びているように

見える。また、「更生小説」や「回覧板小説」など新しいカテゴリの小説の欄を設けて軽い読み物を掲載しており、「やさしい明るい」印象を与えている。しかし、それら創作は聞きなじみのある執筆者による扇動的文学であり、幅広い執筆者による多角的記事は朝鮮総督府政策実行の広告塔としての役割を忠実に果たしている。ただ、総動員体制の下、次々と雑誌が廃刊していくなか、時局に対応する文章とは言え、ものを書いて載せる発表機関という役割と在朝日本人の文学創出の場乃至文化的基盤という役割も果たしていたことは否めない。

『日本婦人』(朝鮮版)からみる在朝日本女性の生活戦

張慧珍(カトリック関東大学)

1. はじめに

日本におけるアジア太平洋戦争の総力戦は1940年度から本格的に展開していった。日本内地や朝鮮での総動員体制については多く知られており、言うまでもない。殊に朝鮮の兵站基地化・要塞化が強いられて進んでいた時期でもある。総督府は総力戦にいたり、人的・物的資源の総動員のために皇国臣民らしく在朝日本女性にも生産戦、武力戦、思想戦に向き合うことを強いていた。この生産戦は、銃後の日常生活に、武力戦は徴用や軍需物資の生産に、思想戦は内鮮一体を基にする精神的団結にかかわるものである。ですが、当時朝鮮に在住している日本女性は植民地の支配者としてどうやって総力戦に協力していたのか、これに対してはあまり論じていない。また総力戦期に発行された『日本婦人』(朝鮮版)からまさに在朝日本女性の銃後への生き方を覗くことができる。むろん総力戦はこの雑誌の体制や構成(内容)に大きく影響を与えている。本発表では『日本婦人』(朝鮮版)を切り口にして総力戦期における在朝日本女性の銃後としての生活戦の有様を検討したい。

2. 半島婦人と在朝日本婦人

『日本婦人』(朝鮮版)には基本的に半島婦人と在朝日本婦人という二つの言葉を使っている。1938年から朝鮮総督府に時局対策協議会が設置された以来、「内鮮一体ノ徹底ニ関スル件」が設けられ朝鮮での内鮮一体への働きが強まった。だが、1944年に創刊された『日本婦人』(朝鮮版)からみると、実際朝鮮での内鮮一体という政策はまともに実現できていない状況であろう。大日本婦人会朝鮮本部理事の額賀茂乃は内鮮一体を成し遂げるには何よりも半島婦人の覚醒が必要だと指摘している。今は内鮮同胞であるが、内鮮という区別なしの優れた日本婦人、すなわち皇国婦人としての覚醒をいう。一方、朝鮮総督の小磯国昭は朝鮮の各層婦人の中にいまだに勤労を卑しみ無為有閑を誇る旧時代の観念が残っていることに先覚、指導者はその自覚を促すべき時期であると主張する。また半島婦人が日本婦人たる意識のもとに雄々しく立ちあがるべきであると呼びかけている。先覚者・指導者とは日本女性であるし、その責務を述べている。

在朝日本女性は、朝鮮女性を総動員体制に率いる先導役であり、女性同士の指導者たる立場であったことがわかる。

3. 在朝日本女性の生活戦

さらに大日本婦人会朝鮮本部長の小磯馨子は、前線将士の覚悟をもって各々の生活が即ち戦争であることを考え、すべての力を皇国に捧げて銃後を守り、その大任に当たった日本婦人のことを語っている。

当時、総力戦下における国民精神総動員の真髄というのは国民すべてが満州事変の真相に充実し、銃後をもって出征する心がけで愛国の至誠を日常生活上に具現するほかないとみていた。国の根幹となる家庭に重点をおいて家庭生活のなかに根強く培養しなければならないと話す。また全国の各家庭に尽忠報国の精神が充満してこそ、国民精神総動員の大きな目的が初めて達成されるとみた。

そのなか、1944年度大日本婦人会の指導運営大綱(大日本婦人会朝鮮本部)からみると、二つの目標が目立つ。一つは決戦生産の増加、もう一つは日婦訓練査閲美談である。注目すべきことは決戦生産である。一番目は生産戦に一人残らず参加すること。身分に拘らず働くことそれが戦争であるという考えをしっかりと持つことである。二番目は生産戦場に勇敢に出て働き、徴用を恐れず協力すること。こうしないと非国民的な行為であることを示している。三番目は家庭ではできるだけ生産するための作業に励むこと。一本の大根、一株の白菜でも多く作って食べ物を確保することである。四番目は家庭婦人が働くために保育施設を設けること。また働けない老人は子供を守ったり、共同炊事などを実施し隣同士がお互いに力を合わせて働くことである。

1944年冬になると、総力戦に対する女性への呼びかけが益々強まっていく。京成在勤海軍武官府海軍大佐の松本一郎は、第一線の戦局を有利に導くのは銃後の補給であると述べ、銃後が人と物と力の総力を発揮して円滑に補給を維持することが勝敗を決すると訴える。朝鮮においても心機一転、生活の一大転換を志し、銃後はあくまで婦人たちの力で守り抜き、男たちは全部第一線に送り出すように促している。

これに関して、『日本婦人』(朝鮮版)の記事からみられる家庭生活の改善や改良のための具体的な事例を次の表から確認できる。

区分	生活関連の記事
日本語の記事	[衣] モンペの作り方 [食] 食べられる野草： ゴボウ、ツルニンジン、キキョウ、オオバコ、ヒメニラ、山ニラ、ヨモギ、アカザ、ナズナ、セリ、ヒユ、ワラビ、ゼンマイ、オタカラコウなど [他] 古い毛布の使い方、古い新聞紙の使い方
朝鮮語の記事	[衣] 朝鮮婦人服の改良・工夫 [食] 畑の準備、大根・白菜の栽培、カボチャの種の使い方、落花生・トウモロコシの栽培方、家庭の農法・秋の家庭菜園、増産すべき家庭食料 [건강, 위생] 風邪の予防法、石鹸の使い方、児童の栄養改善、ショック・骨折・火傷、夏の家庭衛生、冬の小児衛生と空襲の対策、妊婦の衛生、シラミと病・清潔維持、生活環境にいける虚弱、児童・空襲下の外傷の救護 [他] 貯蓄の勧奨、ボトルのなかの粉抜き、穴が九つある練炭の灰のリサイクル

(***上の表でみられる事例の詳しくは発表時に紹介する。)

4. おわりに

在朝日本女性は、朝鮮における朝鮮人とわきまえて朝鮮社会からも離れて生きていた支配者である。だが、日本内地の女性とは差別を受けている立場でもある。戦況の激化に臨み総力戦に入ってから日本内地の女性に要求されていた皇国婦人としての責務が同じく在朝日本女性にも与えられた。さらに植民地の支配者とい

う期待に応じて朝鮮女性が総動員体制に協力するように先導・指導者としての役も重要視されたことがわかる。また女性の母性が中心となる家庭が銃後の重要な戦力としてますます浮上され、「男性の第一線戦場＝女性の日常生活戦」という論理を作り上げている。しかしこうした様子は前近代の性別役割分業とあまり変わりがない。ただ、日常生活の時間と空間が私的な所有ではなく公的な領域にその機能が拡大されて家庭そのものが変質していく様子が見られる。すなわち総力戦につれ各々の家庭・日常生活から盲目的な報国忠誠の意識が発揮され、ついに一つの巨大な家族国家に団結していく局面をもたらしている。換言すると、日本政府が『日本婦人』(朝鮮版)の発行に積極的に関わり、この雑誌を媒介として在朝日本女性を通じて朝鮮女性・朝鮮社会までに総力戦のための人的・物的・精神的の力を絞り出す意図があったと考えられる。自己反省のない戦争のイデオロギーに家庭を自然に追い込む一つの装置となったと考えられる。総力戦体制下での在朝日本女性もまた内地の日本女性のように日常生活戦の戦士として、戦争の主役としてその役割を果たしていたことが『日本婦人』(朝鮮版)で確認できる。

戦時期の日本語雑誌における古典教育

李芙鏞(江原大)

1. はじめに

本発表では、植民地朝鮮において行われた戦時期の古典教育について考察するために、日本語雑誌に着目した。「韓国併合に関する条約」が結ばれてから約20年、植民地朝鮮における日本の支配は、思想的な面においても教育や文筆活動を通じて、日常の中へだんだん侵入していった。特に、日中戦争をはじめとする1930年代後半から終戦にいたるまで、支配側の言説は、学校などの教育現場だけでなく、日常の生活においても、さまざまな分野にわたって広まっていった。その際、言葉による支配戦略が窺える代表的な媒体として「雑誌」を取り上げることができる。雑誌は一つのカテゴリーに分類しにくい、社会のさまざまな姿を拾い上げ、形にする。雑誌は「雑」なるものを扱うというその名前どおり、さまざまな情報を取り込んでいるが、そこに網羅されている世相からは、当時の日常の中で行われた教育の姿を垣間見ることができる。

2. 先行研究

1930年代から1940年代にかけて、植民地朝鮮において発刊された雑誌は数多くあるが、その中でも今回は特に教養誌『緑旗』を研究対象とした。この雑誌は、緑旗連盟によって1936年1月から出版された雑誌であり、1944年より『興亜文化』というタイトルに変更された。確認されるものだけでも通巻102号に至るこの雑誌は、一部の欠巻を除いて、図書館や文庫などに散らばって所蔵されている。

この雑誌を研究対象とした先行研究には、『万葉集』の和歌の受容について分析した研究[1)]、在朝日本人女性の教育に注目した研究[2)]、在朝鮮日本人が執筆した日本語小説を分析した研究[3)]などがある。これらの研究においてこの雑誌の性格や読者層、記事の傾向などがある程度紹介されているものの、植民地時代の日常における日本文学と教育という観点からは、まだ考察する余地が多く残されている。

---

1) 박지영(2013)「식민지 조선의『만요슈』-두 개의 국민과 문학전통의 교착」『세계문학비교연구』45, pp.51-74.
2) 오성숙(2014)「재조 일본여성 '조센코' 연구－쓰다 세쓰코,『녹기』그리고 청화여숙－」『일본언어문화』27, 한국일본언어문화학회, pp.711-732.
3) 채호석(2010)「1940년대 일본어 소설 연구:『緑旗』를 중심으로」『외국문학연구』37, pp.433-458.

3. 物語の講読

まず、『緑旗』第2巻第9号(1937年9月)に収録された木村花子の「源氏物語の研究」という記事について注目する。この記事は一つのページに収まる分量のとても短い文章であるが、含まれている情報は当時の物語講読の姿が窺えるよい資料である。著者の木村は、当年度の5月から月2回ずつ国文学研究会に通い、『源氏物語』を読んだことを報告している。その講読は『源氏物語』を最初から順におって読みはじめ、桐壷巻から箒木巻、若紫巻を経て、6冊目の末摘花巻に至った。次回に紅葉賀を読むという報告で文章が締めくくられている。主に一ヶ月に一巻のスピードで講読が行われたことは、とても早い速度であると判断される。

木村の『源氏物語』に対する感想は、作者の紫式部に対する感嘆、原文の味ひの重要性、物語に言及される妻の役割、理想的な女性像など多岐にわたっている。時代的背景を考えると、戦争と直接かかわる議論は以外と少ないが、朝鮮の地に住みながら、「古文の侭を読んで行つてこそ本当の生命が味へるのでる」と述べる著者の態度には、日本の古典こそ正統であるという認識が示される。また、「雨夜の品定め」に出てくる妻の長所短所について共感する部分では、日常生活において、著者が家庭婦人として生きていることが窺える。

4. 知識人の評価

上記の木村の「源氏物語の研究」が在朝鮮日本人の家庭婦人の『源氏物語』に対する感想であるとすれば、『緑旗』第7巻第11号(1942年11月)には、朝鮮の知識人の日本文学に対する感想を集めた「日本文学の中で好きな女性は誰か一半島作家諸氏にきく一」が書かれていて興味深い。これより早く朝鮮の知識人にも『源氏物語』などの日本の古典文学が読まれていたことは、すでに報告したことがあるが[4)]、1940年代になると、『緑旗』のような教養誌においても、朝鮮の知識人の視線を通じて、日本文学の価値が強調されるのである。ここには、9人の作家の「日本文学の中で好きな女性」に対する言葉が載せられたが、徐野銖(1907~1994)や鄭飛石(1911~1991)は、紫式部を挙げている。

5. おわりに

以上、植民地朝鮮において発刊された日本語雑誌『緑旗』を通じて、当時、朝鮮に滞在していた日本人女性の日常生活の中の読書に関する分析を試みた。この雑誌からは、特に、学校ではない生活の場において、日本文学がどのように読まれ、評価されていたかについて興味深い視点が得られる。まず、朝鮮に住んでいた日本人女性が『源氏物語』のような日本文学を読み、「本当の生命」をその中で求めようとしていたことが窺えた。また、朝鮮の知識人たちが日本文学の卓越性について証言していたことが読み取れる。二編の記事からは、女性読者と女性作家という構図が浮かんできて、『緑旗』の想定している女性読者層が考えられ、さらにこの雑誌が伝えようとしていた理想的な日本人女性像についてまで考えを巡らすことができる。

---

4) 이부용(2014)「比較文学者の六堂崔南善の京城府立図書館講演」『일어일문학연구』89-2, 한국일어일문학회, pp. 153-172.

【参考文献】

緑旗連盟『緑旗』第2巻第9号(1937年9月)、第7巻第11号(1942年11月)

나가시마 히로키(2011)『녹기 총목차・인명색인』어문학사, pp.1-258.

박지영(2013)「식민지 조선의『만요슈』－두 개의 국민과 문학전통의 교착」『세계문학비교연구』45, 세계문학비교학회, pp.51-74.

오성숙(2014)「재조 일본여성 '조센코' 연구－쓰다 세쓰코,『녹기』그리고 청화여숙－」『일본언어문화』27, 한국일본언어문화학회, pp.711-732.

이부용(2014)「比較文学者の六堂崔南善の京城府立図書館講演」『일어일문학연구』89-2, 한국일어일문학회, pp.153-172.

채호석(2010)「1940년대 일본어 소설 연구:『緑旗』를 중심으로」『외국문학연구』37, 외국문학연구소, pp.433-458.

インドネシア日本語文学の発展と展開
—『爪哇日報』の文芸欄と無名作家たち—

朴祉侯(九州大学)

1. 初めに—それまでの南洋文学の研究から

南洋は、南太平洋の島国を含め、今日の東南アジアの地域を意味する認識論な空間である。そして、南洋文学はそのような地域を背景とする日本語文学の意味する。

南洋文学が日本文学の研究の中で扱われたのは1990年代からである。その時までの日本文学の研究方法は「日本」「日本人」「日本語」という図式[1)]のもとで、日本文学史のなかで有名な作家とこの作家の作品だけを研究することであった。しかし、一部の研究者たちは、このような日本文学の研究方式が根拠としていた「日本」「日本人」「日本語」という自明性に疑いを抱くようになり、そして「日本」「日本人」「日本語」というけして自明しない隙間に目を向け始めた。その結果、この隙間から見つけたのが朝鮮、台湾、南洋などの旧植民地であった。

このように、南洋文学の研究の目的は日本文学の日本中心主義を乗り越えることであった。この目的意識は第一世代の南洋文学の研究者である神谷忠孝の言説にも確認することができる。例えば、彼は『南方徴用作家—戦争と文学』(世界思想社、1996)で次のように述べている。

> 南洋とは日本の観点から見た南洋諸地域という意味を含んでおり、したがって南洋文学とは日本人が日本語で、そして日本の観点を通じて南洋諸地域に関して書いた文学を意味する。(……)南洋文学研究は必然的に日本と南洋の言説に対する相互比較を通じて行われるしかない。これが南洋文学研究が究極的に進むべき方向である[2)]。

しかし、これまでの南洋文学の研究がこの目的に合致する形で進んできたのかどうかについては、再検討が必要だと思う。ここでしばらく、一例として挙げたいのは、南洋文学研究の正典ともいえる木村一信の『昭和作家の南洋行』(世界思想社、2002)である。

この本の目次を見ると、木村が今後南洋文学として研究する価値があると判断した作家の名前を列挙している。しかし、木村が選定した作家の名前をよく見つめると、阿部知一、高見順、中島敦、北原武夫、竹田倫太郎、井伏鱒二、金子光晴、大岡昇平など、いわば、日本文学史における「市民権」を獲得した作家であること

1) 고모리요이치저, 송태욱역,『포스트콜로니얼』(삼인, 2002) p.80.
2) 神谷忠孝『南方徴用作家:戦争と文学』(世界思想社、1996) p.18.

が明らかになる。

上の例が意味するのは、南洋文学研究は日本文学史の境界を超えようとしたが、逆にこの境界の中で閉じこまれてしまったということである。言い換えれば、南洋文学の研究は有名な作家の南洋言説を見つけ、これを分析することで、日本文学史をもっと豊かにする形で発展してきたのである。

しかし、南洋文学という領域を広く見ると、この中には有名な作家だけでなく、日本文学史に名を連ねることができなかった人々の作品もある程度存在することが分かる。特に、これらの作品は、南洋を短く経由した作家の文学とは異なり、南洋に暮らしながら「生活」した内容を含んでいるため、南洋という地域で暮らしていた日本人の生活の事態、ひいては一般の日本人と南洋との関わりをより明確に把握するのに役に立つといえる。

しかし、これらの作品は日本文学中心主義に押され、度外視されてきた。したがって、本発表は南洋文学の本来の趣旨を生かし、これまで研究されていなかった南洋、特にインドネシア日本語文学のあり方を簡単に調べることで、新しい研究分野の可能性を確認しようとする。

ただ、今の段階では『爪哇日報』という新聞に集中しようと思う。なぜなら、『爪哇日報』はインドネシアで最初に刊行された日本語新聞であり、最も盛んだ新聞であったからだ。それで、本発表は、この新聞の文芸欄を中心にして、無名作家たちの南洋文学の存在方式を簡単に調べようと思う。

2. 1930年以前の『爪哇日報』とその文芸欄

『爪哇日報』は1920年から1937年にかけて、インドネシアのジャカルタ(Jakarta)で最初に刊行された日本語新聞である[3)]。同紙はインドネシアに滞在している日本人を対象に、政治、経済、社会など各方面にわたってインドネシア国内に限らず日本や外国の情報を報じたが、文芸欄にも力を入れて小説、評論、随筆、童話、詩、俳句、短歌などを多く掲載した。ここでは九州大学で確認できる紙面の文芸欄を中心にして、その機能について目を配っていく。

『爪哇日報』の創刊号には「文芸ゴシップ」(1920.10.31)という欄が設置され、そこに「文芸は遊戯ではない、南方文学の鼓吹と普及に体面と向上を新生する希望を持って同胞の機関紙である本紙を利用して創刊とともに広く追求するところだ」という創刊の辞とも思われる文章が掲載された。

この創刊号の趣旨を生かして、『爪哇日報』の文芸欄はおよそ二十年という時期にわたって、盛んな文芸の場になったと判断される。ただ、『爪哇日報』の文芸欄のたいていの作家が匿名や筆名で文を載せているため作家の具体的な情報が分かりにくいが、松原晩香という名前は多くの号で確認される。池内輝雄の研究(2004)[4)]によると、松原晩香はシンガポールの『南洋日日新聞』の記者として南洋行をしたが、同じの佃光治から誘われ、インドネシアの『爪哇日報』の専任記者で転職したとする。いま、本発表が確認できる限り(紙面や先行研究などで)、松原晩香が『爪哇日報』に寄稿した作品は創刊号から12月まで「地獄」という小説、翌年1月から4月にかけて「極楽鳥」という小説、そして1923年12月から4月まで「煉獄」という小説を連載した。

これらの作品が描いているのは、「体験」としての南洋ではなく、「生活空間」としての南洋であった。とくに、「煉獄」は司会主義的性向を持つ主人公が富の不公平で悩んでいったが、途中、南洋の農園で働くことを誘われ、日本司会を去って南洋で生活する物語である。この作品の中で南洋はどのように表象されているのかは後の発表で明らかにしたいと思う。

---

3) 後藤乾一『日本占領期インドネシア研究』(竜渓書舎、1989年) p.67.

4) 池内輝雄「南洋へのめざし―大衆雑誌と「南洋」」(『大衆雑誌の領域』大衆文化研究会、2005) pp.127-128。

そして、こうした小説とは別に、詩、短歌、俳句などは殆ど埋草のように配されている。今回の発表では、このような南洋に関する詩歌文芸を、南洋文学というもう一つの文学史の中でどのように位置づけられるのかを工夫する。

3. 1930年以後の『爪哇日報』の文芸欄

1930年代以後の『爪哇日報』の文芸欄から目立つ一つ目の特徴は、「内地」との交流が増えたことである。木村一信の「外地新聞の文芸欄[5]」によると、「内地」の文芸情報が本格的に『爪哇日報』に収録し始めたのは1931年1月1日の文芸欄からである。第一面全面を使った「文芸のページ」を新設し、毎週火曜日たびに評論・詩・エッセイ・俳句などに多くのスペースを割く。ここには、日本の文壇で活躍している作家の批評、随筆を紹介する一方、現地の無名作家にも紙面を与えた[6]。いわば、「内地」の専門的な作品と現地の作品が組み合わされ、文芸欄の文学的地位を確保したのである。

二つ目の特徴は、大衆文芸の登場である。1934年から1936年にかけて、年に2·3回ぐらい探偵小説やメロドラマが連載された。探偵小説の場合はシャーロック·ホームズの作品が二編、エドガー·アラン·ポーの作品が三編、アラリン·クイーン作品が一編が確認され、メロドラマはペンネームと思われる者の作品が1935年9月から12月までの連載される。

現地(南洋)の日本人から創作されたわけではないが、大衆文芸が『爪哇日報』に掲載されたということは、この新聞に対する読者層の拡大と文芸欄の多様性の確保を目指したのだろう。特に、大衆文芸の記載は在留邦人の共感と生活的面貌に集中していたこれまでのインドネシア日本語文学圏が娯楽的性向までも加味することで、さらに豊かになったということを意味する。

しかし、一般的に探偵小説のような大衆小説が流行する条件は、民主主義と資本主義が十分に定着した場合だと言われる。これを根拠にしてみれば、『爪哇日報』の文芸欄に探偵小説が多く載せられたということは単純な娯楽的機能を超え、それ以上の可能性を暗示するといえよう。要するに、これは、「内地」の南洋文学が南洋を野蛮な空間として表象しているとは異なり、インドネシアのジャワで日本人が住んでいた空間は、大衆小説に共感するほど都市的な要素が揃っていった地域であったの証明ではないだろうか。

---

5) 木村一信「「外地」新聞の文芸欄」(『駒沢大学』の発展会、2005.11.26)。
6) 木村一信 上の発表会。

芥川竜之介『蜃気楼』論
―錯視の手法―

早澤正人(仁川大)

1. はじめに

芥川竜之介「蜃気楼」は、1927年(昭和2年)3月に「婦人公論」に掲載された小説である。「『蜃気楼』だけは多少の自信有之候」(斎藤茂吉宛　1927年3月28日付)、「蜃気楼は一番自信を持つてゐる」(滝井孝作宛、1927年2月27日付)とあるように芥川の自信作であり、芥川の晩年を代表する作品といえる。

内容は「一」が昼の話、「二」が夜の話となっている。まず「一」では、主人公の「僕」が「或秋の午頃」に「東京から遊びに来た大学生のK君」や、近所に住むO君と一緒に鵠沼の海岸へ蜃気楼を見に行くというもの。「砂浜の上には青いものが一すぢ、リボンほどの幅にゆらめいてゐた」。あれが蜃気楼というのかとK君は失望したようにいう。「二」はその日の午後七時頃、再び「僕」がO君や妻と一緒に海岸へ散歩に出る話。O君がマッチを摺ると「遊泳靴の片つぽ」が浮かび上がり、それを土左衛門の足かと思う。また「僕」は妻の袂で鳴る「鈴の音」に神経をとがらせる。そうこうしているうちに半開きの門の前に来る。

芥川晩年の代表作ともあって先行研究は充実しており、看過出来ない重要な指摘も多い。例えば遠藤祐は「蜃気楼」の空間が、いずれも「海辺まで」→「海辺で」→「海辺をあとに」という順に話が展開されているとしている。主人公の「僕」は、ただ「～て行った」「～で(て)いた」という道行に沿って話を展開させているが「何か」「何だか」といった表現からも明らかなように「僕」は自分自身にも理由が明確ではない不安や心情を感じている。それについて、坪井秀人は次のように述べている。

> …芥川の初中期の作とは違って、「蜃気楼」には自律的なドラマが欠けている。<道行>という形式の必然から、歩いて
> 行って出くわすもの・できごと、またはむこうからやって来るものによってこの小説の話はつくられている。登場人物の行為によってプ
> ロットを形成するのでなく、彼を何ものかにめぐりあわせることによって形成する。

このような坪井の指摘は、村田藍子がまとめているように「<僕>が抱く<恐怖感>や<気持ちが悪い>といった感覚」が「全て<僕>自身から起こる『自発的』なものではなく、『受動的』なもの」なものであることを示している。

また、このように外界との関係が「受動的」な「僕」の話には、ドラマらしいものもないことから、芥川が晩

年に主張した「話らしい話のない小説」の代表作ともされてきた。その具体的な分析としては、篠崎美生子が「はぐらかし」の手法としたものが、的を得ていると思われる。篠崎は論の中で「無気味な小さな事件とその種明かしというパターンの集積」によって、物語は劇化せず意味をはぐらかしていると主張している。

ほかにも「蜃気楼」が「感覚の交感、現実と想起の交錯、実体を掴み損ねる知覚、核心に至らない会話など、手応えのない不鮮明なイメージで統一」されていると論じた高橋竜夫や、志賀直哉「焚火」のような東洋的薄明とは異なる西洋的な思考を問題化した神田由美子、さらに芥川晩年の作品に「海」や「水」のイメージが多い事に注目し、そこにユング心理学の援用で女性のイメージを重ね、意識／無意識のあわいに浮かび上がってくるものを問題化した一柳広孝の論考などもある。

もちろん、筆者も上記のような先行研究に異論はない。本稿も見てきたような従来の先行研究を踏まえながら、思い違いや錯覚を繰り返す「僕」を主人公とした「蜃気楼」の「話らしい話のない小説」が、具体的にどのようなレトリックによって構成されているのか、検証するものである。

2. 錯視のレトリック

「蜃気楼」のレトリックを考察する上で「錯視」というのは、一つのキーワードになる。ここで「錯視」というのは、読者に錯覚させてしまうこと。そうして、ミスリードさせたり、はぐらかしたりする事と定義しておこう。たとえば、前半部(一)に、こういう場面がある。

> そのうちに僕等は松の間を、――疎らに低い松の間を通り、引地川の岸を歩いて行つた。海は広い砂浜の向うに深い藍色
> に晴れ渡つてゐた。が、絵の島は家々や樹木も何か憂欝に曇つてゐた。
> 「新時代ですね？」
> K君の言葉は唐突だつた。

これは「僕」が藍色に晴れていながらどこか憂欝に曇っている風景を見ていると、K君が「新時代ですね」と話しかけてくる冒頭近くの場面である。この箇所だけ読むと「憂欝な風景」を見て、K君が「新時代ですね」と形容しているように錯覚する。いわば「新時代は憂欝な風景のようだ」と連想で繋ぐ比喩である。しかし、その直後を読むとこうある。

> 「新時代ですね？」
> K君の言葉は唐突だった。のみならず微笑を含んでゐた。新時代？ ――しかも僕は咄嗟の間にK君の「新時代」を発
> 見した。それは砂止めの笹垣を後ろに海を眺めてゐる男女だつた。尤も薄いインバネスに中折帽をかぶつた男は新時代と呼ぶ
> には当らなかつた。しかし女の断髪は勿論、パラソルや踵の低い靴さへ確に新時代に出来上つてゐた。

これは先ほどの文章の直後である。「新時代」は「憂欝な風景」なのかと思いきや、そうではなくK君のいう「新時代」とは「海を眺めている(男)女」のファッションの事だったというのが分かる。

いわば、主人公の「僕」は、K君のいう「新時代」の意味を勘違いしたわけであるが、筆者はこのようなレト

リックを「新時代」の持つ意味の書き換えではないと考えたい。いったい、小説テクストというものが時間芸術であり、時間の流れに従って読んでいくものだとすれば、いったん「新時代」が「憂鬱な風景」として読者の脳裏で定着した以上、それは消去されることなく、次の「海を眺めている(男)女」のイメージに上乗せされ、イメージの重層性が生み出されていると考えるべきである。ここでは読者の中で「新時代」の意味が地と図のように反転している。

実際、こういうレトリックは、前半(一)において、よく用いられている。次の文章を読もう。

> 蜃気楼の見える場所は彼等から一町ほど隔つてゐた。僕等はいづれも腹這ひになり、陽炎の立つた砂浜を川越しに透かして眺
> めたりした。砂浜の上には青いものが一すぢ、リボンほどの幅にゆらめいてゐた。それはどうしても海の色が陽炎に映つてゐるらし
> かつた。が、その外には砂浜にある船の影も何も見えなかつた。
> 「あれを蜃気楼と云ふんですかね？」
> K君は顎を砂だらけにしたなり、失望したやうにこう言つてゐた。

ここでは「青いものが一すぢ」リボンのようにゆらめいており、それをK君は「蜃気楼」と呼んでいる。この引用文だけ読むと「蜃気楼は、青いリボンのようなものだ」と意味付けられよう。しかし、その後、先ほど「新時代」とよばれた男女が、なぜか突然向こうから現れ、次のように叙述される。

> 僕等はO君の言葉と一しよに砂の上から立ち上つた。するといつか僕等の前には僕等の残して来た「新時代」が二人、こち
> らへ向いて歩いてゐた。
> 僕はちよつとびつくりし、僕等の後ろをふり返つた。しかし彼等は不相変一町ほど向うの笹垣を後ろに何か話してゐるらしかっ
> た。僕等は、――殊にO君は拍子抜けのしたやうに笑ひ出した。
> 「この方が反つて蜃気楼ぢやないか？」

ここで先ほどK君が「新時代」と呼んだ「海を眺めている男女」が逆方向から歩いてくる。もっとも、それも勘違いで、実際は格好が同じなだけの別人である。先ほどの男女はまだ後ろにいるのである。それを見たO君が、その先ほどの男女に似た別人の事を「蜃気楼のようだ」と比喩する。

このように「蜃気楼」という作品は、主人公らが勘違いや錯覚を繰り返しながら、比喩(連想)が重層化している。具体的にいうと「新時代」は、最初「憂鬱な風景」のイメージに喩えられ、次いで「海を眺めている(男)女」のイメージに結びつけられる。すると、その「海を眺めている男女」とよく似た別人が突如現れ、それが「蜃気楼」のイメージに喩えられる。本作で「新時代」と呼ばれているものは、憂鬱な風景のようでもあり、海を眺めている(男)女のファッションのようでもあり、蜃気楼のようでもあるのである。そうして、次のように語られる。

> 「僕は何だか気味が悪かった」
> 「僕もいつの間に来たのかと思いましたよ」

以上のように「新時代(＝憂鬱な風景＝海を眺めている男女)＝蜃気楼(＝青いリボンのようなもの＝男女の別人)＝気味が悪い」という類推は、物語の時間軸にそってイメージが地と図のように反転し合い錯綜しあいなが

ら、意味が一つの像を結ぶことなく、モザイク状に拡散していく。こうしたレトリックによって「蜃気楼」は「新時代」との間に、何か関係がありそうに仄めかされながら、具体的に両者がどのような意味で結びついているのか分からない。ただ、蜃気楼＝新時代は、曖昧ながら憂鬱で無気味なものとして「ぼんやり」と読者に印象付けられる。

3. しりとり式連想

見てきたように「一」には、錯視のレトリックがみられた。それは時間的推移によって「新時代」や「蜃気楼」のイメージに多層性を加えていく手法であった。そして「蜃気楼」と「新時代」のイメージを、一つの像として焦点化させることなく、むしろ反対に像を拡散し、曖昧にしてしまうのであった。

ところで、ここで注意したいのは「一」の最後に出て来る「水死体」＝「蜃気楼」の喩えである。「一」の最後をみよう。

> 「縁起でもないものを拾つたな。」
> (略)
> 僕はK君に返事をしながら、船の中に死んで行つた混血児の青年を想像した。彼は僕の想像によれば、日本人の母のある
> 筈だつた。
> 「蜃気楼か。」
> O君はまつ直に前を見たまま、急にかう独り語を言つた。それは或は何げなしに言つた言葉かも知れなかつた。が、僕の心も
> ちには何か幽かに触れるものだつた。

ここでは「水死体」が「蜃気楼」に喩えられている。これはもちろん、前述した「蜃気楼(＝青いリボンのようなもの＝海を眺めている男女の別人)＝新時代(＝憂鬱な風景＝海を眺めている男女)＝気味が悪い」に組み込まれる気味の悪いイメージであるが、なぜ水死体のイメージが蜃気楼のそれと結びつくのか。

私見を述べれば、これについてはおそらく後半(二)の展開と関係がある。結論からいうと、後半(二)では「しりとり」のように、イメージが連続していき、何か<恐ろしいもの>が海の向うからこちらに迫って来るようなイメージが展開されているが、結局何も起こらないまま終わるという形になっているのである。その幽霊のように<(海からやってくる)恐ろしいもの>の不気味でミステリアスなイメージが、水死体＝蜃気楼のイメージと重ねられているのではないか。以下、後半(二)の展開についてみていきながら、その問題について考察してみよう。

前述したように「二」は「K君が東京」へ戻り、夕飯をすませた後の「午後七時頃」、僕が「又O君や妻と一しよに引地川の橋を渡つて」、再び海岸に行く場面から始まる。浪打ち際でO君がマッチをともすと、さまざまな貝殻などが照らし出される。

> O君はその火が消えてしまふと、又新たにマッチを摺り、そろそろ浪打ち際を歩いて行つた。
> 「やあ、気味が悪いなあ。土左衛門の足かと思つた。」
> それは半ば砂に埋まつた遊泳靴の片っぽだつた。

ここでは、O君がマッチを摺ると、遊泳靴の片っぽが暗闇からぼんやりと浮かび上がり「土左衛門の足」と間違われる場面が描かれているが、この「土左衛門」のイメージこそ、「一」の最後の「水死体(水葬された死骸)」との、水死体繋がりのしりとり式イメージの連鎖となるのではないか。

これはもちろん、仮説の域を出るものではない。しかし、その後の展開をみると<似たようなイメージ>から<似たようなイメージ>へという、しりとりのようなイメージの展開がみられるのである。たとえば、ここでは「遊泳靴」が描かれているが、これは続く妻の「木履」のイメージに連続していく。いわば「遊泳靴」から「木履」への靴繋がりのしりとり式イメージの連鎖である。

その妻の木履には「鈴」がついているというが、それは「袂」の中で「鈴」が鳴っている話題になる。いわゆる鈴繋がりのしりとり式イメージの連鎖である。それから、夢の話となった後、背の低い男が向うからやってくるが、男が近づくにつれ「ネクタイ・ピン」(巻煙草の火)などが見えるようになる。これも「袂」から「巻煙草の火(を持つ手)」への袖繋がりのしりとり式イメージの連鎖といえないか。

このように後半(二)では「水葬された死体の木札」だったものが「土左衛門の足のような遊泳靴」という具合に、水死体繋がりでイメージをしりとり式に連続させ、その「土左衛門の足のような遊泳靴」だったものが、次は「木履の鈴の音」に、靴繋がりでしりとり式に連続する。さらに、その「木履の鈴の音」が鈴繋がりで今度は「袂の鈴」に、しりとり式に連続する。そうして、最終的に「袂の鈴」は袖(袂)繋がりで「巻煙草の火(を持つ手)」に、しりとり式で連続する。このように「後半」(二)では、何か恐ろしいものが、足先から胸の方にむかって――あるいは、海の向うからこちらに向かって、次第にやってくるかのような、不気味でミステリアスなイメージとして印象される。

もっとも、結局<近づいて来る何か>の顔は明らかにならない。そのことは夢の挿入話と関係している。夢の話のなかでは「頭」だけが女性になっている男性タクシードライバーの話が展開された後、暗闇のなかで「僕」達の「顔」だけは、はっきり見える、という具合に「頭」(タクシードライバー)から「顔」(僕等)へと、しりとり的なイメージが展開されているが、この「頭」は「胴」とは繋がらない。

結局、足先から胸の方へと展開するイメージには「頭」がなく「頭」から「顔」へと展開するイメージには「胴」がない。両者は一体化することなく――いや、関係があるのか、ないのかすら、よく分からないまま、結局、何も起こらないまま、物語は終わる。「二」におけるしりとり式の連想法も「一」のようにイメージが一つの像を結ぶことなく、はぐらかされたまま終わるのである。

以上のことから<水死体＝何者かが、海の向うからこちら側に近づいて来る予感>こそ「一」の最後で、水死体のイメージを蜃気楼のそれと結び付けた僕の心もちになるのではないかと考える。

4. むすびに

以上、本稿は「蜃気楼」の前半部(一)と後半部(二)を見てきた。

前半(一)は比喩的に様々なイメージが、蜃気楼に結び付けられるが、結局一つの像を結ぶことなく、拡散していく手法が取られているという事であった。また、後半(二)は、足から胸の方に向かって、海の向うから自分達の方に向かって、しりとり式にイメージが連続していくが、結局、何か恐ろしいものが現れて来るという雰囲気だけ残して、何事も起こらないまま終わるのであった。

このような両者に共通しているのは「一」も「二」も、イメージの連続性と非連続性が、同時併存しているという事態ではないだろうか。たとえば、前半(一)では、様々なものが比喩的に結びつけられるが「新時代(＝憂鬱な風景＝海を眺めている男女)＝蜃気楼(＝青いリボンのようなもの＝海を眺めている男女の別人＝水死体)＝気味が悪い」といった具合に、イメージは結合しつつ拡散し、一つの像を結ぶことはない。後半(二)では「水

葬された死体の木札」→「土左衛門の足のような遊泳靴」→「木履の鈴の音」→「袂の鈴」→「巻煙草の火(を持つ手)」と言った具合に、しりとり式に連続し、何か恐ろしいものが、海の向うからこちらに向かって現れて来るような、恐ろしい印象があるが、結局、何もおこらない。イメージのしりとり式連想法は連続しているよ　うに見えつつも、はぐらかされて終わる。

重要なのは「蜃気楼」における、こうしたイメージの変形・変容のレトリックである。あるものが連想によって結びついたかと思うとはぐらかされ、イメージが結合しつつ拡散する。あるいは、語り手によって連想がミスリードされ、連続性がはぐらかされる。筆者はそれを錯視の手法と呼んだわけだが、こうした手法によって、作品世界はイメージがモザイク状に拡散した「ぼんやりした世界」となっていく。作品は、想像／現実、錯覚／事実などの境界上というぼんやりした世界で展開されているのである。

三島文学に描かれたゴシック
―女性と家庭の関係―

李佳呟(嘉泉大)

1. はじめに

ゴシック小説は恐怖の環境、超自然的な出来事、そして現在への過去の侵入によって特徴づけられる。一般的に過去に対する物理的な記憶が含まれており、特に現在衰退している、以前繁栄した世界の証拠として廃墟となった建物が重要な意味を持つ。そしてその背景としては城、修道院や修道院のような宗教的な建物、そして地下室が含まれ、ゴシック文学研究において「家」の意味は核心的な位置を占める。

このようなゴシック小説ジャンルにおける城、地下監獄、森、そして隠された通路から女性ゴシックが生まれた。女性ゴシック談論は悪党・父親から逃げ、母親を見つけられない、迫害を受けるヒロインのような主題に焦点を合わせており、男性中心的社会の統制が女性ゴシック文学の最も核心的な背景になっている。

三島由紀夫の戯曲「熱帯樹」[1)]は戦後の近代家族を背景に近親相姦、心中をテーマとした家庭の崩壊を描く。専業主婦のヒロインは閉鎖された空間である家の中で家父長的な夫の従順な所有物である一方、母親としては子供たちを「家」という監獄に閉じ込めて苦しめる狂気を見せる。本発表では男性中心社会を象徴する「家」という空間の中でヒステリーとして発現される女性の姿を通じて女性ゴシックの姿を分析する。

2. 三島戯曲と女性ゴシック

三島戯曲には作品の核として女性の姿が非常に細かく描かれる。また、三島戯曲の特徴の一つとしてそのほとんどが家庭劇であることを挙げることができる。実に、「只ほど高いものはない」(1952)、「十日の菊」(1961)、『朱雀家の滅亡』(1967)などの戯曲作品だけでなく、「獅子」(1948)、「憂国」(1960)などの短編作品でもその主要な舞台として「家庭」を背景に描くことが多い。このように家庭劇という特徴を持つ三島戯曲において女性の姿が強調されて描かれるのは当然のことかもしれない。なぜなら三島が創作活動を展開していた時期は、日本社会が高度経済成長期に入る時期であり、核家族化する都市の新中産層の間で「夫は仕事、妻は家庭」という戦後的な近代家族モデルが形成・一般化した時期だったからである。

日本で「働く夫、専業主婦の妻」という組合が一般的になったのは戦後の高度経済成長期で、戦後に女性は

1) 1960年1月『声』で発表。莫大な財産を狙い、息子に夫を殺させることを企む妻と、その計画を知った娘が愛する兄に母を殺させようとする家族の悲劇を描く。

社会進出よりはむしろ「主婦化」され、家庭内に閉じ込められるようになった。つまり、「男性は外、女性は内」という方針のもと、女性は母親および主婦という家庭内の役割を全面的に担うことになったのである。このように女性は家庭内の存在として家と結託することになり、家という特定空間の中で夫、そして子供という特定関係の中でのみその存在意義を持つことになる。

三島は特定空間、あるいは特定関係の中で表れる人間の不安を、二重的な女性の姿を通じて描くが、これは人間の異常心理を描くゴシック小説と無関係ではない。1790年代からイギリスで大衆的な人気を集めたゴシック小説とは、ホラー小説とロマンスの要素が結合したジャンルで「ゴシックロマンス」、あるいは「ゴシックホラー」とも呼ばれるが、これに対しては「厳格な写実主義的な再現方式に順応することを拒否し、読者に恐怖を呼び起こすことを主な目的とするナラティブの一形式」と定義されたりもする。

ルネサンス時代のリアルで合理的な伝統と他の経験的な物質世界を越えた神秘的で、不可解な領域を探求するゴシック小説は、「理性の時代」と呼ばれる18世紀に登場し、当代ルネサンスの厳格で規律ある時代精神に対する無意識的な反作用として理解できる。伝統的なゴシック小説の事件は主に古い城、寺院、修道院などを背景に秘密通路、地下監獄、秘密の門、隠された部屋などで発生する。内容は主に若くて純潔な女性が残忍で欲情的な悪に遭う苦痛を扱うが、ここで暴君・悪党は主に王、城主、あるいは父親として女性人物を威嚇し苦しめる。すなわち、女性は悪魔的な力の犠牲者として主に描かれ、この時、恐怖の対象は主に抑圧的な君主と家父長であった。

時代の流れとともにゴシック小説はその意味が拡張され、中世ゴシック風の古城に代わって陰気な大邸宅が背景に登場するなど、恐ろしい雰囲気を中心に奇怪で残酷な事件、人間内面の深い欲望および非理性的な心理を扱う作品群すべてがゴシック小説と呼ばれるようになる。

古城を背景に始まっただけに、ゴシック文学作品の中で「家」の意味は重要である。「家」という空間とその中に含まれた悪行、近親相姦、あるいは隠された過去などの内容が絶えず繰り返されてきており、特に女性主人公の主舞台である－－唯一とも言える――家は彼女たちに保護と監禁という意味の中で不安と恐怖をもたらす。女性は日常的で最も近い場所において生じる脅威、そしてその中で感じる恐怖と無力さに包まれ、時にはこのような感情は狂気に変容されて表れる。すなわち、ゴシック文学における家は女性を閉じ込めて活動を制限し、狂気に至らせる空間に他ならない。

前述のとおり、戦後の近代家族形態は「夫は仕事、妻は家庭」という伝統的な性役割に基づいて女性をむしろ家庭内の存在に転落させた。すなわち、家=女性という価値観が内面化され、家庭を女性の領域と規定し限定する社会的規範が当然のこととして位置づけられる。三島はこのように家庭内に閉じ込められ、閉鎖的な状況に置かれた女性の姿を特に戯曲を通じて描いている。保護の場、あるいは安楽な安息所ではなく、監禁の場、そして逃避先の存在しない、やむを得ず定住しなければならない場所を意味する「家」という空間、その限界の中で描かれる両価的な女性の姿を以下で分析する。

3.「熱帯樹」における女性と家庭

資産家の恵三郎は妻・律子に可愛い小娘でいることだけを要求する。息子・勇は幼いときから母に異性として惹かれており、その気持ちを利用して律子は、夫を殺すことを企む。一方、娘の郁子は病床にあるものの、兄を愛し、母を憎み、母の殺害を兄に要求する。しかし勇は、両親の殺害に失敗する。律子は兄を愛する娘の嫉妬心を刺激し、郁子は兄を寝床に引き入れる。そして二人は心中を試みて海へ向う。

家族の崩壊を描いた「熱帯樹」は、三島の代表的な戯曲『サド侯爵夫人』(1965)とともに、ヨーロッパやフランスで最も頻繁に上演される作品である。鈴木晴夫は兄妹近親相姦から心中へと至る勇と郁子の悲劇が、「詩的

なセリフに彩られて」「アモラル」な、そして「夢幻的な味わい」を感じさせる[2]と評価している。また、越次倶子は、ギリシア劇のなかから三島が得たデュオニソスのイメージの解明の糸口になる作品の一つである[3]と評している。

3.1. 家庭内の「怪物」・支配者――母

三島戯曲の中で最も知られている作品の一つである『サド公爵夫人』(1965年)においても、母と娘はよく口論をしている。こうした母・娘の対立は三島の描く「家庭」作品の特徴の一つともいえるが、「熱帯樹」においてはより残酷な様相を呈している。兄妹と母子の二重の近親相姦を思い浮かべさせるこの作品で母と娘はまるでライバルのような関係にあり、二人が登場する場面ではいつも諍いが生じる。娘の郁子は不治の病で床についているが、律子は娘の看護をしない。短編の「獅子」や『女神』のヒロインのように律子も規範的とされている「母性」というものが備わっていない人物として描かれる。我が子を苦しめる、そして、そこから生じる快感を味わう「怪物」的な母親像があるだけである。

律子の台詞だけで一つの場を成している、娘との対立を描く以下のシーンは、この戯曲のクライマックスを構成する場面であり、劇全体を凝縮したものともいえよう。勇に夫を殺させることを企む律子の計画を知った郁子は、愛する兄に母を殺させようと頼んだが、結局失敗し、その三人は対面する。

> **律子**　私は死なないわ。郁子、よく見てごらん。私は不死神だわ。(笑う)(中略)どうしてそんなに他人行儀な目で私を睨むの？郁子。あなたは私の娘ぢやないこと？私のお腹から生れて、お母様のいい性質もわるい性質も、みんなあなたに伝はつてゐるのぢやないこと？さうしてゐるあなたは、私に似てゐる。(中略)あなたにも見せたいやうでしたよ、郁子、本当にあなたにも。……あの子が私の寝台のそばにやつて来た。(中略)ああ、さういふときのうれしい気持を、郁子、あなたは知らないけれど、お母様は幾度となく知つてゐるのよ。あの子の若々しい熱い息が顔にかかつた。おどおどして慄へてゐる手が私の咽喉のはうへ伸びてきた。……そのときだつたわ。そのときだつたわ、郁子、私が勝つたのは。(十分相手の反応をたしかめてから)(中略)郁子。母親に一等ふさはしいことを私はしたのよ。今しも私を殺さうとした息子の顔を、私は両手で抱いて、ほほゑみながら、自分の白い豊かな乳房の間へ押しつけたの。……ほんの短い間、勇は大人しくそこへじつと顔を押しつけてゐた。汗だらけになつたあの子の頬が、私の乳房にはつきり感じられた。(中略)勇。(勇、ギクリと顔をあげる)又来たかつたら来てもいいのよ。鍵はあけておきますから。[4]

現実世界において作家三島が抱いた母親像としては子どもに対して温かく寛大さに満ちたものがしばしば表明されていた[5]が、彼の作品における母親像はこの引用のように「母」という立場だけを有し、我が子を愛しむような感情は持たない人物であることが多い。律子は自分を指すのに「お母様」というわざとらしい表現を繰り返し、息子を抱きしめその顔を乳房の間に押しつけた行動について「母親に一等ふさわしいことを私はした」と強弁している。息子との近親相姦を想像させる彼女の台詞からは、「母」という資格を用いてその権力を振り

---

2) 鈴木晴夫「熱帯樹」、長谷川泉、武田勝彦編『三島由紀夫事典』、明治書院、1976年、303頁参照。
3) 越次倶子「三島由紀夫全作品解説―熱帯樹」、三好行雄編『三島由紀夫必携』、学灯社、1983年、130頁。
4) 「熱帯樹」(初出『声』1960年1月号)、『三島由紀夫全集』第22巻、新潮社、1975年、346－348頁。
5) 三島は「椅子」(『三島由紀夫全集』第6巻、新潮社、1973年)、「紫陽花の母」(初出『新潮社編集部編「母を語る」』1967年10月、『三島由紀夫全集』第33巻、新潮社、1976年)、「母を語る―私の最上の読者」(初出『婦人生活』1958年10月号、『三島由紀夫全集』補巻1巻、新潮社、1976年)などでやさしく思いやりのある、子どもにとって情緒的な安息所のような憧れの母について描いている。

まわし、我が子は自分の思いどおりにしてもかまわないと考え、まるでペットにすぎないような扱いをしている姿がうかがえる。こうした律子にとって「母」であることは、閉塞した「家庭」内で家族の他のメンバー、とりわけ子どもを苦しめることにつながるのである。

3.2. 家長の所有物――妻

前述のように、律子の理解しがたいふるまいを解き明かす個所が存在する。律子は夫・恵三郎に操られる傀儡として女性の美を求められる。「いづれにしろ、決して地味なものを着てはいけないよ」[6]「(王者のごとき威厳)俺の前では、お前は死ぬまで可愛い小娘でなくちやならんのだ」[7]などの恵三郎の台詞から、恵三郎は律子に対する絶対の権力者であることがわかる。律子は夫の恵三郎の世界の中で、美しさだけを要求される愛玩物として生きてきた。彼女は母の立場だけを有し、親らしい人間的な感情は持たない美的所有物として作り上げられてきたのである。三島は「人間性からいつて当然起りうる事件ではあるが、実際に起ることはめつたにない」[8]実際の事件(フランスで起きた妻と子の共謀による夫の殺害事件)[9]を参照しながらも、夫を殺すには至らず、むしろ永遠に彼の所有物としての妻の位置を脱することのない律子を描いている。しかし彼女は、夫の傀儡、精神を持たない受動的な人間にとどまってはいない。

恵三郎の美的愛玩物として生きることを求められてきた律子は、夫の前では彼に完全な従順さを見せ、表面的にはその「家庭」の支配者は夫の恵三郎のように見える。しかし同時に彼女は、我が子たちを自分の意のままに支配する。律子はこのように両義的な性質を有しているのである。所有物としての律子は精神を持たず、夫の命令のとおり肉体的な美のみを追求する一方、子どもの支配者としての彼女は社会的道徳心を持たない人物として存在する。いずれにせよ律子には彼女自身の意志や精神性が見えないように思われるが、実は、その「家庭」を思いどおりに動かすのが彼女であることには注目しなければならない。彼女は、夫婦および親子関係といった「家庭」内の独占的な所有関係を存分に活用する。妻役としてはまるで人形のように完全な美しい所有物を演じる一方で、裏では夫を殺す計画を立てる律子は、従順に夫に所有されるように見せかける。また、母としては我が子を「家庭」という檻に閉じ込めて苦しめるのであり、まるで子どもの所有者のようにふるまう律子は「怪物」的母親にほかならない。

---

6)「熱帯樹」、303頁。
7) 同上。
8)「「熱帯樹」の成り立ち」(初出『文学座プログラム』1960年1月号)、『三島由紀夫全集』第29巻、新潮社、1975年、486頁。
9)「近ごろフランスの地方のシャトオで実際に起こつた話で、そのシャトオの主の金持ちの貴族と、二十年あまり前に結婚した夫人が、実はこの二十年の間、ひたすら良人の財産を狙つてゐて、つひに息子を使つて、ごくわかりにくい方法で父親を殺させ、やつと二十数年の宿望を達して、莫大な遺産をわがものにしたといふのである」(同上)。

近代日本における幽霊概念の変遷
―黒岩涙香『幽霊塔』を中心に―

柳政勲(高麗大)

1. はじめに

黒岩涙香(1862－1920)の『幽霊塔』(1899)は、ウィリアムスン夫人(Alice Muriel Williamson、1869－1933)の『灰色の女(A Woman in Grey)』(1898)を原作としている。興行のためなのか、涙香自身が原作者を隠していたこともあって[1]、しばらく原作が不詳であったが、 藤井茂夫、 伊藤秀夫などの研究によって原作が『灰色の女』であることがようやく明らかにされた[2]。

『幽霊塔』は、スランプに落ちていた涙香を再起させた作品として評価されている。家庭小説への挑戦が大した成果を出せないまま、しばらく探偵小説の執筆を中断していた涙香であったが[3]、1899年8月9日から1900年3月9日まで『万朝報』に連載したこの『幽霊塔』によって『万朝報』も涙香も全盛期を謳歌することになる。探偵小説ではなく家庭小説に専念していたことから、当時の涙香が『不如帰』や『金色夜叉』を意識していたことは明白だと言っていいだろう。もちろん、涙香は自身の本領である探偵物に復帰することによってこそ世間から認められるようになるが、それが世間あるいは大衆の要求に反する選択肢を選らぶように作家の自我が働いた結果だとは思われない。涙香の本領が探偵物だと言ったが、『幽霊塔』以降涙香の執筆活動はジャンルを超えて冒険小説やSFまでに及ぶ。涙香は、時代の流行を先に察知して上手に大衆の興味を誘発させることが出来た立派な大衆作家だと言えるのではなかろうか。

『幽霊塔』が評判になって『万朝報』の売上が向上されたこともこの脈略から考える必要がある。『幽霊塔』の

---

1) のちに『巌窟王』と題して訳したアレキサンドル・デュマの『モンテクリスト伯』なども明治二十年頃、涙香が訳し出した際に、東京日日新聞記者、関直彦が『西洋復讐奇譚』と題してその抄訳二巻を金港堂より刊行したので中止していたし、デュマ原作の『黒いチューリップ』にしても『万朝報』に掲載予告まで出して(黒花物語と題し)中止したのは、明治三十年十月に国光社から『国の誉れ　　獄の花』と題して、三十六年九月には、大学館から押川春浪訳でも同原作の『ヘーグ奇怪塔』が出版されていたのに気がついたからであろう。競争の世の中だから『幽霊塔』のような傑作の原作は逸速く、且つその内容を他者に察知されないよう発表する必要があった。
伊藤秀雄『黒岩涙香』三一書房、1988年、p.197

2) 原作の発見に関する詳しい事情については以下を参照。
伊藤秀夫、榊原貴教編『黒岩涙香の研究と書誌』ナダ出版センター、2001年
小森健太朗『英文学の地下水脈　古典ミステリ研究～黒岩涙香翻案原典からクイーンまで～』東京創元社、2009年

3)『万朝報』創刊以来、探偵物としては7年ぶりの連載である。(1892年に『大金塊』)

人気については、文語体から口語体へと変わったという文体の要素、もしくは細かな風景描写の省略と圧縮された叙述構造などをその要因として指摘することが出来るかも知れない。ところが、より重要だと思われるのは翻案者涙香が施した内容面の添削である。『幽霊塔』とその原作『灰色の女』の相違点については今まで真剣に研究されたことがなく、長年涙香を研究してきた伊藤秀夫も『灰色の女』について「文学的ではあるが、長い文章で内容は涙香のとほとんど変わりがない」と述べている。全体としてのストーリーにさほど差が見られないのは確かである。しかし、幾つか見られる両作品の差は簡単に無視できるようなものでもない。

従って本発表では、『幽霊塔』と『灰色の女』を比較分析することによって、その相違点が当時の明治日本の時代状況においてどのような意味を持つのかについて考察してみたい。1899年という世紀末の日本で『幽霊塔』が多数の読者に読まれたことは、20世紀末にJホラーが世界的なブームになったことを連想させる。『幽霊塔』を通して垣間見る1899年の社会不安はどのようなものだろうか。明治という時代の中で幽霊のイメージが変貌していく有様を明らかにすることをこの論文の目的としたい。

2.『幽霊塔』と『灰色の女』における幽霊-加害者と被害者

『幽霊塔』には幽霊話があるだけで実際幽霊が登場する場面はない。昔この屋敷で起こった殺人事件が世間に知られ、幽霊が出没するという噂が広がり、いつの間にか幽霊塔と呼ばれるようになったというのが全てである。少しでも幽霊が実感できるところは探すとしたら主人公が殺人事件があった部屋に入った瞬間の描写であるだろう。

> 登り登りて四階まで行くと、ここがすなわち老女輪田お紺の殺された室だ。伝説によると室の一方に寝台があって、その上からお紺が口に人の肉を咬へ顎へ血を垂らしてソロソロ降りてくると云う事だ[4]、

被害者が幽霊として登場する。怖い面はあるが、何かそれを目撃する人間を害するようなものではない。もちろん、それが自分を殺した人間なら話は違う。

> 【資料】『幽霊塔』の原作『灰色の女』の幽霊
> 私は鏡と正面から向かい合う位置で立ち止まった。そして、その青白い鏡の奥に映っているものを見たとき、あまりの恐怖に、私の心臓の血は一挙に逆流したような気がした。
> 私は一瞬のうちに、村の旅館の女将から聞いた話をまざまざと思い出した。それは、犯した罪の報いのために、獄に繋がれ、自由を奪われ、最後に(間接的にではあったが)命を失うことになった娘が、亡霊となって夜な夜なこの時計塔に現れ、恐ろしい罪の行為を毎晩繰り返すようになった、という気味悪い話だった。亡霊となって娘は、毎晩のように、恩人の老女を絞め殺す仕草をし、ベットから飛び降りると、骨に届くほど深く食いちぎられた片手を必死に押さえて、悔恨の呻き声を挙げながら時計塔の階段を駆け下りていくというのだ[5]。

加害者が幽霊として登場(幽霊は悪魔に近い存在)

---

4) 伊藤秀雄編『黒岩涙香集　明治探偵冒険小説集1』筑摩書房、2005年、p.13
5) A･M･ウィリアムソン著、中島賢二訳『灰色の女』論創社、2008年、p.7

3. 幽霊に関する宗教的・歴史的な認識の差異

【引用】キリスト教と幽霊

そもそもキリスト教は、正統派の教義に於いては、幽霊の存在を認めなかった。人間の霊は肉体とともに、死後、墓の中に眠っている。最後の喇叭(らっぱ)が鳴る時に蘇って審判を受け、地獄なり天国なりへと行くというたてまえだ。それまでみだりに歩きまわったりしてはいけないのだ。

したがって、幽霊が出るというのは、悪魔が善男善女の心を惑わせるためにするたぶらかしであるから、幽霊屋敷をお祓(はら)いするには、幽霊ではなく悪魔を祓う。幽霊たちは、いてもその存在を公認されないモグリの営業者だ[6]。

日本には「この世」と「あの世」、すなわち「現実界」と「他界」を結びつけるような「異界」が昔から存在し、その「異界」に住む存在として妖怪や幽霊が認められたことと比べるとキリスト教の世界においては「異界」という概念より「他界」だけが強調されたともいえよう。それはキリスト教だけではなく、仏教など、人類の宗教全般においていえることかもしれない。

【引用】シェイクスピアと幽霊

“気”—英語で言えばスピリット、ラテン語で言えばスピリトゥスーの語源は霊魂(アニマ)の語源と同じく、「生命の息吹」という意味での「息」である。生命の原動力としての息が吹き込まれて生気(スピリット)が充(み)ちるわけだが、この「スピリット」という言葉は“気”や“精神”のみならず、“霊魂”“悪霊”そして“妖精”までをも意味した。

ただし、“妖精”といっても可愛い存在ではなく、中世までは人間ほど大きさの妖怪の仲間と見なされていた。現在一般に流布している小さな愛らしい妖精のイメージが生まれてきたのは、初めて妖精を愛すべき小さなものとして描いたシェイクスピアのおかげとされている。(中略)また、シェイクスピアは、スピリット(spirit)と酷似したスプライト(sprite)という言葉も用いているが、この言葉は『夏の夜の夢』では「妖精」の意味で用いられているのに、『マクベス』では「幽霊(スピリット)」の意味で用いられているため、『冬物語』の次のくだりなどは翻訳家泣かせの難所となる。(中略)霊という言葉は、肉体のあるなしにかかわらずあらゆる霊的存在を指す。肉体のない精霊であれ、人の肉体に宿る魂であれ、みな霊(スピリット)だ。「ソウル」という言葉もあるが、これは、「ボディ＆ソウル」(全身全霊、身も心も)というように「ボディ」の対(つい)になる概念であり、人間の魂を意味する。

したがって、次のようにまとめることができよう。人は死んでも、人の霊(スピリット ソウル)(魂と呼んでもよい)は不滅であり、その霊魂(霊ないし魂)は肉体から離れ、肉体のない精霊(スピリット)と同じ存在となる。そしてその霊(スピリット)が現世に現れて、生きている者に目撃されれば幽霊(スピリット)というわけだ[7]。

---

6) 南条竹則「幽霊西東—中国と英国と」『幽霊学入門』新書館、2010年、p.156
7) 河合洋一郎「シェイクスピアの幽霊」『幽霊学入門』新書館、2010年、pp.25－32

すると、Ghostとは何か。河合洋一郎の解釈によると、スピリットを目撃した人が怖いと感じるとゴーストだという。また、phantom、specterなどは幻影に近いものだとされ、結局これらの用語は目撃する人間を中心に考えた時の名称だといえる。

以上を要するに、西洋の幽霊は基本的に目撃されてはいけないもの、存在してはいけないものであるにもかかわらず、時には目撃されることもあった。(少なくとも文学作品においては)そして、それは日本のように生前の姿をする必要性もなく、何か白いもの(人間の形ではなく、白い頭巾のようなものでもよい)であれば幽霊として認識された。ここで、江戸時代から活発に描かれてきた日本の幽霊画を思い出してもいいだろう。

明治日本で何か白いものだと幽霊だと人々に教えてくれたのは西洋文学の翻訳ではなかろうか。黒岩涙香の1890年作「幽霊」にもそのような幽霊認識が見られる。

4. 病としての幽霊・幽霊屋敷

【資料】下谷怪談

『新朝日新聞』1894年9月9日

下谷の幽霊屋敷

『都新聞』1898年7月12日

下谷の怪談

下谷区西町派出所の横丁に三軒一棟の長屋あり此処へ先頃数奇屋町より引越せる佐倉某といふ古物商が近来何とも付かぬ病に罹り家内が寐静まると三十七人の女姿がアリ／＼と枕元に立つと見て夜な／＼襲(？)はるるのみか座敷の柱に刀で切付けし跡あるハ大かた以前この家で女でも殺されしものなるべく此の某が引越し来るまでに七人ほど暫しの間に借手が変りしとの事に愈々薄気味悪く佐倉ハ早速他へ転宅せるが隣家なる薪屋の主人も先頃便所に往きし折件の女の影を見て気絶せりとかにて化物屋敷の評判界隈に高し

【資料】金欲と化物屋敷

『中国新聞』1896年7月28日

化物屋敷と家主の強欲

新川場町の七十軒多門に化物屋敷ありとの噂高きと共にそれに隣れる二軒の家には毎年コレラ病あり赤痢病あり困つたものと人々肩を顰むる事なるがこの三軒の持主は大手町七丁目の松島？四郎[五十年]とて十年西南の役に従軍し勲七等に叙せられ其の後十余年間本懸看守となり居りし者にて今は湯屋を営み傍らに荷車人力車等数十挺を処持してこれを貸付け居るものなるが性来の強慾者にて家賃は無性矢鱈に値上げし且つ家を貸す時は投入れと称へて五円の金を取上げスヽ料とか名付けて其の上に五十銭払はしむる等の事を為して近所近邊での悪まれ者なるが此の者の慾心まだ／＼深く第三分院の雪隠の解崩しを買受けて前記新川場町に在る三戸の借屋の近くへ又一戸を建築したりと云ふ、たゞさへ家賃を取上ぐる許りにて掃除などはした事なければ毎年流行病も起る借屋の其の上に木材もあらうに雪隠の崩しを以て建築するとは公衆の衛生をも近隣の迷惑をも思はぬ不届の痴者と云ふべし猶其の化物の出ると云ふは毎夜のことにて家鳴り振動しマコトに恐ろしきことなりとか、これも強慾の報ひと云はんかし

【資料】黒岩涙香訳『幽霊』(1890年)

幽霊を神経病の所為なりと云ふは最古めきし説にして今は又学者にも幽霊ありと唱ふる人多し兎に角も茲に説出す幽霊は怪談神経の類に非ず村中の人残らず見たる幽霊なり去れど怪談に伝ふるが如く恐ろしき遺恨ありて出たるにあらず又此世に物言ひ置く事ありて迷ひ〳〵て出たるにも非ず最長々しき事情より説き初む読者願くは辛抱して幽霊の出る所まで読続けられよ[8)]

8) 黒岩涙香訳『幽霊』井上勝五郎、1890年、p.7

松本清張研究

申鉉泰(祥明大)

1. はじめに

40代で作家として出発した松本清張(以下、清張)は、前半生で溜め込んだ思いを噴出させるかのように書き続け、700冊以上の著作を発表した。昭和の巨人、最後の文豪とも称賛されている彼の作品を論ずる際、最も有効な方法として挙げられるのは5つのキーワードに依拠した分析である。

それは、① 社会派、② 破滅する男女、③ 鉄道旅、④ 映画とドラマ、⑤ 昭和を暴く、といった5つのキーワードーにほかならない。

まず、①の社会派は、特殊な舞台で奇抜なトリックを駆使する「探偵小説」から、一般社会におけるリアルな事件を描く「推理小説」へとミステリージャンルの方向性が変わった一連の傾向を指す言葉だが、その急激な動きの正面に立って、「社会派推理小説」といった新たな地平を拓いた張本人が清張にほかならない。

②の破滅する男女に属する作品には、勤め先から巨額の金を横領する女、成功を渇望しながらも報われない男などの悲劇の物語が繰り広げられ、清張の作品の男女は誰にもいえない秘密と苦悩を抱えている。

③の鉄道旅に属する作品を纏めてみると、長距離移動といえば鉄道だった時代を思い浮かべば、鉄道旅というキーワードーがいかに適切なものだったかが容易にわかってくる。そこには、時刻表トリックや寝台特急に乗って夫を探す主婦、中央線や西武線沿線から都心に通勤するサラリーマンなど、清張作品に鉄道は欠かせない。

④の映画とドラマの場合、清張作品は映像化との相性もよく、映画とドラマを合わせて400本以上が作られている。そもそも清張自身も無類の映画好きだったので、1978年に「松竹映画の申し子」とされていた野村芳太郎監督と共に製作会社「霧プロダクション」を設立したこともある。

最後の、⑤昭和を暴くという面では、『日本の黒い霧』や『昭和史発掘』などのノンフィクション作品を通じて、清張は「昭和」という激動期に肉迫しょうとし、実際彼が追求した事件には、「帝銀事件」(1948年)、「下山事件」(1949年)、「2.26事件」(1936年)などがある。

いっぽう、作品をジャンル別にわけると、推理長編、名短編、歴史及び時代小説、ノンフィクション、古代史、のようにまた5つの項目ができる。

ところで、普段、作者を評価し、作風を分析する際に時代別、或は傾向別にわけるが、清張の場合、そういった分類方法があまり当てはまらない。たとえば、初期、中期、後期のような普遍的な区別法で清張の作風を判断するのは容易ではない。それに、通俗小説作家、純粋小説作家といった一般的なカテゴリーにもいれられないのだ。つまり、清張は、あらゆるジャンルを自由に行き来できる希にみる作家であり、俗に言うオールラウンドプレーヤーで、ボーだーラインのない作家ともいえる。

そういう意味で、「社会派」という独特な用語を生んだ清張の推理小説は注目に値する。何故なら、どこにも属してない作家のようにみえる清張だが、実は推理小説家として名声を博し、芥川賞も受賞した唯一の作家であることは看過できないし、何よりも清張が作家として最初に成功を収めたのが他ならぬ推理小説だったからだ。

そこで本稿では、「社会派推理小説」の第一作となった『点と線』と、その続編ともいえる『時間の習俗』とを分析の対象にし、「社会派」と名付けられた理由を明らかにするいっぽう、作者の時代を捉える鋭い視線とそれに基づく意識的な方法とその限界について考察してみようとする。

2. 社会派ミステリーの誕生

まず、社会派ミステリーとは何かを言及する前に、社会派ミステリーの誕生の背景について触れておきたい。これもまた清張と深く関わってくるものがあって、まさに清張が社会派ミステリーの嚆矢の称を得た所以でもある。

清張出現の以前、日本のミステリー文壇は、周知のように江戸川乱歩、横溝正史といった2大作家の旺盛な活動によってそれなりの発展をし続けていた。乱歩の場合、西洋の佳作を翻訳、翻案して刊行するのがやっとのミステリー文壇に新風を吹き込み、乱歩の駆使した西洋並のトリックと斬新な構想は、それまで日本オリジナルの創作ミステリーを渇望していた文壇側や読者たちの熱狂的な歓迎を受けたことはいうまでもない。

横溝正史もまた、乱歩が追求していた本格ミステリーの流れを汲みながらも自分なりの成長をし続け、横溝正史ワールドというべく、あくまでも日本の風景や伝統から掛け離れることのない独特な日本型本格ミステリーを完成しようと創作に邁進していた。

その真っ只中、彗星のように顕れたのが他ならぬ社会派ミステリーである。清張はエッセイ『黒の手帳』(中央公論社,1961)で「探偵小説を〈お化屋敷〉の掛小屋からリアリズムの外へ解放」したかったといっているが、ここでひとつ気になるのは〈お化屋敷〉という表現である。これはいったい何を意味しているだろうか。それを究明するためには再度乱歩や正史の方に戻らなければならない。

当時、乱歩は、甲賀三郎と木々高太郎が激論を交していた、「探偵小説芸術論」の間に挟まれ(『現代推理小説大系』別巻2、講談社、1980，4)、やや探偵小説に芸術は不要だという立場に寄りながら、創作の面においても怪奇、幻想、夢幻の世界を描いた作品を次々と発表していた。

正史もまた、己のみの独特のミステリー世界を築き上げようと精力的にペンを動かし、デビュー作『本陣殺人事件』を始め『獄門島』、『八つ墓村』、『犬神家の一族』といった日本の推理小説の歴史に残る傑作を創り出していた。

これが、当時、ミステリー文壇の大体の状況であった。一見、何の異様のないようにみえるかもしれないが、その中を覗いてみると、そう簡単に纏めるものではない。実をいうと、最も深刻なのは乱歩の方で、デビュー当時の本格ミステリーに対する熱情と愛情を恰も忘れたように、変態性欲といった扇情性やファンタジーさえも創作の道具として取り入れ、初期のすぐれたトリックや天才的な発想とは、程遠い方向に逃げつつあったのだ。やがては、既成作家側からエロ･グロ･ナンセンス作家と罵倒される羽目にまでなる。のちに乱歩のミステリーは少年冒険ミステリーとして再び蘇るが、初期の物とは当然比べ物にはならなかった。

正史の場合はどうだろうか。乱歩とは正反対に一時、スランプはあったものの、見事に復活し日本のミステリーの土壌を潤したことは誰もが認めざる得ない彼の業績である。因みに、スランプから立ち直った切っ掛けは生憎も社会派ミステリーに飽きた読者たちの要請から発したというから読者というものは不思議極まりない生き物であろう。

話が少し逸れたが、社会派ミステリー作家たちは、正史の輝かしい業績を始めとする一連の作品や同傾向にある家たちのミステリー物に興が冷めていた。もっと詳しくいうと、ホラー小説を思わせる恐怖の雰囲気や、血の海となった殺人現場の描写(真っ白い蒲団は例外なく真っ赤な血に染まっている)、殺された人の数(3，4人死ぬのは当たり前)、化物を髣髴させる容貌の謎めいた人物、などここに挙げた例は、作品の随所に顕在化されており、ミステリー小説の風景としてほぼ公式のようになったことへの不満とその不自然さである。つまり、そんなことは起るはずがないばかりか、あまりにも非現実的すぎるのに大きく関わってくる。

なるほど、清張はこういった数学公式のような状況や設定という装置がまるで「お化屋敷の〈掛子屋〉」に思われて我慢ならなかったのだ。殺人は、孤島や大邸宅、裕福だが仲の悪い親族の間だけに起るものではない、普通の人間が普通に行き来できる環境や風景でも充分起こり得るし、寧ろそれが現実に近いと思ったことに間違いない。

さらに、「ところで、探偵小説ですが、どうもあまり人間が書けてないと思っていました。トリックとか、意外性ばかりねらっているのでこれを私が書くならばもっと人間が出るようなものを書きたい。犯罪の動機のほうを重視とかね。動機を重視するというのは人間の心理描写につながる」、「人間の心理描写が近代小説の要素の一つであるならば推理小説だって近代小説として一種の市民権を獲得できるんじゃないか」(三好行雄との対談)とあるように、清張は定形化されつつあった既存の推理小説作法への批評に留まることなく、自分が主張する推理小説の可能性を自ら試みようとする意志に満ちていた。

こういった経緯があってからこそ誕生したのが他ならぬ社会派推理小説というジャンルであり、その第一作が『点と線』である。

3.『点と線』の経緯

『点と線』は、社会派推理小説第一作という文壇的、歴史的価値以前に清張にはもう一つの意味のある作品である。1950年、清張の41歳の時、当時勤めていた朝日新聞社の「週間朝日」が「百万人の小説」を募集しているのを知り、『西郷札』を書いて応募し、3等入選するが、これが清張のデビュー作である。他の作家と比べて甚だ遅いデビューであったが、貰った賞金10万円は、扶養家族7人という重荷を一人で背負っていた清張にとっては、束の間ではあるものの生計を営むにおいて役に立っただろう。

それから3年後の1953年、清張の人生に最大の転機が訪れるが、それが芥川賞受賞に他ならない。受賞作、『ある「小倉日記」伝』は、片足の不自由な青年が偶然発見した森鴎外の「小倉日記」の欠落部分を自ら補っていく姿を描いたものである。選者の一人、坂口安吾の絶賛通り、優れた作品である。

その年の12月、東京本社への転勤によって単身赴任となり、一人暮しをしながら幾つかの作品を発表するが、反応は冷たかった。1年後、家族を呼び、貧しいながらも安定した環境のなかで次々と作品を発表、しかし、そのいずれもが悉く無視され、意気消沈のまま、このままペンを投げ捨てるか、どうか迷っている真っ只中、またもや芥川賞受賞と同様、大転機の瞬間が訪れるが、他ならぬ『点と線』の執筆依頼である。

日本交通公社(JTB)の旅行雑誌「旅」に1957年2月から翌1958年1月までまる一年間連載された。芥川賞受賞以来、4年間、清張に執筆依頼が殆んどなかったことは不思議極まりないが、それはさておき、旅行雑誌「旅」の執筆依頼には、1964年東京五輪に至るまでの高度経済成長を象徴する社会現象の一つである旅行ブームの一般化を背景にしているのがわかる。

また、『点と線』のなかには、福岡行き特急列車「あさかぜ」、札幌行き特急「まりも」、などなど社会派ミステリー云々以前に、先述した5つのキーワードー中、鉄道旅の項目に深く関わってくるところが随所に顕在化されている。さらに、作品のなかで挙げられる主要駅の上り線、下り線のダイヤの時間差による鉄道トリック

は、鉄道ファンにとってはたまらないものに間違いないだろう。

いっぽう、『点と線』の大成功の神話にはもう一人の助力者がいた。考えるまでもなく、一般の読者は一部のマニア当ての雑誌にこの大作が連載されているのを知るべくもなかったし、当然、連載当時、『点と線』は、評壇からも読者からも関心の外側に放り捨てられていた。

ところが、当時、出版界の新風を巻き起こしていた光文社にこの「旅」の『点と線』に溺れていた社員がいて、創設したばかりの「カッパ·ブックス」の一冊に入れることを強力主張し、断念しなかった。結局、社員の意志が勝ち、いよいよ出版してみたらこれが爆発的に売れ、以後、清張文学の大人気の起爆剤となったのは言うまでもない。

こういった紆余曲折を経て清張、人生最高の名作『点と線』が誕生し、この『点と線』も大成功を足掛かりに国民作家の名誉まで上り詰めることができたのである。

4.『点と線』

5.『時間の習俗』

6. おわりに

文 化

惑星的な地域研究と居住可能性

―人新世の日本地域学―

李康元(仁川大)

1. 들어가며

후쿠시마 원전사고와 후쿠시마 오염수 방류는 우리가 인류세에 살고 있음을 인간 스스로 증명하는 사건이라 할 수 있다. 유네스코가 인류세의 핵심요소로 제시하는[1] 것은 1945년 최초의 원자폭탄 이후 전 세계로 퍼진 방사성 동위원소, 산업화와 함께 대기에 나온 온실가스 등으로, 자연상태에서는 쌓일 수 없는 인류의 지질학적 흔적이다. 그리고 이러한 흔적을 남기는 인류세의 특징적 현상이 기후재난과 생물의 대량멸종이라고 설명한다. 인간의 힘이 '자연'에 전혀 미치지 않았던 홀로세에 비해서 인류세는 인간의 흔적이 만들어낸 새로운 지질학적 시대로 받아들여지고 있다.

글로벌의 관점에서 보면 위의 사건들은 일본이라는 로컬에서 일어난 사건이 글로벌한 문제로 확산되었다고 하는 익숙한 분석을 내릴 수 있다. 하지만 후쿠시마 원전사고와 오염수 방류는 의학적, 생물학적 문제인 동시에, 층서학적이고 지구생화학적인 문제이기도 하다. 즉 지구 행성을 구성하는 물질적 구성물의 변화의 문제이다. 그리고 이러한 변화가 인간의 삶과 밀접하게 연관되어 있어 그 문제는 더 심각해진다. 인간과 비인간의 연합에서 비롯된 문제들은 인간의 사회관계만을 전제한 글로벌/로컬적 관점의 경계 내에 머물러 있지 않다. 지구 행성의 여러 생명과 물질 간의 연결로 그 문제가 확장되고 이 확장된 문제가 곧 인간에게 문제가 된다. 기후위기와 대량멸종 그리고 재난의 빈번한 발생의 핵심은 우리가 글로벌/로컬 틀로는 이해할 수 없는 세계 속에 살고 있다 점이다. 물질적이고 생화학적이며 생물학적인 지구가 글로벌/로컬이라고 하는 인간중심적 분석틀을 뚫고 그 존재를 내비치고 있다.

후쿠시마 원전사고와 오염수 방류의 문제는 생태계의 연결을 통해 네트워크의 형태로 확장되고 있다는 점에도 주목할 수 있다. 문제에 관련된 존재들의 관계가 네트워크의 형태를 띄고 있다는 점은 이러한 문제들이 이차원 혹은 삼차원 경계로 파악될 수 없다는 점을 의미한다. 기후위기, 대량멸종, 빈번한 재난, 원전사고 등은 생태계를 구성하고 있는 여러 존재의 연결을 통해 망상의 형태로 연장되거나 축소된다. 문제가 이삼차원의 장소 혹은 공간의 지역적 경계 속에서 벌어지는 것이 아니라 거리를 두고 떨어져 있는 인간과 비인간 존재들의 연결이 된다. 이 연결들이 기존의 '지역' 경계를 가로질러 연쇄될 때 경계를 전제로하는 지역개념의 한계가 도래한다.

인류세와 관련된 일본 지역의 문제라고 할 수 있는 위와 같은 논의는 다음과 같은 두가지 문제를 제기한다.

첫째는, 현대의 기후위기, 생물의 대량멸종, 방사능 오염과 공해 등이 글로벌이 아닌 행성의 문제임을 드러낸다. 인간의 지역사회만을 고려하는 글로벌의 관점에서는 간과되어 왔던 비인간이 문제의 전면에 등장한다. 일본

1) https://www.unesco.or.kr/data/unesco_news/view/747/593, 2023년 10월 21일 접속.

지역연구 역시 비인간과 인간의 연합에 주목할 필요가 생긴다. 인간 사회의 지역연구와 자연에 관한 지역연구로의 구분을 넘어서야 할 때이다.

둘째는 지역이 이삼차원의 경계에 둘러 쌓여 있다는 전제는 그 관념적인 경계를 가로질러 영향을 주고받는 수많은 생태계의 존재들과의 관계 그리고 그것들의 목소리들을 배제할 수 있다. 인류세와 관련된 일본 지역의 문제들은 일종의 쟁점으로서 관심의 여하에 따라 논쟁에 참여하는 경계 없는 공중의 형성으로 이어진다. 행정적 혹은 전통적 지역개념과는 다른 방식(manner)으로 더 넓은 규모(scale)로 더 많은 행위자들(agency)을 포함한 지역을 이해할 필요가 생긴다.

이 연구는 위와 같은 문제제기를 통해서 글로벌/로컬의 틀이 아닌 행성적인 것으로, 그리고 경계가 아닌 네트워크로 일본과 지역의 관계를 재설정해보는 연구이다. 그리고 이러한 관점의 전환이 인류세의 일본 지역을 연구하는데 전환점이 될 가능성을 제시한다.

이 연구는 다음과 같이 진행된다. 우선, 일본지역에 접근하는 틀로 글로벌/로컬의 관점의 한계를 살펴보고, 이에 대한 대안으로 행성적 관점을 제시한다. 그리고 행성적 관점의 핵심인 '거주가능성'(habitability) 개념을 소개하고, 거주가능성이 개발/보존의 틀을 전제한 '지속가능성'(sustainability)이 간과한 문제들을 명확히 할 수 있음을 제시한다.

다음으로, 지역 생태거버넌스의 등장을 살펴보고, 행성과 거주가능성의 개념을 통해서 인류세에서 일본 지역의 문제를 새로이 설정하는 연구를 제안한다.

2. 행성적인 것과 거주가능성

1) 글로벌에서 행성으로

디페시 차크라바티 시카고대 역사학 교수는 지구의 변화를 둘러싼 논의가 '인간의 역사'와 '자연사'를 분리해서 다룰 수 없게 만들고 있다고 말한다. 그의 책 <행성시대 역사의 기후>(2023)의 후기는 "글로벌이 행성적인 것을 드러낸다."라는 명제를 제시했다. 글로벌의 관점은 행성적인 것을 글로벌 규모 개발의 '자원' 혹은 글로벌라이제이션이나 글로컬라이제이션 과정의 '배경'이라고 전제했다. 글로벌 시대는 글로벌이 행성을 소유했던 시대이다. 하지만, 인류세로 요약되는 현재에 이르러 행성적인 것이 단지 수동적이고 길들여진 대상에 머물지 않는다는 점이 드러나고 있다.

벨기에의 철학자 이자벨 스텡거스는 이러한 행성적인 것의 드러남을 '가이아의 침입'[2]이라고 부른다. 가이아는 그리스 신화에 등장하는 대지의 여신으로, 영국의 과학자 제임스 러브록의 가이아 이론에서 나왔다. 가이아 이론은 지구가 세포조직으로 이루어진 하나의 생명체처럼 유기적으로 연결되어 있다는 가설이다. 행성적인 것으로서 가이가 침입할 것이라는 스텡거스의 말은, 글로벌한 인간만의 세계에 기후위기, 빈번한 대규모 재난, 방사능 오염, 생물의 대량멸종, 그리고 인류의 절멸로 이어지는 행성적인 것이 침범해 들어올 것이라는 경고라 할 수 있다.

프랑스의 인류학자 부뤼노 라투르는 가이아의 침입에 대응해서 우리가 가이아로 대변되는 행성적인 것에 제대로 직면해야 한다는 점을 역설했다. 행성적인 것 혹은 가이아에 직면하는 방법은 '인간과 비인간의 연합'으로 사건을 받아들이는 것이다. 인간의 인격은 물론, 인간-아닌-타자의 인격도 받아들이는 것이다. 그럼으로써 지구 혹은 행성적인 것이 인간이 이용할 환경 혹은 자원이라는 시각에서 벗어날 수 있다.[3]

---

2) Stengers, I., 2015, In Catastrophic Times: Resisting the Coming Barbarism, Andrew Goffey, trans., Meson Press.

3) Latour, B. 2017, Facing Gaia: Eight Lectures on the New Climate Regime, John Wiley & Sons.

일본 지역연구가 글로벌과 로컬의 조합인 글로벌라이제이션, 로컬라이제이션, 그리고 글로컬라이제이션에서 벗어나, 인간과 비인간의 연합으로서의 행성적인 것에 주목한다면 인간의 몸을 천체, 물체, 육체, 기체 등과의 연속선 상에서 그 관계를 다룰 수 있는 지역연구가 가능할 것이다. 필자는 이에 대해서, '육체-천체 연속체로서의 포스트휴먼 지구되기'[4]라는 주제로 제시한 바 있다. 하나의 예로 후쿠시마 원전사고의 방사능 오염에 대해 DIY 센서로 시민센싱을 실천했던 세이프캐스트를 들 수 있다.[5]

2) 지속가능성에서 거주가능성으로

이러한 지역연구에서 중시해야 할 개념으로 필자는 '거주가능성'(혹은 서식가능성)을 제시한다.[6] 일본 지역은 인간과 비인간이 함께 거주할 수 있는가를 묻기 위해서 거주가능성의 개념이 필요하다. 거주가능성의 개념은 지속가능성과 구별된다. 지속가능성은 개발과 보전의 타협 물로서 선진공업국과 개발도상국 간의 정치적 타협물이기도 하다.[7] 글로벌화된 개발의 흐름 속에서 지속가능한 환경의 보존은 서로 짝을 이루며 인간의 여러 세대에 걸친 개발의 지속성을 목적으로 하고 있다. 어디까지나 현 세대 인간의 발전, 그리고 다음 세대의 지속적인 발전을 위한 보전을 목적으로 하고 있다. 이에 반해서 거주가능성(혹은 행성 거주가능성)은 생명체가 행성에서 자라나고 유지될 수 있는 가능성을 측정하고 이를 관리하는 문제이다. 다양한 생명체들의 공존과 공생을 위해 거주가능성을 관리하기 위해서 지역의 생태 거버넌스가 중요한 도구가 될 수 있다.

인류세의 기후위기, 생물종의 대량멸종과 빈번한 대규모 재난의 위험 속에 있는 다양한 생명체들은 급격한 지구의 변화에 따라 자신들의 습성(habit)을 변화시켜 다른 생명체와 공존공생할 수 있는 서식지 혹은 거주지를 마련해 가는 과정 속에 있게 된다. 여기서 일본 지역은 지속가능성을 넘어 거주가능성을 중심으로 하는 '자연의 정치' 혹은 '생태정치'의 장이 될 것임을 알 수 있다. 실제로 일본에서 이와 같은 행성적 관점과 거주가능성에 대한 논의가 소개되어 오고 있다. 최신 사상의 동향을 소개하는 <현대사상지>에는 '인류학의 행방', '존재론적 전환'[8], '범심론'[9], '인류세'[10]에 대한 논의를 여러 회차에 걸쳐서 소개하면서 비인간의 행위성을 중시하는 신유물론, 범심론, 인류학적 존재론에 대한 논의가 일본에서 활발해지는 계기가 되었다.

3. 생태지역 거버넌스와 일본 지역학

1) 생태지역 거버넌스

지구가 재야생화 되고 있으며, 인류는 생존을 위해 상상력을 발휘해야 한다고 주장하는 제러미 러프킨은 그의 책 <회복력의 시대>[11]에서 생태지역 거버넌스가 부상할 것이라는 점에 주목하고 있다. 생태지역이란, 유사한 생물군을 공유하는 생태계이다. 생태지역 거버넌스란, 생태지역 일부를 지역사회가 관리하면서 인류학적, 심리적, 사회적, 경제적, 정치적으로 소속감과 애착, 정체성, 참여 의식 등이 생기는 것을 의미한다.

다음에 닥칠 재난에 대비해 구조와 부흥을 공동수행해야 하는 지역사회는 이 생태지역 거버넌스가 중요해진다.

---

4) 이강원, 2020, "응답하라 시민센싱: 포스트후쿠시마 방사능지도 그리기의 리스크 커뮤니케이션", *공간과 사회* 30(3):319-371.
5) 이강원, 2020, "지구적 감각, 감각적 지구: 육체-천체 연속체로서의 포스트휴먼 지구되기", 횡단인문학 5:29-46.
6) Habitability는 거주가능성 혹은 서식가능성이라고 번역된다. 인간과 비인간 모두에게 적용되는 개념으로 여기서는 거주가능성으로 표기한다.
7) 미야모토 겐이치, 2016, *환경 경제학,* 이재은, 김순식 옮김, 한울. 46페이지.
8) 現代思想2017年3月臨時増刊号　総特集＝人類学の時代, 青土社.
9) 現代思想2020年6月号　特集＝汎心論-21世紀の心の哲学-, 青土社.
10) 現代思想2017年12月号　特集＝人新世-地質年代が示す人類と地球の未来-, 青土社.
11) 리프킨, 제러미, *회복력의 시대: 재야생화되는 지구에서 생존을 다시 상상하다,* 안진환 옮김, 민음사.

특히 기후재해는 지역의 정치적 경계가 아무 소용이 없으며 오히려 걸림돌이 된다. 실제로 일본의 지역사회는 방사능 오염과 오염수 방류의 경험으로 자신들이 거주하는 지역사회가 생태 지역과 긴밀하게 연계되어 있다는 점을 깨닫고 있다. 정치적 정체성, 소속감, 충성도 등이 생태 지역의 환경적 안녕에 달려 있다는 점은 후쿠시마 원전사고로 피해를 입은 여러 지역들을 통해 밝혀지고 있다.

일본 공해의 역사를 통해서 후쿠시마 원전하고 이후 지역의 재건의 아이디어를 얻고자 했던 요케모토 마사후미는 '후루사토 상실'이라는 지역 단위의 피해에 대해서도 배상책임과 부흥의 노력이 있어야 함을 주장했다.[12] 특히, 이러한 후루사토 상실의 근본적인 원인이 기존의 지역 경계를 넘는 환경오염, 방사능 피폭, 오염수 방류에 있다는 점에 주목한다. 생태 지역 거버넌스는 단지 지역사회의 삶의 배경이나 자원으로서의 환경이 아니라, 지역의 장기계속성, 독특성, 장래의 전망에 밀접하게 연결되고 있음을 알 수 있다.

미야모토 겐이치가 그의 환경 경제학을 통해 공해 피해를 궁극적으로 관리하기 위해서는 지역 환경의 어메니티[13]를 관리할 필요가 있음을 주장한 지도 몇 십년이 지났다. '지속가능한 내발적 발전'의 길을 제시했던 그의 시대에는 '발전' 혹은 '개발'은 문제시할 수 없는 지상 과제였기에 외발적 발전에서도 지속가능한 내발적 발전에서도 '발전'은 탈락하지 않았다. 하지만, 행성적 거주가능성에 대한 논의와 생태 지역 거버넌스에 대한 논의는 지속가능성이 아닌 거주가능성, 그리고 지역의 개발이 아닌 생태 지역 거버넌스로 그 중심이 옮겨감을 예측할 수 있다.

기존 지역사회의 정치적 행정적 경계와 지상부터 상공으로 19 킬로미터까지의 생물권은 반드시 그 경계가 일치하지 않는다. 거주가능성과 밀접하게 연관된 이 생태지역에 대한 관리와 재생에 참여하는 것이 큰 의미를 갖게 될 것임을 알 수 있다. 그리고 이러한 생태 지역의 경계는 공간적 경계라기보다는 한 지역사회의 거주가능성을 가능하게 하는 존재들의 생태적 연결이 된다. 지역의 서식지에 대한 거버넌스는 생태적 지향성이 있는 교육 수준 높은 노동력의 출현으로도 연계되면서 생태지역 거버넌스가 곧 지역사회의 재난과 기후 회복력의 증진으로 연결되고 기후변화에 대한 적응을 가능하게 할 수 있다.

2) 인류세의 일본지역학

'순응적 거버넌스'를 통해 지역생태 거버넌스의 좋은 사례(야생 곰, 멧돼지와 농민의 공존, 멸종위기종이 발견된 수로의 재개축을 둘러싼 갈등 해결 등)를 제시하고 있는 미야우치 다이스케는 그가 편집한 책에서 지역 생태에 순응적인 거버넌스가 필요한 이유로 다음과 같은 조건을 제시한다.[14] 과학조차 확실한 사실을 제공해 주지 못하며, 그렇다고 사회적으로 해결하기에는 다양한 이해관계 간 갈등으로 해결이 불확실하다. 그래서 시행착오를 통해 학습하고 문제 해결의 목표를 유연하게 설정할 필요를 제시한다. 과학적/사회적 불확실성으로 인한 시행착오를 받아들이는 유연한 과정을 거치며 지역 생태 거버넌스를 진행하는 것을 순응적 거버넌스라고 정의하고 있다.

---

12) 除本 理史, 2016, 公害から福島を考える――地域の再生をめざして, 岩波書店 .
13) 미야모토 겐이치, 2016, *환경 경제학,* 이재은, 김순식 옮김, 한울.
14) 宮内 泰介 (編集), 2017, どうすれば環境保全はうまくいくのか―現場から考える「順応的ガバナンス」の進め方, 新泉社

＜スズメの戸締り＞とダークツーリズム

片龍雨(全州大)

1. 들어가며

신카이 마코토(新海誠)는 <너의 의름은.(君の名は)>(2016년), <날씨의 아이(天気の子)>(2019년), <스즈메의 문단속(スズメの戸締り)>(2022년)라고 하는 재난과 관련된 장편 애니메이션을 잇달아 발표했다. 그리고 그 계기가 2011년 동일본대지진에 있었음은 소설『스즈메의 문단속』의 다음과 같은 작가 후기를 통해서도 알 수 있다.

> 내가 38살 때 동일본대지진이 일어났다. 내가 직접 피해자가 된 건 아니었으나 그 일은 내 40대를 관통하는 일상을 지배하는 선율이 되었다. 애니메이션을 만들고 소설을 쓰고 아이를 키우는 내내 그때 느낀 생각이 머리에 있었다. 왜. 어째서. 왜 그 사람이. 왜 내가 아니라. 이대로 끝인가. 이대로 도망칠 수 있을까. 계속 모르는 척하고 살 수 있나. 어떻게 해야 하지? 어떻게 해야? 그런 생각을 한없이 하고 애니메이션을 만드는 일이 어느새 거의 같은 작업이 되어 있었다. 그 후로도 세상이 뒤집힌 듯한 경험을 여러 번 목격했으나 내 저변에 흐르는 선율은 2011년에 고착되어 버린 것만 같았다.[1)]

동일본대지진을 간접 경험한 신카이 마코토는 자신이 애니메이션 제작을 통해 무엇을 어떻게 해야할까라는 고민을 했다. 이는 1995년 한신아와지 대지진과 2011년 동일본대지진을 겪은 대부분의 예능인들이 느꼈던 고민과 일치한다.[2)] 즉「재미」를 추구하는 영화, 연극 등의 예능이 거대 재해로 슬픔에 빠진 일본을 위해 무엇을 할 수 있을까라는 문제이다. 그리고 그 고민에 대한 나름대로의 해답을 예능으로 표출했고, 신카이 마코토의 경우는 <너의 이름은.>이라는 작품이었다. 이 작품의 의미에 대해 신카이 마코토가 강조하는 것은 희생자와 피해지에 대한「기억」이다. 3년 전의 해성 충돌로 희생된 미쓰하와 몸이 바뀌는 다키는 사라져가는 미쓰하의 기억을 반추하며 다음과 같이 이야기한다.

> 인간의 기억은 어디에 깃드는 것일까.
> 뇌의 시냅스 배선 패턴 그 자체일까. 안구나 손가락에도 기억이 있는 것일까. 아니면 안개처럼 형태가 없는, 보이지 않는 정신의 덩어리가 어딘가에 있어서 그것이 기억을 간직하는 것일까. [3)]

---

1) 신카이 마코토 지음, 민경욱 옮김(2023)『스즈메의 문단속』대원씨아이, p.345.
2) 편용우(2021)「재해 연극 축/언 의 기억과 전달의 의미—재해를 넘어 한일 화해를 담아—」『일본학연구』63호, p.66.
3) 신카이 마코토저, 박미정 옮김(2017)『너의 이름은』대원씨아이, pp.207-208.

신카이 마코토가 생각하는 「눈에 보이지 않는 정신의 덩어리」는 「구치카미자케」나 「무스비」(<너의 이름은.>), 폐허의 기억(<스즈메의 문단속>)으로 형상화되고 있다. 다키는 희생자인 미쓰하와 주변 인물, 그리고 희생지인 이토모리 마을을 기억하려 발버둥 친다.[4] 스즈메와 무네타카는 문을 닫아 재해를 막기 위해서는 폐해에서의 기억을 떠올려야(상상해야) 한다. 두 작품의 주인공은 저승을 상징하는 크레이터로 인한 호수(<너의 이름은.>)와 문이 놓여 있는 장소(<스즈메의 문단속>)를 오가며 잊혀져 가는 재해의 기억을 소환한다. 그리고 소환을 통해 재해를 극복하는 것이다.

2. <스즈메의 문단속>의 추모의식

<스즈메의 문단속>의 주인공 이와토는 규슈(九州)에서 미야기(宮城)까지 이동하며 과거 일본의 재해지역을 탐방한다. 배관문은 이와토의 여정을 다음 표로 정리했다[5].

작중 시점의 방문지	실제 사건
1일째 규슈 미야자키현	2016년 4월 14일 구마모토 지진
2일째 시코쿠 에히메현	2020년 7월 서일본 호우 재해
3일째 효고현 고베시	1995년 1월 17일 한신아와지 대지진
4일째 도쿄도	1923년 9월 1일 관동대지진
5일째 미야기현	2011년 3월 11일 동일본대지진

이 지역들은 일찍이 온천지(미야자키), 학교(에히메), 유원지(고베), 마을(미야기)과 같이 사람들로 붐볐던 곳이다. 도쿄도의 경우 고쿄(皇居) 밑의 폐허라고 설명이 되고 있지만, 「아주 오래전 시대의 폐허」, 「그 폐허는 모든 것이 나무와 돌로 만들어져 있었다」[6]고만 설명이 되어 있어, 어떤 곳이었는지 알 수 없다. 단지 고풍스런 뒷문(後ろ戸)은 100만 인구의 에도(江戸)를 배경으로 하고 있음을 짐작할 수 있다.

이와토와 소타는 지진의 원인이 되는 지렁이(ミミズ)가 뒷문으로 나와 재해가 일어나는 것을 막는 역할을 한다. 문을 닫기 위해 폐허의 화려했던 과거를 떠올리는 과정이 필요한데 이는 희생자들의 생전 모습을 연상시킨다. 폐허는 사람들의 기억 속에서 잊혀진 죽음의 장소이며, 뒷문은 사자의 장소와 생자의 장소를 연결하는 통로이다.

신카이 마코토가 이와토 작명의 영감을 얻었다고 하는 아메노이와토(天岩戸) 신화 속 아메노우즈메의 춤은 「생명력을 회복시켜 재생하기 위해 바위 문 앞에서 다양한 진혼 의식」[7]을 의미한다. 주인공 이와토 스즈메가 뒷문에서 떠올리는 폐허 전의 기억은 바로 희생자의 진혼 의식인 셈이다.

희생자들의 기억이 사라진 재해 지역은 더 이상 큰 의미를 갖지 못한다. 이와토가 자신의 뒷문을 찾기 위해 미야기로 향하는 도중에 동행자인 세리자와는 쓰나미로 초원으로 바뀐 벌판을 보고 「이렇게 아름다운 곳이었구나」라고 혼잣말을 한다.[8] <날씨의 아이>에서 맑음 아이인 아마노의 희생을 알지 못하는 사람들은 오랜만의 맑은

4) 신카이 마코토는 『너의 이름은』의 작자 후기에서 「소중한 사람이나 장소를 잃고 말았지만 발버둥 치자고 결심한 사람」(p289.) 을 위해 소설을 쓰기로 결심했다고 밝히고 있다. 작품의 해설을 맡은 가와무라 겐키 역시 「사람은 소중한 것을 잊어간다. 하지만 그것을 기억하기 위해 발버둥 치며 삶을 살아 나간다」(p.295)라고 적고 있다.
5) 배관문(2023) 『잃어버린 장소에 대한 애도는 가능한가-<스즈메의 문단속> 재난 서사의 변화-』
6) 신카이 마코토 지음, 민경욱 옮김(2023), p211.
7) 日本大百科全書, 온라인.https://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=1001000013236
8) 신카이 마코토 지음, 민경욱 옮김(2023), p257.

하늘을 아무렇지 않게 즐기고 있다. <너의 이름은.>에서 역시 작품 내내 희생자 미츠하를 기억하기 위한 노력하는 다키의 부단한 노력이 이어진다.

스즈메가 미야기의 뒷문으로 들어가 무네타카 소타의 기억을 들여다보고, 호다카가 아마노의 희생을 기억하며(<날씨의 아이>), 다키가 미츠하의 기억을 찾기 위해 노력하는(<너의 이름은.>) 이 모든 것은 희생자를 기억하기 위한 생존자들의 노력이다. 38살의 신카이 마코토가 2011년 동일본대지진을 겪고 되내였던 질문「어떻게 해야 하지」라는 질문의 해답을 희생자에 대한 기억에서 찾은 것이다.

3. 생존자를 위한 다크투어

오락이나 휴식을 위해 경치나 사적(史蹟)을 둘러보는 일반적인 여행과는 달리, 학습이나 추모를 위해 재해 유적지나 학살 현장 등을 둘러보는 것을 다크투어리즘(Dark Tourism, 혹은 블랙투어리즘(Black Tourism)이라고 한다. 주로 개인이나 집단이 과거에 죽은 장소에 가거나, 과거의 사건을 기념 추모하는 공간에 가는 경우가 많다.[9] 일본의 경우 전자가 동일본대지진의「한 그루 소나무(一本松)」, 후자가「히로시마 평화기념자료관(広島平和記念資料館)」이 해당한다.

일본의 대부분의 다크투어리즘 시설에는 주로 이재민으로 구성되어「재해의 교훈」을 후대에 전하는 가타리베(語り部)가 있다.「한 그루 소나무」가 있는 리쿠젠타카타시(陸前高田市)의 가타리베 활동을 소개하는 홈페이지에는 다음과 같은 글이 있다.

> 일찍이 이곳에서 있었던 사실을 전승한다.
> 천 년에 한 번 정도라는 동일본대지진에 의해 많은 인명과 역사, 문화의 흔적이 사라진 리쿠젠타카타시.
> 쓰나미 상황, 복구의 경과, 피난 모습, 이후의 과제, 피해지에 살고 있기 때문에 알 수 있는 사실이 있습니다.
> 그리고 재인식한 선인들이 전해준 유훈의 소중함을 모두에게 전해 앞으로 있을 재해에 조금이라도 도움이 되었으면 하는 마음에서 활동하고 있습니다.[10]

가타리베의 역할은 재해 기억의 공유를 통해 앞으로 있을 재해를 막는 것이다. 신카이 마코토 작품의 주인공들도 재해 기억을 공유해 과거의 재해, 앞으로의 재해를 막아 가듯, 재해 지역을 지키는 가타리베는 재해 기억을 전승해 미래의 재해를 막고 있다.

앞서 인용했던 신카이 마코토의「왜. 어째서. 왜 그 사람이. 왜 내가 아니라」라고 하는 자문은 희생자에 대한 안타까움과 자신이 아니었다는 안도감의 교차에서서 나오는 죄책감이다. 재해 생존자들이 입버릇처럼 내뱉는「살아남아 죄송하다」는 말도 같은 맥락이다. 희생자들의 죽음을 헛되게 하지 않기 위해 생존자들은 재발 방지를 위해 교육하고, 정책을 바꾸며, 기록을 남기고, 희생자들의 이름을 남긴다. 이는 생존자들의 생존 이유를 찾기

---

9) Guided by the Dark: from thanatopsis to thanatourism. International Journal of Heritage Studies 2(4), 234-244. 김민주(2017)『다크투어』영인미디어, p5

10) https://takanavi.org/guide/(2023년 8월 6일 검색)
かつてこの地で起きたことを語り継ぐ
千年に一度といわれる東日本大震災により、多数の人命と歴史や文化の証を失った陸前高田市。
津波の状況、復興の経過、避難のあり方、今後の課題、被害にあいながらもそこに住んでいるからこそお話できることがあります。
そして再認識した先人から伝えられてきた遺訓の大切さを皆様に伝えて、これから起こりうる災害に少しでも役立てて頂ければと思い活動しています。

위한 몸부림이다. 다크투어리즘은 생존자들의 생존 이유를 간접 체험하기 위한 여행이다. 다크투어리즘의 목적과 효과에서 교육적 체험이 가장 높은 비중을 차지하는 것[11]이 이를 방증한다. 신카이 마코토 역시 자신의 생존 이유를 <스즈메의 문단속>을 포함한 소위 재난 3부작에서 찾은 것이다.

4. 신카이 마코토의 다크투어

기존에는 서적, 동영상 같은 매체로 재해를 기억하고 애도해 왔다. 예로부터 기록되어왔던 일본의 지진지(地震誌)나 방송국의 다큐멘터리 등이 그것이다. 하지만 장소가 주는 체험은 매체와 비교해 더 직관적이고 직설적이라고 할 수 있다. 마치 재해지역을 바라보는 스즈메와 세리자와의 반응이 다른 것처럼 재해 전후로 장소가 주는 사람들의 활기와 적막함의 대비가 크면 클수록 방문자들은 더 강한 체험을 하게 된다.

> 고층빌딩의 반들반들한 유리창에. 정체에 걸린 자동차 앞 유리에, 생수를 담은 유리잔 테두리에, 달리기를 즐기는 사람들이 오가는 황궁 앞 해자 수면에-기묘한 무지개가 아주 열게 뜬 것을. 옥상에 나란히 앉아 하늘을 물끄러미 바라보는 새들의 눈동자에. 소용돌이 치는 거대한 탁류가 비치고 있음을. 사람들은 두근거리는 마음으로 생각하고 있었다. 앞으로 만날 연인과의 시간을. 혼자 즐기는 저녁 식사를. 만나기로 한 친구와 나눌 대화를. 데리러 가면 보게 될 아이의 미소를.[12]

아직 재해가 일어나지 않은 도쿄의 화려한 일상은 스즈메가 막지 못한다면 닥칠 거대 재해를 더욱 부각시킨다. <스즈메의 문단속>에서 문을 닫기 전 스즈메와 소타가 하는 폐허 전의 회상은 관객에게 강한 체험을 시키는 것이라 볼 수 있다.

신카이 마코토는 <너의 이름은.>에서 재해 전을, <날씨의 아이>에서 재해 시를, <스즈메의 문단속>에서 재해 후를 다루고 있다. 신카이 마코토는 <날씨의 아이>에서 아마노의 희생으로 재해를 모면한 상황을 그릴 수 있었겠지만, 오히려 수몰된 도쿄를 선택했다. 그리고는 호타카가 찾아간 옛의뢰인이 200년 전에는 이 부근이 다 바다였다는 말은 재해와 함께 살아가는 일본인들의 모습을 보여주고 있다. 그리고 재해 후의 <스즈메의 문단속>에서 재해를 기억하고 앞으로 나아가려는 희망을 표현했다고 보인다. 어린 스즈메에게 어머니와의 기억이 담긴 의자를 건내는 미래의 스즈메는 다음과 같이 이야기해 준다.

> "있잖아, 스즈메. 지금은 정말 슬퍼도……."(생략)
> "스즈메는 앞으로, 아주 잘 자랄 거야."
> "그러니까 걱정하지 마. 미래 같은 거, 무섭지 않아!"
> "있잖아, 스즈메. 너는 앞으로 누군가를 아주 좋아하게 되고, 너를 아주 좋아하는 누군가와 많이 만날 거야. 지금은 캄캄하기만 할지 모르지만 언젠가는 꼭 아침이 와."[13]

재해로 좌절하는 일본인에게 신카이 마코토가 이야기해주는 위의 대사는 앞으로 어떤 재해가 다가와도 재해를 기억하고 앞으로 나아가겠다는 일본인들의 의지를 대변하는 듯 하다.

---

11) 안소연, 김하나(2023)「다크투어리즘 관광지의 체험요인이 방문객의 만족도 및 행동의도에 미치는 영향: 부산광역시 다크투어리즘 관광자원을 대상으로」『호텔관광연구』 제25권 제3호, pp.134-135.
12) 신카이 마코토 지음, 민경욱 옮김(2023), p194.
13) 신카이 마코토 지음, 민경욱 옮김(2023), p332.

DBを活用した19世紀日本のコレラ流行の考察
―公衆衛生と下層階級を中心に―

金美眞(蔚山大)

1. はじめに

19世紀の日本には、コレラ流行が相次いだ。日本ではじめてコレラが発生したのは、1822年(文政5)のことである。この時の感染発生地域は箱根関所より西の方から九州まで、江戸までには広がらなかった。その次の流行は1858年(安政5)で、この時は江戸を中心とする関東、東北地方に感染が広がった。明治維新後になると、1879年(明治12)、1882年(明治15)、1886年(明治19)に東京を中心にコレラが発生、拡散し、多くの人々が不安と混乱に陥れた。コレラの感染経緯、予防策、治療方法などに対する知識がなく、かかると三日以内に死ぬということから「三日コロリ」と呼ばれた。本発表では、幕府と明治新政府のコレラ対策を比較するため、1858年と1879年のコレラ流行の状況に注目したい。具体的には、1858年と1879年のコレラによる被害状況を確認し、幕府と明治新政府の社会的弱者(下層階級)の救済策と公衆衛生の概念の登場について考えたい。

2. 幕末のコレラ流行

(1) 1858年のコレラ流行による被害状況

江戸でコレラが流行ったのは1858年(安政5)7月のことである。1590年から1873年までの江戸でのできことを編年体で記述した斎藤月岑の『武江年表』1858年8月の記事には、当時のコレラ流行の状況が次のように書かれている。

① 八月の始より次第に熾[さかん]にして、江戸中并近在に蔓[つ]り。**即時にやみて即時に終れり。<貴人には少し>** 始の程は一町に五人七人、次第に殖て檐[のき]を並べ、一ツ家に枕を並べ臥たるもあり。路頭に匍匐[ほふく]して死につけるも有けり。此病暴瀉又は暴痧など号し、俗諺に「コロリ」と云り。西洋には「コレラ」又「アジヤ」「テイカ」など唱ふるよし。 (『武江年表』巻之十)

② 八月朔日より九月末迄、武家市中社寺の男女、この病に終れるもの凡弐万八千余人、内火葬九千九百余人なりしと云。実に恐るべきの病也。八月末の頃は次第に蔓延して、その辺際はたしかならねど、奥羽のあたりにもいたりしと聞り。<駿河遠江のこなた道中も甚盛にして、武家方往来

の節雇夫[こふ]少く、家土も又煩へる者多し。宿々夜に入て箒を焚き、山林には鉄砲を放ちて邪気を払ひし由なり＞　九月初旬より些しく遠ざかり、十月に至り漸く此噂止たり。(『武江年表』巻之十)

当時のコレラが流行っている江戸を書いた作品に仮名垣魯文『安政箇労痢流行記』(1858, 以下『箇労痢流行記』)がある。本作品はルポルタージュの記述が特徴で、当時の江戸の悲惨な様子を生々しく感じることができる。作品の冒頭には江戸に原因不明の感染病が流行っている様子が次のように描かれている。

① 於出島千八百五十八年第七月十三日　当日本安政五年五月
此[この]両[りやう]三日中[ちう]、出島[でしま]市中[しちう]とも、一時[じ]に下痢[げり]、且[かつ]追々[おゐノヽ]吐[はき]かゝり申候。右[みぎ]患病[くわんびやう]の者[もの]、既[すで]に昨[さく]十二日、一時[いちし]に三十人相[あひ]煩[わづらひ]、将又[はたまた]、亜墨利加[あめりか]蒸気船[じやうきせん]ミシツヒーにおいても、右様の腹病[はらやまひ]、多人数[たにんず]御座候に付、右[みき]病原[びやうげん]は究[きはめ]て流行[りうかう]のものと奉存候[ぞんじたてまつりそうろう]。右は、他国[たこく]にても頃日[このごろ]多分[たぶん]発[おこ]り申候。
(『安政箇労痢流行記』5丁表)

② 今茲[ことし]安政五戊午年(ぼごのとし)六月下旬、東海道筋[とうかいだうすぢ]より流行初[はやりそめ]、近国[きんごく]一円[いちえん]にひろごりて、此病[やまひ]に犯[をか]さるゝ者、九死[きうし]に一生を保[たも]つは稀[まれ]なり。遠[とふ]く隔[へだゝ]る地は去来不知[いざしらず]。僕[やつがれ]が輩[ともがら]、既[すで]に目前[まのあたり]に見聞しる土地[ところ]をいはんに、
大江戸は七月の上旬、赤坂[あかさか]辺[へん]に始[はじま]り、霊岸島[れいがんじま]辺にも多[おほ]くありて、日ならず諸処[しよノヽ]に押[おし]移[うつ]り、八月上旬より中旬に至[いた]りては、病[やまひ]倍々[ますノヽ]盛[さか]んにして、死する者、大きは一町に百余人、小[すくな]きは五、六人。葬礼[さうれい]の棺[ひつぎ]、大道[だう]小路[せうぢ]に陸[うち]続[つづき]て、昼夜[ちうや]を棄[すて]ず絶[たゆ]る間[ひま]なく、御府内[ふない]数万[すまん]の寺院[てらゞヽ]は、何所[いづこ]も門前[もんぜん]に市[いち]をなし、焼場[やきば]の棺[ひつぎ]、所[ところ]せきまで積[つみ]ならべて山[やま]をなせり。夕[ゆふべ]に人を焼[やく]葬坊[をんばう]も、旦[あした]に荼毘[だび]の烟[けむ]りと登[のぼ]り、誂[あつら]へられし石塔[せきとう]屋も、今の間に自己[おの]が名を五輪[りん]に止[とゞむ]るなど、一々に言[いひ]も尽[つく]さず。(『安政箇労痢流行記』3丁表・裏、上掲書)

③ 余[よ]が知己[ちき]なる何某[なにがし]、当[たう]八月中旬[ちうじゆん]、こたひの暴病[にはかやまひ]にて死[し]せし者[もの]の為[ため]に、小塚原[こづかはら]なる荼毘所[だびしよ]に至[いた]りし折[をり]、人[ひと]焼[やく]葬坊[おんばう]人足[にんそく]の話[かた]れる様[やう]を聞[きゝ]たりしに、「去[きんぬ]ル七月十五日の頃[ころ]より、焼釜[やきがま]追々[おひノヽ]に一はいに相成て、焼数[やきかず]多分[たぶぶん]なりと思[おも]ひの外[ほか]、月末[つきすゑ]に至[いた]りては、少[すこ]しく減[へり]て釜焼[かまやき]も余[あま]り候ひしに、八月に至[いた]り、四日より五、六日の間は死人[しにん]二、三十宛[づゝ]も残[のこ]り、十日過[すぎ]より六百人程[ほと]も焼[やき]残[のこ]り候へは、此[この]分[ぶん]にては中々[なかノヽ]今日より来[きた]れる分は、九月二日、三日頃[ごろ]ならでは骨揚[こつあげ]には相不成[あいならず]、如此[かくのごとく]の次第[しだい]故[ゆゑ]、金子[きんす]何程[なにほど]出[いだ]し給ふとも、中々火急[くはきふ]に焼[やき]候事は出来不申」と物語[ものがた]れり。(『安政箇労痢流行記』11丁裏・13丁裏、上掲書)

本作にはコレラの流行による被害状況についても「八月朔日より晦日まで、日々書上に相成候死人の員数」と記し、以下のように8月1日から30日まで、毎日の死亡者数を書き記している。

朔日	二日	三日	四日	五日	六日
112人	107人	155人	172人	217人	350人
七日	八日	九日	十日	十一日	十二日
406人	415人	565人	559人	507人	579人
十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日
626人	588人	508人	622人	681人	561人
十九日	廿日	廿一日	廿二日	廿三日	廿四日
597人	469人	392人	363人	370人	379人
廿五日	廿六日	廿七日	廿八日	廿九日	晦日
414人	397人	416人	435人	447人	333人

そして、最後には「〆一万弐千四百九十弐人　程有之候由」と、コレラによる死亡者の合計が12,492人であることを記している。また「此分、全書上。<u>此外に人別なしの者数、一万八千七百三十七人</u>。九月相成候て[あいなりそうろうて]、九月に至りては大きに減し、三、四日頃は五、六十人に相成、夫よりは、はたと相止、通例に相成申候」と、傍線部のように人別帳に名前が乗っていないのが、18,737人であると記している。人別帳は今でいうと戸籍のようなもので、非人のような下層階級の人の名前が載ってなかった。つまり、被害者のほとんどが社会的弱者であったことが見て取れる。

(2) 幕府の救済策

※幕府の救済策については追加する予定です。

3. 明治初期のコレラ流行

※明治初期のコレラ流行についても内容を追加する予定です。

江戸幕府と明治政府のコレラ感染に対する対応の違いおよびそれに対する民衆の反応

例：「コレラ一揆」　との比較。自分の声が出せるようになったサバルタン。

4. おわりに

① 近世日本のコレラ流行とそれによる被害状況を明らかにする。
- 江戸で甚大な被害を及ぼした1858年のコレラに関しては、ルポルタージュの生々しい記録が多く残されていた。
- コレラ感染による死者数は資料によって若干異なる(『武江年表』約28,000人、『箇労痢流行記』約31,000

人[内、人別帳に名前が記載されている人が12,742人、人別帳に名前が記載されていない被差別民が18,737人])。

- 政治権力(幕府や藩主など)に対するサバルタンの一揆、または社会的弱者の批判の声が記されている資料は管見の限りではない「声を出さないサバルタン」。

② 1858年のコレラ流行に対する江戸幕府(または領主)の対策は？

- 『徳川実紀』のような幕府の立場で書かれた資料からは、被害状況に関する記事がない。治療法についてのみ記載。
- 御救米のような救済策を設けていたが、運営主体は曖昧である。

③ 社会的弱者(貧民)は幕府(または領主)の救済策の対象であったのか。

- 貧民も対象であった。ただし、武士とは救済策が異なった。

日本社会とKカルチャーの新たな可能性
―文化融合の観点から―

曺圭憲(祥明大)

1. 문화사로서의 일본 한류

일본에서의 한류는 부정적인 한일관계 속에서 점진적으로 단계를 거치며 새로운 향유층들을 넓혀가면서 일본사회 속에 정착해온 문화사(文化史)적인 계보를 지닌다. 즉 지금까지 일본에서의 한류는 1차(2003 겨울연가), 2차(2008 케이팝), 3차(2017 라이프스타일), 4차(2020 OTT)와 같이 'n차 한류'로 명명되어져 왔다. 하지만 4차 한류를 기점으로 일본사회에서는 더 이상 'n차 한류'라는 명칭이 사용하지 않게 된 것으로 보인다.

2022 해외한류실태조사(한국국제문화교류진흥원(KOFICE))에 따르면 일본인이 선호하는 문화콘텐츠별 인기 국가에서 많은 분야에서 미국에 이어 2위를 차지 하고 있는 비중이 높아진 점은 주목할 만 하다. 이는 일본에서의 K컬쳐가 미국문화에 준하는 글로벌 스텐다드를 가진 보편성을 지닌 문화로 인식되기 시작한 지표로 볼 수도 있기 때문이다.

이에 본 발표에서는 일본에서의 한류가 더 이상 '한류'라는 명칭에 종속되지 않는다는 점에 착목해 "탈(脱)한류하는 일본 속 K컬쳐"의 구체적인 양상을 검토하고자 한다. 이는 과거에는 일본에서 한류라는 형태로 한국 문화를 이해, 수용하는 단계였다고 한다면, 현재는 일본사회가 K컬쳐를 크리에이티브(creative)한 요소로 인식해 일본사회문화 시스템에 연결시키는 '문화융합'의 단계에 접어들고 있다는 것을 시사한다.

2. 일본문화콘텐츠와 K-콘텐츠

2022년 일본에서는 대표 연말가요제인 '제73회 NHK 홍백가합전'의 출전 가수 문제로 꽤 시끄러웠다. 이 방송에 K-pop 걸그룹 트와이스, IVE, 르세라핌 3팀이 선정되었고, 여기에 멤버 전원이 일본인이면서 JYP엔터테인먼트 소속인 니쥬, K-pop 오디션 프로그램 일본판으로 제작된 JO1 등 한국과 인연이 있는 아이돌 그룹이 대거 출연했기 때문이다. 일본의 대표 연말 가요제에 한국과 관련된 아이돌 그룹이 다수 출연하는 것에 거부감을 표하는 소리도 적지 않기 때문이다. 그런데 여기에서 한 가지 간과할 수 없는 특징은 K-pop 걸그룹 트와이스, IVE, 르세라핌 3팀 모두에 '일본인' 멤버가 소속되어 있고, 나머지 2팀 니쥬와 JO1은 'K-pop 시스템'으로 제작된 팀이라는 점이다. NHK는 2022년도 홍백가합전의 컨셉을 '다함께 셰어'(みんなでシェア)로 내걸고 있는데, NHK의 공식 홈페이지에는 '스마트폰이나 PC로 셰어. 사진이나 동영상으로 셰어'라는 카피 문구가 적혀 있고, 공식 트위터, 라인, 인스타그램, 유튜브를 통해 다양한 정보를 발신하는 것을 확인할 수 있다. 이를 통해 홍백가합전을 TV에만

한정하지 않고 SNS 등을 적극적으로 활용해 더욱 젊고 글로벌하게 만들겠다는 의지를 읽을 수 있다. 여기에 가장 부합하는 콘텐츠가 K-pop이라는 것은 두말할 나위가 없을 것이다. 여기에는 K컬쳐에 친숙한 일본 Z세대가 SNS 및 뉴미디어로 홍백가합전의 콘텐츠를 적극적으로 셰어해 확산시킨다는 것은, 이들이 일본국민 속 '인플루언서'로서 주류 대중문화의 변화에까지 상당한 영향을 미치는 역할을 하는 것으로도 이해할 수 있다.

국내 언론에서는 걸그룹 에스파(aespa)가 일본 최대규모의 패션 행사인 '도쿄걸즈컬렉션 2022'(9월 3일 개최)의 엔딩무대를 장식했다는 소식을 일제히 전한바 있다. 도쿄걸즈컬렉션(TGC)은 2005년부터 시작되어 벌써 18년의 역사와 전통을 가진 일본 여성들 중에 모르는 사람이 없을 정도로 상당한 영향력을 가진 패션쇼이다. 매해 도쿄걸즈컬렉션(TGC)에는 유명 패션브랜드와 잡지에 전속해 있는 이른바 '카리스마' 모델의 런웨이 모습을 보기 위해 이들을 동경하는 많은 여성 팬들이 찾는 것으로 유명하다. 또 모델이 입고 있는 옷을 그 자리에서 바로 인터넷 사이트를 통해 구입할 수 있고,인기 아이템을 체험해 볼 수 있는 부스가 마련되어 있어, '스트리트 패션'을 특화시킨 패션 페스티벌이다. 이러한 도쿄걸즈컬렉션(TGC)이 새롭게 추진하는 프로젝트가 '버추얼 TGC 프로젝트'인데, 패션쇼 현장의 뜨거운 열기와 화제의 패션 아이템 등 TGC 세계관을 메타버스 어플로 재현했다. 에스파(aespa)라고 하면 아바타(아이-에스파)와 가상의 공간(광야)를 음악에 접목시켜 메타버스 세계관을 구현한 최초의 k-pop 아이돌인데, 이번 메타버스 「버추얼 TGC」에서 가장 공을 들인 것도 에스파와의 콜라보 부스이다. 도쿄걸즈컬렉션(TGC)은 "일본의 걸즈 컬처를 전 세계로"라는 슬로건으로 생겨난 것인데, 이제는 이러한 일본 걸즈 컬쳐의 글러벌화 및 혁신에 k-pop과 연계성이 두드러지고 있는 것이다. 이렇듯 <홍백가합전> <도쿄걸즈컬렉션>과 같은 전통있는 일본 이벤트의 혁신에 K콘텐츠가 유기적으로 융합되고 있는 모습을 확인할 수 있다.

2022년 1월 13일에 일본 넷플릭스 오리지널 콘텐츠로 드라마 <신문기자>가 공개되어 일본 내에서 적지 않은 반향을 일으켰다. 이 드라마는 2019년에 개봉된 영화 《신문기자》를 리메이크 한 것으로 영화는 43회 일본 아카데미 시상식에서 작품상 등 3개의 주요 부문을 석권했다.영화의 주인공 한국배우 심은경은 여우주연상을 수상하기도 했다. 이 작품이 크게 주목을 끈 것은 그간 일본에서 잘 다루지 않아온 실제 정치스캔들(모리토모학원 문제)을 통한 일본사회 고발을 소재로 삼았기 때문이다. 그리고 이러한 작품이 제작될 수 있는데에는 기존의 일본 TV가 아닌 넷플릭스 오리지널 콘텐츠이자 유통 플랫폼으로 이라는 점도 드라마 제작을 가능하게 한 것으로 볼 수 있다.

이 드라마의 감독 후지이 미치히토 감독은 드라마 제작과 관련해서 "일본에서는 일반적으로 주연이 정해진 후에 각본가, 마지막에 감독이 정해진다. 넷플릭스는 크리에이터를 모아 각본을 만들고, 그 후에 배우가 결정하는데 크리에이티브에 높은 우선순위를 넷플릭스 제작 프로세스가 일본에는 부족하다"는 언급할 한 바 있다. 후지이감독은 한국이 <기생충>, <오징어게임>과 같은 세계적인 히트작을 만들어가고 있는 것에 대해 일본 영상 업계도 한국과 같이 국내만이 아닌 국내외 시장의 연속성을 가져갈 필요가 있으며 넷플릭스 드라마 <신문기자>가 그 기폭제가 되기를 희망한다는 점을 분명히 했다.

이렇듯 일본 콘텐츠 업계에서 이러한 새로운 넷플릭스 드라마가 형성된 데에는 사회이슈를 적극 반영해 보편적 정서를 표현하는 한국 드라마의 내적 특징과 드라마 제작의 국내외 연결을 하나의 비즈니스 모델을 추구하는 K드라마의 특성을 일본 영상업계에 적극 도입하고자 한 결과의 하나로 볼 수 있다.

3. 일본 주류 문화와 K컬쳐

2023년 가을 도쿄 긴자에 위치한 고급 쇼핑몰 GINZA SIX가 '서울, 도쿄 긴자, GINZA SIX'를 테마로 매거진을 선보였다. 서울과 도쿄를 주제별 카테고리로 나누어 심층적으로 분석한 이번 특집호는 서로의 문화와 가치를 더 객관적으로 파악하고, 두 도시의 실제 문화를 새로운 시각으로 소개하고 있다. 이번 호는 <Open Border Edition-여행 이상으로 이어져 온 한일 문화의 현주소와 도시 문화를 새로이 발견하다>를 타이틀로, 코로나가

종식후 단순히 해외 여행이 재개된 현상황에 그치지 않고, 서로가 이미 연결되어 있다는 것을 전제로 긴자 식스의 시선으로 바라본 두 도시의 문화를 토대로 서로에게 영감을 얻는 시간이 되길 바란다고 전했다.

여기에서는 일본의 새로운 복합상업시설이 <긴자식스>가 한국 복합상업시설 <더현대서울>을 어떻게 바라바보고 있으며, <더현대 서울>의 콘텐츠에 대한 존중, 더 나아가서 일본 긴자식스의 혁신에 영감을 얻고자 하는 시선을 확인할 수 있다. 그 내용을 일부 확인하면 다음과 같다.

[TOKYO] GINZA SIX가 이야기 하는 도쿄의 성숙된 문화
[SEOUL] 더현대 서울, 팝업스토어의 중심지가 되다

"이 시설을 상징하는 것이 "팝업"의 존재다.개업 후 2년간 300개가 넘는 팝업 이벤트가 전개되어 총 관람객 수는 약 400만 명에 이른다고 합니다.포켓몬이나 미니언즈라고 하는 캐릭터로부터, 코카-콜라나 WON SOJU와 같은 음료 브랜드, 나아가 스트레이 키즈나 New Jeans와 같은 K-POP 아티스트까지-항상 트렌드의 아티스트나 캐릭터, 브랜드를 기용한 이벤트의 수는, 사람들의 관심을 모으는 것과 동시에, SNS상에서의 매력적인 컨텐츠를 계속 만들어 왔습니다. (중략) 대규모 상업시설은 종종 육중하고

정적인 인상을 주는 것으로, 그 중에는 단순한 숍의 집합체가 되어 버리는 것도 적지 않다.그러나 항상 신진대사를 반복하는 더 현대 서울은 그 자체가 하나의 거대한 생명체처럼 보이기도 합니다. 팝업이라는 수법을 통해서 발신되는 신선한 컬쳐나 무브먼트는, 영양분이 전신을 누비듯이 무수한 사람들에게 전달되어 갈 것입니다.더 현대 서울이라는 이름의 인프라를 끊임없이 흘러가는 에너지가 서울의 문화를 성장시키고 있는 것입니다"

또한 일본 내 한류 계통의 잡지가 아닌, 일본 주류문화를 상징하는 신문, 잡지에서 K콘텐츠, K컬쳐를 본격적으로 다루고 있는 현상도 간과할 수 없다. 특히 일본 2010년대 이후 세계적인 라이프스타일 잡지의 위상을 획득한 <뽀빠이>를 비롯한 일본의 주류 잡지가 2023년 여름 일제히 한국 여행 특집을 다루고 있는 현상에도 주목할 필요가 있다. 이러한 현상이 일본에서 K컬쳐의 대중화, 보편화의 수준을 가늠할 수 있기 때문이다.

이와같이 일본사회에서 K컬쳐는 새로운 문화수용의 대상을 넘어, 기존 일본 사회문화 시스템의 혁신에 기여할 크리에이티브(creative)한 요소로 인식되고 있다. 이러한 점에서 K와 J의 새로운 '문화융합' 양상은 한일간 문화사적 교류 관점에서도 주목해야할 관점인 것이다.

宮崎駿『風の谷のナウシカ』に関する一考察

阿武正英(祥明大)

1. はじめに

『風の谷のナウシカ』(1984)は宮崎駿の漫画[1)]を原作としており、宮崎が監督したアニメとしては2作目に当たる。1作目の『ルパン三世　カリオストロの城』(1979)が興行的に失敗し、アニメの世界から身を引くことすら考えていた宮崎は月刊誌『アニメージュ』の編集者の勧めで漫画『風の谷のナウシカ』を描き始め、アニメ映画制作に再挑戦する機会を得る。結果として、1984年の公開で日本国内で94万5千人の観客を動員し、約14億8千万円(その後コロナ渦でのリバイバルで約7億3千万円加算)の興収をあげ、内容的にも高い評価を得て、翌年スタジオジブリ設立への道を開いた。

本発表では『風の谷のナウシカ』論の序説となる内容を目指し、基本的な資料にふれつつ、若干の考察を加えたい。作品の時代に対するアクチュアリティや、主人公ナウシカのキャラクターを中心に分析してまいりたい。また、「怒り」「憎悪」「恐怖」の克服という観点から作品を分析してまいりたい。

2. 時代背景

『風の谷のナウシカ』が制作・公開された1980年代前半の世界情勢は米国と旧ソ連の冷戦期に当たる。62年にはキューバ危機(核戦争の危機)が起ったが、その後も2大国を中心に核兵器は世界に拡散していった。79年には旧ソ連のアフガニスタン侵攻に対し、米国が反発し「新冷戦」が始まり、80年にはモスクワオリンピックへの西側諸国(日本も含む)のボイコットにまで発展した。83年には米国で戦略防衛構想(SDI)が打ち出され、米ソの緊張が深まっていた。

一方、日本は米国を中心とした西側陣営の一角を担い、経済成長の裏で水俣病などの環境汚染が各地で起っていた。宮崎はこの作品を創作した「大きなきっかけ」として、次のような記憶をあげている。

> 水俣湾が水銀で汚染され死の海になった。つまり人間にとって死の海になって、漁をやめてしまった。その結果、数年たったら、水俣湾には日本のほかの海では見られないほど魚の群れがやってきて、岩にはカキがいっぱいついた。これは僕にとっては、背筋の寒くなるような感動だったん

1) 漫画『風の谷のナウシカ』は月刊誌『アニメージュ』徳間書店、1982.2-94.3に掲載。単行本は全7巻(1983.7-94.12)。アニメは単行本1、2巻に収められたエピソードを素材にしている。

です。人間以外の生き物というのは、ものすごくけなげなんです[2)]。

このように、第1の背景として、米ソ2大国が周辺諸国や同盟国を巻き込みながら緊張関係を増幅している冷戦がある。第2の背景として、水俣病に代表されるような海洋汚染の他、大気汚染など、人間による地球環境破壊があげられる。

作品に描かれる時代は1000年以上先の未来であるが、次のように冒頭で示される。

> 巨大産業文明が崩壊してから1000年／錆とセラミック片におおわれた荒れた大地にくさった海…腐海と呼ばれる有毒の瘴気を発する菌類の森が広がり／衰退した人間の生存をおびやかしていた[3)]

宮崎は核兵器などの軍拡と戦争、環境汚染など負の要素をはらむ現在の地平から1000年以上先の未来を想像して描いた。その世界はディストピアというにふさわしい人類の末期の風景である。原作の漫画の冒頭には次のようにより詳しくその状況が示されている。

> ユーラシア大陸の西のはずれに発生した産業文明は／数百年のうちに全世界に広まり／巨大産業社会を形成するに至った／大地の富をうばいとり大気をけがし／生命体をも意のままに造り変える巨大産業文明は／1000年後に絶頂期に達し／やがて急激な衰退をむかえることになった／「火の7日間」と呼ばれる戦争によって都市群は有害物質をまき散らして崩壊し／複雑高度化した技術体系は失われ／地表のほとんどは不毛の地と化したのである／その後に産業文明は再建されることなく／永いたそがれの時代を人類は生きることになった[4)]

漫画版で補完すれば、地球上の文明が絶頂期を迎えた後に急激に衰退し、海や土壌、大気など自然破壊が進み不毛の大地となり、核戦争でさらに汚染されて都市も崩壊し、人類は絶滅の危機に瀕している。そんな未来を想像して描いた物語と言っていいだろうか。作品のプロデューサー・高畑勲は映画のパンフレットのなかで、より明確に次のように語っている。

> 巨大産業文明崩壊後千年という極限の世界の彼方から、核戦争の危機をはらみ、快適さのみを追い求めて資源浪費と自然破壊にあけくれる現代社会を鋭く照りかえしてもらいたい[5)]。

つまり、映画のような破滅的な未来を迎えないよう、戦争と資源浪費と自然破壊を繰り返す人類に警鐘を鳴らすという期待がこの作品には込められている。主人公のナウシカが暮す辺境の小国「風の谷」は大国トルメキアと侵攻を受けているペジテの間に位置し、軍事的にはトルメキア軍に組み込まれていく。これは、敗戦後、米ソ2大国の対立が深まるなかで、米国側に組み込まれていった日本の位置と似ていないわけではない。

ともかく、高畑の言説に見られるように、当時の国際情勢と環境破壊の状況に対して、アクチュアルな現

---

2) E・カレンバックとの対談(1985)「“風の谷”の未来を語ろう――火を捨てる？『ナウシカ』と冷蔵庫のある『エコトピア』」『朝日ジャーナル』、スタジオジブリ・文春文庫編(2013)『ジブリの教科書1　風の谷のナウシカ』文芸春秋社(文春ジブリ文庫)、p.290.
3) 宮崎駿(1983)『風の谷のナウシカ　1』徳間書店、p.8.
4) 宮崎駿監督(1984)『風の谷のナウシカ(DVD)』スタジオジブリ
5) 高畑勲(1984)「血湧き肉踊る「宮崎アニメ」」『風の谷のナウシカ』劇場用パンフレット、スタジオジブリ・文春文庫編(2013)『ジブリの教科書1　風の谷のナウシカ』文芸春秋社(文春ジブリ文庫)、p.290.

状批判を込めて、制作されたと言えよう。

3. ナウシカのキャラクターについて

宮崎は先にリチャード・コーベンの漫画『ロルフ』のアニメ化を構想中に考えたヒロイン像がそのままナウシカにつながっていることを明かし、次のように語っている。

> 父親は生きていても役には立たない。とはいえ経験不足でおぼつかず、まだまだ父親に代わる任には耐えられない娘が、一国の運命と多くの人間に対する責任を否応無く背負わなければならない。その責任の重さにひしがれながら生きている主人公というのが、初めて僕の中で生まれたんです。……＜ナウシカ＞という主人公の最大の特徴は、何よりも責任を背負っているということです[6]。

映画評論家の佐藤忠男は次のように評している。

> ナウシカは何国人ともいえない。いわば人類共通の未来人である。ここにはたんなる無国籍という以上に、積極的な人類意識が把握されていると言っていいだろう。……核戦争のあとの徹底的に汚染された地球の浄化は可能かという主題は完全に国籍を超えており、その表現もそうである[7]。

宮崎はナウシカを「一国の運命と多くの人間に対する責任」を背負ったキャラクターと語っているが、佐藤はナウシカを「人類共通の未来人」とし、そこには「無国籍という以上に、積極的な人類意識が把握されている」と語る。

斎藤環はナウシカを「戦闘美少女」の系譜に位置づけ、人間界と腐海を仲介する「巫女系」とした[8]。鷲谷花はナウシカがほぼ同時代の映画『エイリアン』(1979)や『ターミネーター』(1984)のヒロインと比べ、「戦う女性ヒーロー」としてだけでなく、「女性科学者」の一面に注目して、「物理的な力のみならず、科学と知の力を行使して人々を救おうとする点でも、ナウシカはやはり時代に先んじたヒーロー」と評する[9]。村瀬学はナウシカが「火」と「風」を使う「使者」と捉えた。ここで「火」とは「文明・技術・武器」を意味し、「風」は「自然」を意味する。ナウシカはそのような「火」と「風」を操る「使者」であり、作品のなかの「腐海の物語」と「人間の物語」と「王虫の物語」の橋渡しをする「情報収集者」「情報伝達者」であると言う[10]。

一方で、ナウシカは原作では16歳の少女であり、生身の人間である。歳のわりに一国の運命を背負って立つほぼ完璧なキャラクターであるが、ストーリーからナウシカの成長物語として読めないわけではない。前半に風の谷にトルメキア軍が侵入し、ナウシカの父ジル王を殺害すると、ナウシカは激怒してトルメキア兵を殺害する。後で、ナウシカはユパに語る。「自分が怖い」「憎しみにかられて何をするかわからない」「もう誰も殺

---

6) 宮崎駿(1996)「『ナウシカ』誕生までの試行錯誤」『風の谷のナウシカ　水彩画集　宮崎駿』徳間書店、スタジオジブリ・文春文庫編(2013)『ジブリの教科書1　風の谷のナウシカ』文芸春秋社(文春ジブリ文庫)、p.290.
7) 佐藤忠男(1995)『日本映画史』岩波書店、p.249-250.
8) 斎藤環(2006)『戦闘美少女の精神分析』筑摩書房(ちくま文庫)、p.212.
9) 鷲谷花(2020)「ナウシカが、シータ・千尋・キキと「決定的に違っている」点」: https://gendai.ismedia.jp/articles/-/78696?imp=0(検索日：2023.10.12)
10) 村瀬学(2004)『宮崎駿の「深み」へ』平凡社(平凡社新書)、pp.39-45 参照.

したくないのに」と、自身を制御できない不安を打ち明ける。

後半では、ペジテの残党が王虫の幼生を囮にして、王虫の群れを誘導し、風の谷のトルメキア軍を押し潰そうと向かっているのに対し、ナウシカはそれを阻止しようと素手でペジテ兵に向かっていく。その時、ナウシカはペジテ兵に銃撃されても、武器を使わず両手を広げて止めようとする。

最後の場面で王虫の大群がトルメキア軍に向かって押し寄せてきたときも、囮にされた王虫の幼生を王虫の群れに返してやり、やはり武器を使わず両手を広げて止めようとする。そこには、かつてトルメキア兵を殺したナウシカから、非暴力の姿勢を貫いて争いを止めようとするナウシカへと成長した姿が見られると思う。

4.「怒り」の克服

私たちは他者に対して「怒り」の感情を抱くとき、他者を攻撃することがある。作品の冒頭でナウシカの師ユパが王虫に襲われたとき、ユパは王虫について「怒りで我を失っている」と言う。怒って暴走する王虫を虫笛を使って落ち着かせ、腐海に引き返すように促したのがナウシカだった。王虫は人間と同じように感情をもつ生き物のように描かれている。

ユパが連れてきたキツネリスが初めて会ったナウシカを威嚇し、指を噛みつく場面があるが、そのときナウシカは動ぜずに「恐くない、恐くない」「おぼえていただけなんだよね」とキツネリスに語りかけ、キツネリスの怒りは収まり、両者は友だちのような関係になっていく。そこから、「怒り」や「恐怖」から寛容、融和の精神が見られる。

ナウシカのあり方は、先のペジテ兵の銃撃に対する素手の対応のほか、クライマックスで怒りにかられて風の谷に突進してくる王虫の群れに対する対応からも、「怒り」や「恐怖」などのネガティブな感情を受け止め、非暴力的に解決していくよう描かれている。王虫を自然とすれば、自然と人間の対立から共生・融和への姿が描かれていると言えるし、銃を向ける「敵」に対して素手で立ち向かう姿は紛争に対する非暴力的な解決方法を描いていると見ることもできよう。

中村三春は作品の主要なテーマについて次のように語っている。

> ① 環境と人間の関わりと、②国家間・民族間の戦争の二つが交錯するところに現れる。このテーマに従って異なる領域間の対立が直接的に描かれており、その意味でも、『ナウシカ』は宮崎作品の一つの頂点をなすものと考えることができる[11]。

そのような異なる領域間の対立をいかに克服するのかがテーマであると見ることはできないだろうか。

5. おわりに

以上、米と旧ソ連の2大国が対立を深め、新冷戦という状況で、環境破壊が深刻化しつつあった80年代前半の状況に抗して、『風の谷のナウシカ』は創作された。そのような同時代の状況に対するアクチュアルな反応は後の『紅の豚』(1992)などにも通じている。

また、主人公のナウシカのキャラクターについてはすでに多くの分析がなされているが、本発表ではナウ

11）米村みゆき編(2008)『ジブリの森へ―高畑勲・宮崎駿を読む[増補版]』森話社、p.205.

シカが殺戮による解決から非暴力的な解決へと変っていく点に注目した。成長物語としては、『魔女の宅急便』や『耳をすませば』、『千と千尋の神隠し』の主人公などに見られるような少女の成長という観点とは次元が異なる面があるが、成長物語と言ったら無理があるだろうか。

また、この作品には人間だけでなく、キツネリスや王虫など動物や虫まで怒りにかられて制御できなくなる存在として描かれ、それをいかに鎮静させ、融和させていくのかが描かれている。したがって、「怒り」の克服による負の連鎖を非暴力の力で阻止する物語と読むことはできないだろうか。

『風の谷のナウシカ』から約40年後の現在、私たちは気候変動に伴う災害の増加や猛暑の長期化、ウクライナ情勢に見られるロシアによるウクライナ侵攻に伴う核兵器使用の可能性の言及など、困難な課題に直面している。そのような地球環境や国際紛争に関わるグローバルな課題を扱った持続可能性を人類に問いかけるアニメとして、この作品を想起することができよう。そして、この作品は現在から未来の地球と人間を想像するだけでなく、＜いかに生きるか＞という人文学的な問題解決にまで表現は及んでいたと見ていいだろう。

【参考文献】

切通理作(2001)『宮崎駿の＜世界＞』ちくま新書、pp.14-24.
斎藤環(2006)『戦闘美少女の精神分析』ちくま文庫、p.212.
佐藤忠男(1995)『日本映画史』岩波書店、p.249-250.
スーザン・ネイピア(2019)『ミヤザキワールドー宮崎駿の闇と光ー』早川書房、pp.141-163.
高畑勲(1999)『映画を作りながら考えたこと』徳間書店、pp.252-267.
津堅信之(2022)『日本アニメ史』中公新書、pp.181-188.
野村幸一郎(2018)『宮崎駿が描いた少女たち』新典社、pp.5-23.
徳木吉春他3名(2001)『ジブリ・ロマンアルバム　風の谷のナウシカ』徳間書店、pp.10-63.
村瀬学(2004)『宮崎駿の「深み」へ』平凡社新書、pp.39-45.
米村みゆき編(2008)『ジブリの森へ―高畑勲・宮崎駿を読む[増補版]』森話社、pp.206-207.
米村みゆき・須川亜紀子編(2022)『ジブリアニメーションの文化学　高畑勲・宮崎駿の表現を探る』七月社スタジオジブリ：https://www.ghibli.jp/
鷲谷花(2020)「ナウシカが、シータ・千尋・キキと「決定的に違っている」点」：https://gendai.ismedia.jp/articles/-/78696?imp=0

日本アニメと地域ブランディング

宋淑正(中央大)

1. はじめに

最近、宗教的に聖なる場所という意味を持つ「聖地」という言葉を複数の単語と組み合わせて使う場合にしばしば接する。「携帯電話聖地」、「パン聖地」そして「アニメ聖地」などでそれぞれの言葉が持つ意味は、‘携帯電話を買うならここで！’そして‘パンが好きな人はここを立ち寄らないとパンが好きだと言えない！’そして‘特定アニメのファンならここはぜひ訪れなければならない！’など言葉に含まれた意味は多様に活用されている。

一方、地域ブランディングとは、他の地域と差別性を持つこと、その地域だけの固有のアイデンティティ、その地域でしか感じることができない記憶、感性、イメージを総合的に意味する。

本稿では日本アニメの背景となった地域を広報し、アニメをその地域の文化資源として活用して地域ブランディングに先駆けている地域を紹介し、彼らの発展の可能性と限界を考察してみる。

このような研究は日本アニメだけでなく、Kコンテンツを活用した韓国の地域ブランドのモデリングになってくれると期待する。

2 日本アニメと地域ブランディングの事例

「となりのトトロ」と「君の名は」は日本だけでなく、全世界で人気を呼んだアニメ作品である。ファンはこれらのアニメに関連する地域を訪問し、アニメを体で体験することを希望する。各地域でアニメに関してどのような政策を展開したかを見てみよう。

2.1. 君の名は

アニメ「君の名は」の背景となった飛騨市は作品が公開されるまでは、飛騨市が作品の背景地であるという確信がなかったという。そんな状況で2016年にアニメが公開され、作品の中の地域が飛騨市であることが分かり、飛騨市商工観光部ではすぐに地域広報のためにポスターを制作した。ポスターにはアニメで使われたと思われる飛騨市の実際の場所情報を一目でわかるように描き入れ、このポスターを岐阜県をはじめとする周辺県の役所と大型劇場に貼って積極的に広報した。そして高速バスにアニメ「君の名は」関連ラッピング装飾を設置し、飛騨市の認知度向上と観光客誘致に先頭に立った。また、アニメの舞台イメージとなった背景を探し、「君の名は」聖地巡礼地図を製作したりもした。

第二に、教育委員会の活動を見ると、教育委員会では「君の名は」企画展を開催し、この企画展ではアニメ

企画段階のコンセプトスケッチやストーリーボードなど製作工程を展示した。

第三に、飛騨市図書館に関連する活動を見ると、飛騨市図書館にはアニメ上映以後、多くの訪問者が訪れ、図書館としての本来の機能がうまく維持できない状況に置かれた。したがって、図書館では、飛騨市図書館の入場や撮影に関する規則を定めて運営した。

第四に、飛騨市ではアニメの中に出てくる「落合バス停」を再演し、ここが聖地巡礼場所になるのに一助した。このバス停は、当時、実際には使用済みの停留所となって地域の学生たちのスクールバス停留所として使われていたが、作品が人気を得ると、以前と同じバス停の姿を整えるために、すでに撤去され倉庫に入っていた看板と時刻表を再びバス停に設置した。

第五に、飛騨市では三重県伊賀市の伝統工芸である組紐も注目し、アニメの上映以後、飛騨は三重県と協業してその組紐体験ができる展示館を設置した。

第六に、飛騨市では「飛騨古川まつり会館」を運営し、祭りに対する広報も積極的に行っている。ここには、祭りの時に実際に使われた屋台を展示し、起こし太鼓を体験できる空間も設けている。

2.2. となりのトトロ

1988年に制作された「となりのトトロ」の作品の背景となったのは、宮崎駿監督が結婚してから今まで住んでいる所沢市である。ここには'トトロの森'という森を保全するための活動拠点としている「クロスケの家」が位置しており、ここもアニメファンが訪れる聖地である。所沢市のアニメ「となりのトトロ」に関する政策を見てみると、

まず、所沢市にある'トトロの森'は、トトロ関連施設や銅像がなくても、トトロという名称だけでも海外から多くの観光客が訪れる。それで、2017年2月29日に開かれた所沢市行政経営推進委員会の会議録を見ると、トトロの森周辺に観光客のための施設がなく、観光客が不便を感じていて、これを解決するために「滞在整備」項目を追加したという記録がある。そして、2017年度は外国語で書かれた案内板を設置し、ガイドブックも作って配布している。

第二に、所沢市は2020年に市行政70周年記念事業の一環として、所沢駅の東口に「となりのトトロモニューメント」を設置した。

第三に、所沢市は2020年11月3日から所沢駅ホームの発車メロディーとして「となりのトトロ」の挿入曲を使っている。

3. 統計による発展状況

アニメが公開された後、飛騨市にはどのような変化が起こったのかを統計資料を基に調べてみよう。

	년도	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
히다시	방문객수	1,053,020	1,083,168	1,087552	970,808	1,005,881	1,130,852	1,078,956	1,217,325	626,167	617,242	861,327
	숙박객수	102,269	102,751	103,885	106,816	107,067	105,695	101,564	108,491	52,897	51,597	69,746
	외국인 숙박객수	555	2,285	3,647	5,489	6,984	8,286	10,057	11,181	2,076	98	849
	히다시 도서관 방문객수	-	-	-	-	36,000	73,700	-	-	-	-	-

<表1>飛騨市の訪問客数の現状

上記の<表1>を見ると、

まず、アニメ上映の翌年の2017年に飛騨市を訪れる観光客数が最も多かったことがわかる。2017年の飛騨市の人口は2万4千人余りだった。ところが、2017年には、飛騨市人口の5倍に近い11万3千人余りが飛騨市を訪問した。

第二に、2016年以降から2019年までの外国人宿泊客数は、だんだん増加している。統計を見ると、2017年には2012年より約15倍も増加した外国人が飛騨市に宿泊したことが分かる。

そして、第三に注目するのは、アニメの背景となった「飛騨市図書館」の訪問者数で、公開初年度の2016年に図書館を訪れた訪問客数は3万6千人だったが、翌年の2017年に「飛騨市図書館」を訪問した観光客の数は2016年より2倍も多い7万3千7百人が飛騨市図書館を訪問した。別の統計を見ると、次の＜表2＞は古川町の訪問客数と宮川町の訪問客数を表している。古川と宮川は行政区域上の「町」に該当する地域で、どちらも飛騨市に属している所で、市よりは小さな行政区域といえる。

년도	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
히다시 방문객수	1,053,020	1,083,168	1,087552	970,808	1,005,881	1,130,852	1,078,956	1,217,325	626,167	617,242	861,327
후루카와방문객수	595,124	623,519	616,887	524,733	584,730	700,588	635,194	640,852	297,404	254,478	388,123
미야가와 방문객수	23,167	15,151	14,649	14,426	35,095	31,553	28,327	31,058	19,890	23,695	26,032

<表2>古川と宮川の訪問客数の現状

上の表で注目すべき点は、飛騨市訪問客数の中から古川を訪れる訪問者数の割合である。2012年の飛騨市全体訪問客数の中で古川を訪れる訪問者数の割合は56．5％だった。ところが、2017年にはその割合が61．9％に増加した。これは、2017年に飛騨市を訪れる観光客のうち、少なくとも10人の6人以上の観光客が古川を訪れたことを意味する。つまり「古川」の観光関連認知度が高まったことを示す結果といえる。

第三に、「宮川」の訪問客数だ。ここは有名な観光施設がある所でもなく、交通も非常に不便な地域だが、ここには「君の名は」に登場した「落合バス停」がある。そこでアニメ上映後、多くの観光客が宮川を訪れた。その数値を見ると、2015年までは年間約一万四千人余りに過ぎなかった訪問客数が2016年には三万五千人余りまで2倍以上増加したことが分かる。アニメーションによってこの小さな村もアニメ聖地になったことが分かる。

4. 地域ブランドの限界と解決策

このようにアニメが大きな成功を収めれば、アニメの背景となった都市はアニメ聖地となり、多くの訪問者が訪れる。しかし、2016年に公開した「君の名は」の聖地である飛騨市をアニメ上映後7年が過ぎた2023年の夏に訪れた筆者の感想は、アニメ地域ブランドの限界を実感させた。

最初に挙げられるのは、交通インフラの不足によるアクセシビリティの限界だった。映画の主な背景となった飛騨古川は、名古屋から電車で3時間近くかかり、落合駅に行くために訪れた角川駅は飛騨古川から3駅しか離れていなかったが、そこへ行く列車は2時間に1台でアクセスしにくいところだった。

飛騨古川も周辺駅に比べてかなり大きな駅であるにもかかわらず、駅前広場のタクシー乗り場にはたった1

台のタクシーも見えなかった。結局、ここを訪れた観光客は周辺を歩いて移動しなければならので、不便を感じる。

第二に、宿泊先の不足が挙げられる。飛騨市は岐阜県最北端に位置する都市で、人口は2023年5月基準で約2万2千300人の非常に小さな小都市である。アニメ「君の名は」が上映するまで、ここを訪れる訪問者の多くは高齢者であり、アニメの成功とともに若者が訪れ、外国人が訪れる場所になったと地域の人々は話していた。当然、ここは観光客が宿泊する場所ではなく、昼間を利用してしばらく立ち寄る場所だったため、観光客のための施設が多く不足していた。宿泊ができるところも少なく、特に食堂もほとんど5時で閉店。昼間も人の少ない市内風景を見ることができる。

これと反対にアニメ「ゲゲゲの下太郎」で有名な妖怪村「境港市」の地域ブランディングを見れば示唆する点が多い。

堺港市は夕方を活用した観光事業の一環としてナイトツアーを開発し、観光客の夜間滞在時間を増やし、それに伴う消費を増やそうとする計画を立てている。このために「水木しげる」通りに夜間照明を設置し、妖怪影をあちこちに設置し、ここでしか感じられない夜の雰囲気を作っている。当然ながら観光客はその風景を楽しむため、夜遅くまで境港市に滞在するし、宿泊する。

5. おわりに

以上でアニメの成功でアニメの背景となった都市が聖地となり、それを活用した地域ブランディングに成功した地域の活動を見てみた。また、統計に基づいて地域の発展の可能性を調べ、そのような地域の限界点も調べた。

アニメ、映画、ドラマなどのコンテンツを活用した地域ブランディングは成功を予め予測できないため、こうしたコンテンツの成功後に突然政策を作り、数年にわたって観光客を誘致する準備が整っていることが分かった。しかし、アニメの熱気が冷めると、そこを訪れる訪問者も減り、小都市の場合にはそのような傾向がひどいことがわかる。

このような小都市がアニメによる成功を一つの文化資源に発展させ、地域ブランディングまでつなげるためには、交通をはじめとする地域のインフラが拡充されなければならないのはもちろん、宿泊施設を増やして観光客が長く滞在できる施設を備えることが急務だと思う。

そのような点は、日本の他の小都市で訪問者の数を増やすため、宿泊施設を増設し、観光客の利便性のため旅客船を増やし、特別な街を造成し、夜間でも楽しめるスポットを開発し、観光客の足をつかむなどの努力をしている点を学ばなければならない。

このような日本のアニメを活用した地域ブランディングの事例は、Ｋコンテンツの人気が日々高まる最近、韓国の様々な地域を開発して観光客を誘致できるモデリングになるだろう。

近代日本の試験と李舜臣

金俊培(海軍士官學校)

1. 들어가며

임진왜란(壬辰倭乱)은 1592년부터 1598년까지 무려 7년간 벌어졌던 동아시아 삼국이 참전한 대규모 국제전이었다. 침략국이었던 일본은 육지에서 벌어진 전투에서는 연전연승하였으나, 바다에서는 시종 조선의 명장 이순신(李舜臣)이 이끄는 수군에 의해 번번이 패배를 거두었고, 결국 전쟁에서 승리를 거둘 수 없게 되었다. 이 때문에 일본은 자신들을 패배로 이끈 이순신에 대해 적지 않은 기록을 남기게 되었다.

그렇다면 일본에서 이순신은 어느 정도로 알려져 있었을까? 현재까지 확인되는 바, 일본에서 이순신이 언급된 저서는 수백 종을 상회하며, 이는 관련 연구에 의해 일부의 내용이 국내에 소개되고 있다.[1] 그러나 이순신이 기록된 일본의 문헌군은 방대하기에, 일본에서 이순신이 얼마나 기록되었는가에 관해 살펴보는 것은 여전히 많은 과제가 남아있다.

이에 따라 본 발표에서는 그 과제의 일환으로서, 일본에서 시행된 각종 시험의 역사과목, 그리고 이에 관한 참고서에 기록된 이순신에 대해 살펴보고자 한다. 그 중에서도 본 발표는 근대 일본에서 시행한 각종 채용-자격시험, 대표적으로 문부성(文部省)에서 시행한 '문부성 사범학교, 중등학교, 고등여학교 교원 검정시험(文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験, 이하 문검),' 각종 학교 입학시험의 문제 및 관련 참고서를 살펴보고, 이를 통해 역사 교원, 고등학교 이상을 지망하던 수험생 등 일정 수준 이상의 역사적 교양을 필요로 했던 자들에게 이순신에 관한 지식이 어느 정도 요구되었는가를 확인해 보고자 한다.

2. 문부성 교원 검정시험과 이순신

문검은 1884년에 <중학교·사범학교 교원면허규정(8월 13일 文部省達 제8호)>에 의해 제도화되어, 1948년까지 통산 81회의 시험이 시행되었다.[2] 이 시험은 60여 년이 넘는 기간 동안 국가에 의해 시행된 자격시험으로서, 이는 일본의 구(旧) 교육제도 하에서 이루어진 최대 규모의 자격시험이었다. 문검은 자료가 남아있는 1895년(제8회)부터 1940년(제73회)까지 약 26만 명 이상이 지원하여, 23,395명이 합격했다고 하여, 시험검정 합격률은 거의

1) 김태준(1978)「日本에서의 李忠武公의 名声」『현대사조』10, 기독교사조사; 최관(1998)「日本近世文学 속의 李舜臣 장군」『비교문학』별권, 한국비교문학회; 김주식(2011)「이순신에 대한 일본인의 연구와 평가」『해양문화재』4, 국립해양문화재연구소; 김준배(2022)『일본 문헌 속의 이순신 표상』, 민속원 등

2) 内田徹(2019)「「文検実業科」との比較による実業学校教員検定試験の特質」『浦和論叢』61, 浦和大学·浦和大学短期大学部, p.32

매회 10% 이하였다.[3] 이처럼 10% 이하에 불과한 문검을 통과하기 위하여 수험자들은 여러 번의 시험을 응시하는 일이 다반사였다고 하며, 그 바늘구멍과도 같은 합격률을 뚫고 시험에 통과하기 위하여 수험자들은 다방면의 노력을 기울였다. 특히 수험자들은 「문검세계(文検世界)」, 「내외 교육 평론(内外教育評論)」 등의 문검과 관련한 수험잡지는 물론, 기출 시험문제집 및 모범답안지 등을 탐독했던 것으로 보이며, 관련 출판이 활발하게 이루어졌음을 확인할 수 있다.[4]

문검의 검정과목은 수신(修身), 교육, 국어 및 한문, 영어, 불어, 독어, 역사(일본사·동양사·서양사 포함), 지리, 수학 등 다양했는데, 이 중 이순신에 관한 문제는 역사 과목의 동양사 시험 문제로 출제되었다. 이러한 문검의 동양사 시험 문제에서 이순신은 현재까지 확인되는 바, 14회·24회의 도쿄에서 거행된 총 2회의 본시험(本試験) 및 19회의 지방에서 거행된 1회의 예비시험(預備試験)에 문제로 출제되었다. 본시험의 경우 실제 중등학교에 존재하는 학과목에 관해 시행되었으며, 이 시험의 수험하는 자들의 학력을 테스트하기 위한 시험으로 예비시험이 존재하였다.[5] 이순신이 출제된 문검 시험 목록은 아래 <표1>과 같다.

<표1> 이순신이 문제로 출제된 문부성 교원검정시험

연도	시험 차수	문제
1900	14회 본시험	왼쪽 사람들의 현저한 사적 - 이순신
1905	19회 예비시험	왼쪽 사람들의 사적 - 이순신
1910	24회 본시험	왼쪽 인명 및 지명에 관한 사적 - 이순신

역사 과목 중 동양사 시험문제는 한 시험당 약 3-4개 내외로 비교적 적은 문제가 출제되었기 때문에, 2회의 본시험 및 1회의 예비시험에 이순신이 문제로 출제된 것은 결코 많다고는 볼 수 없으나, 동 시기 임진왜란 관련 조선 측 인물에 관한 문제에 이순신을 제외하면 1900년 14회 예비시험에 선조(宣祖)가,[6] 1911년 25회 예비시험에 류성룡(柳成竜)이 한 번씩 출제되었을 뿐이었다는 점을 고려하면,[7] 그 안에서 이순신이 차지한 비중은 적지 않았던 것으로 보인다. 주목할 점은 이순신에 관한 문제가 출제된 시기이다.

이순신에 관한 문제가 출제된 1900년(14회)부터 1910년(24회) 사이는 청일전쟁 이후 일본이 한반도에 영향력을 확대해가며 조선에 대한 관심이 급격하게 높아졌던 시기였으며, 동시에 조선 및 임진왜란과 관련된 출판물이 다수 등장한 시기이기도 했다.[8] 이순신뿐 아니라 임진왜란에 관련한 문제도 청일전쟁 직후인 1897년(11회)에 처음 등장하여, 이후 1911년(25회)까지 7회 출제되었다.[9] 문검은 당시의 상황과 연관이 깊은 문제가 종종 등장하고는 했는데, 예를 들어 러일전쟁 직전 만주 철도문제로 갈등이 심화되어 갔던 1900년대 초에는 서양사 문제로 '러시아와 터키의 관계를 서술하라'는 문제가(18회, 1904년), 지리과 문제로는 '시베리아 철도의 효용에 대해 기술하라(15회, 1902년)'거나, '만주의 철도선에 관해 서술하라(16회, 1902년)'는 문제가 출제되기도 했다.[10] 이순신에 대한 문제가 이 시기에만 보이는 것은 이와 같은 당시 시대상의 반영이라 할 수 있다.

3) 寺崎昌男, 文検研究会編(1999)『「文検」の研究―文部省教員検定試験と戦前教育学』学文社, p.17
4) 일본국회도서관에 등록 문검 관련 기출문제, 해설서 서적만 해도 백여 편 이상이다. 자세한 내용은 佐藤由子(1988)『戦前の地理教師－文検地理を探る』古今書院 참조
5) 竹中暉雄(2000)「文検における教職教養科目の新設とその性格」『桃山学院大学総合研究所紀要』26-3, 桃山学院大学総合研究所, p.74
6) 佐藤種治(1934)『文検参考教授参考東洋史の眼目』大同館書店, 付録 p.6
7) 佐藤種治(1934) 上掲書, p.20
8) 김준배(2022) 앞의 책, p.121
9) 国民教育会編(1921)『編輯部文検問題集 自一回至最近』国民教育会, pp.7-24
10) 国民教育会編(1921) 上掲書, p.15

이와 같이 1900년대 초 문검에서 이순신을 포함한 임진왜란에 관한 문제의 출제 빈도는 적지 않았는데, 이는 즉, 역사 교원을 희망하는 수험자에게 있어 임진왜란은 큰 비중을 차지하며, 임진왜란을 공부할 때에 역사 교원이라면 이순신에 대해서는 응당 알고 있었어야 했음을 의미한다. 문제의 내용은 '왼쪽 사람들의 사적에 관해 쓰라(19, 24회)'거나 혹은 '왼쪽 사람들의 현저한 사적에 관해 쓰라(14회)'는 것이었다. 따라서 1900년대 초의 동양사 교원시험의 수험자들은 단순히 이순신의 이름이나 임진왜란에서의 활약상 정도를 공부하는 것이 아니라, 그의 사적에 관해 상세하게 공부해야 했을 것으로 판단된다. 따라서 일본의 중등교원을 지망하는 수험자들은 '10%'의 합격률을 뚫기 위하여 이순신에 관해 학습하였고, 합격한 교원들은 자연스럽게 이순신을 알게 되어, 역사 시간에 활용할 수 있었을 것이다.

수험자들이 이순신에 대해 어떠한 내용을 학습하였을지에 관해 살펴보기 위하여, 문검의 기출 문제를 수록하고 이에 대한 자세한 답안을 제시한 참고서를 살펴보도록 하자. 예를 들어 19회 문검 동양사 시험문제에 관한 참고서 『系統的東洋史精説』(1926)는 이순신에 대해 '조선 이조(李朝)의 무장으로서, 그 가문은 대대로 유학을 업으로 하였다'고 하여 그의 가문 내력을 언급하는 한편, '우리 도요토미 히데요시(豊臣秀吉)가 정한(征韓)의 군대를 일으켰을 때 수군의 장으로 선발되어, 거북선을 창제하여 일본의 병선을 거제도 부근에서 방어하여 대승을 거두어, 우리의 해륙병진(海陸並進)의 책략이 이로 인해 좌절되었다'고 하여 그의 임진왜란 당시 활약상을 자세히 언급하였다.[11] 한편 『東洋通史 文部省検定受験用』(1917)에서는 그의 자(字)가 "여해(汝諧)이며 충청도 덕수(德水)의 사람이고, 그의 가문은 대대로 유학을 업으로 했다"고 기록하고 있음을 확인할 수 있다.[12] 『史的事項の解説 文検参考』(1931)에는 임진왜란이 실패한 전쟁이라고 하지 않을 수 없다며, 그 원인 중 하나로 '해군이 미약하여, 이순신의 적수가 아니었다'는 점을 언급하는 등,[13] 문검의 시험문제를 다룬 참고서에서는 하나같이 이순신의 자세한 사적과 활약상을 기술하였다.

이처럼 1900년대 초 문검에서 이순신에 관한 문제가 출제됨에 따라, 이 시기 일본의 중등교원이 된 사람들은 이순신에 대해 자세히 알게 되었을 것으로 추측된다. 이들은 동양사 혹은 일본사 수업 중 중 임진왜란에 관해 설명하면서 자연스럽게 이순신의 사적을 일본의 학생들에게 전달하였을 것으로 보이는데, 일례로 사학자 문일평(文一平)은 1905년 일본으로 유학을 갔는데, 역사 시간에 일본인 역사 선생이 "일본군이 임진란에 육전으로 승리를 거두었으나 해전에서는 전멸을 당하였다"고 말한 사실을 전하기도 했다.[14] 당시 일본의 임진왜란 관련 역사서는 이러한 사실을 공통적으로 서술하고 있으며, 조선 수군의 장수 이순신이 활약하였다고도 적고 있는데,[15] 이러한 사실로 미루어보아 당시 일본의 역사 교원들은 임진왜란의 패배 원인이 해전에 있음을 알고 있었으며, 조선의 수군을 이끌었던 인물이 이순신이었다는 사실을 숙지하고 있었을 것으로 보인다. 이러한 그들의 지식은 수업 시간에 학생들에게 전달되었을 것으로 보인다.

정리하자면 이 시기 중등교원을 희망하는 수험자는, 문검을 준비하는 과정에서 결코 적지 않은 문제가 출제된 이순신에 관한 사적을 학습하였을 것이며, 이는 임용 이후 역사 시간을 통해 학생들에게 전달되었을 것으로 보인다. 근대 일본의 역사 교원에게 있어 임진왜란과 그 핵심인물 중 한 명인 이순신에 대해 자세히 아는 것은 필수적인 일이었다고 할 수 있다.

---

11) 泉安雄(1926)『系統的東洋史精説 問題中心』啓文社書店, p.504
12) 高橋与惣(1917)『東洋通史 文部省検定受験用』大同館, p.464
13) 木村武三(1931)『史的事項の解説 文検参考 日本·東洋の部』文化書房, p.197
14) 박성순(1914)『문일평: '조선심'을 주창한 민족사학자』역사공간, p.23
15) 김준배(2017)「근대 일본 이순신(李舜臣)・넬슨(Nelson) 비교 담론의 등장과 변화-도요토미 히데요시(豊臣秀吉)・도고 헤이하치로(東郷平八郎) 담론의 영향을 중심으로」『일본언어문화』38, 한국일본언어문화학회, p.242

3. 학교 입학시험과 이순신

이번에는 근대 일본의 학교 입시문제에 이순신과 관련된 내용이 나온 경우를 살펴보고자 한다. 결론부터 말하자면, 학교 입시문제에 이순신이 직접적으로 언급된 적은 없었다. 그러나 관련 문제의 참고서에서 제시되는 모범답안이 이순신을 언급하는 경우를 아래 <표2>와 같이 정리하였다.

<표2> 임진왜란 관련 문제가 출제된 고등학교 입학시험

연도	시험 주체	문제
1899	도쿄우편전신학교	도요토미 히데요시
1904	도쿄외국어학교	도요토미 히데요시의 대외정책
1906	해군기관학교	조선정벌의 전말
1907	해군병학교	도요토미 히데요시 조선정벌의 실패는 무엇에 원인하는가?
1910	해군경리학교	조선정벌의 대강
1912	관립학교 시험문제	왼쪽의 인명 및 지명에 관해 아는 바를 쓰라 : 이성계
(연도미상)	도쿄고등상업학교	조선정벌의 전말
1936	고베고등상업학교	히데요시의 조선정벌

위에서 살펴볼 수 있듯, 1899년부터 1936년까지 여러 학교의 입시문제에 도요토미 히데요시, 그리고 임진왜란(조선정벌)에 대한 문제가 일부 출제되었음을 확인할 수 있다. 이들 문제는 앞서 말한 바와 같이 이순신과 직접적으로 관련이 없으나, 여기에서 주목할 점은 이러한 문제들의 모범답안을 제시한 참고서이다. 이의 모범답안을 제시하는 참고서들의 경우 이순신을 반드시 언급하고 있다.

예를 들어 고베 고등상업학교, 해군기관학교, 도쿄 고등상업학교에서 공통적으로 출제된 '조선정벌(의 전말)'에 관한 모범답안으로서 참고서『精解皇国史 受験学習』(1939)는 '수군은 적장 이순신에게 패배하여 나아갈 수 없었다'는 해답을 제시한다.[16] 또한 도쿄 우편전신학교, 도쿄 외국어학교의 '히데요시의 대외정책'을 묻는 문제에 대한 모범답안으로 참고서『試験問題講義 歴史之部』(1913)는 '이순신이 제해권을 장악해서 수군이 이순신에게 패배하였다'는 해답을 제시하였다.[17] 해군병학교의 입교 시험문제의 '히데요시의 조선정벌의 실패는 무엇에 원인하는가?'는 질문에는 참고서『諸官立学校入学試験問題答案詳解 明治40年度』(1907)에 모범답안으로서 '해군에 기인하며, 이순신 때문'이라는 답안이 제시되었다.[18]

이와 같이 이순신은 당시 입시문제의 하나로 직접 출제된 것은 아니었지만, 임진왜란 관련 문제가 집중적으로 출제되었던 1899-1912년도의 수험생들은 자신이 원하는 학교에 진학하기 위하여 임진왜란에 관해 일정 부분 학습을 할 필요가 있었고, 이 과정에서 이순신에 대해 알게 되었을 것으로 추측된다. 이 당시 일본의 고등학교·예비대학 진학 경쟁률은 3대 1(1902-1907),[19] 혹은 4대 1(1908-1912) 이상이었다.[20] 이에 많은 수험생들은 상경(上京)까지 감행하여 교육기관에 입소, 수험공부를 했던 것으로 보인다.[21]

한편, 이순신이나 히데요시, 임진왜란과 전혀 상관이 없는 문제에서도 이순신과 관련된 답안이 나온 적이

16) 円尾辰男(1939)『精解皇国史 受験学習』大阪宝文館, p.181
17) 瀬川克三(1913)『試験問題講義 歴史之部 増2版』東海堂, pp.71-73
18) 金刺芳流堂等(1907)『諸官立学校入学試験問題答案詳解 明治40年度』p.546
19) 吉野剛弘(2015)「近代日本における中等·高等教育制度の確立と「受験」の成立」慶応義塾大学博士論文, p.37
20) 吉野剛弘(2015) 上掲書, p.41
21) 吉野剛弘(2015) 上掲書, p.117

있어 눈길을 끈다. 1912년 시행된 <고등학교·대학예과 입학자 선발시험(高等学校・大学予科入学者選抜試験)>의 문제 중 하나로 '왼쪽의 인명 및 지명에 관해 아는 바를 쓰라'는 문제가 출제된 적이 있었는데, 그 인명 중 하나로 조선의 태조(太祖) '이성계(李成桂)'가 제시되었다. 이에 관해 시험제도조사회(試験制度調査会) 및 문부성 전문학무국(文部省専門学務局)에서 발간한 답안 해설서에는 '이성계에 대해 답하라는 문제에 빈번하게 이순신에 대해 설명한 응답자가 있었던 현상'을 지적하고 있다.[22] 이는 분명한 오답이지만, 수험생 중 이순신에 대해 공부한 인원이 적지 않았음을 알려 준다.

22) 文部省専門学務局編(1913)『高等学校・大学予科入学者選抜試験報告 明治45年』文部省専門学務局, p.228; 試験制度調査会編(1914)『官立学校入学試験受験者の通弊』磯部甲陽堂試験制度調査会, pp.165-166

石川啄木の『ローマ字日記』について

尹在石(ハンバッ大)

1. はじめに

西連寺成子は「この日記は百年以上も前の記録なのだが、それにもかかわらず現代の私達を惹きつける魅力に溢れている。」と石川啄木の「ローマ字日記」を誉め称えている。この西連寺の言及は啄木の「ローマ字日記」についての論究では管見の限りおそらく最新のものであろう。

ドナルド･キーンは「その危機に臨んで啄木は自分の底まで捜して、恐るべき正直さで自分のすべての考えや感情を記録した。これが彼のローマ字日記で、啄木文学の最高峰であると思う。」とやはり称賛している。ドナルド･キーンのこの評価は60十年前の1963年のものである。

時は大分離れているが、啄木の「ローマ字日記」についての評価は古いものも最新のものも称賛一色であるようである。それは、「ローマ字日記」が持っているそれなりのおもしろさ、または特色があるからであると思われる。

本発表ではこういった先行論を踏まえながら、啄木の「ローマ字日記」を読み直してみたい。

2.『ローマ字日記』のローマ字表記について

普通、啄木の「ローマ字日記」はローマ字で書かれた一九〇九年四月七日から六月一日までの日記を指す。ノートの扉には「NIKKI Ⅰ MEIDI 42 NEN 一九〇九」(全集六巻)という標題が記されている。

「ローマ字日記」を論じる時、触れなければならないのがローマ字と言う表記の問題である。

「明治四十二年当用日記」と題するノートには四月三日から急にローマ字表記に変わり、四月六日まで続く。それから、四月七日からは日記帳が「明治四十二年当用日記」と題するノートから「背革クロース製横罫ノート」(手帖170)に変わり、全体的にローマ字に書かれている。啄木はなぜ日本語ではなく、ローマ字に表記を変えたのか。

啄木は自ら、「ローマ字日記」の冒頭の四月七日に次のように書いている。

> Siyō koto nasi ni, Roma-ji no Hyō nado wo tukutte mita. Hyō no naka kara, toki-doki, Tugaru-no-Umi no kanata ni iru Haha ya Sai no koto ga ukande Yo no Kokoro wo kasumeta. (中略) Sonnara naze kono Nikki wo Romaji de kaku koto ni sitaka? Naze da? Yo wa Sai wo aisiteru; aisiteru kara koso Nikki wo yoamse taku nai no da.-Sikasi kore wa Uso da! Aisiteru

no mo Jijitu, yomase taku nai no mo Jijitu da ga, kono Hutatu wa kanarazu simo Kwankei site inai.

＜仕様ことなしに、ローマ字の表などを作ってみた。表の中から、時々、津軽の海の彼方にいる母や妻のことが浮かんで予の心をかすめた。(中略)そんならなぜこの日記をローマ字で書くことにしたか? なぜだ? 予は妻を愛してる。愛してるからこそこの日記を読ませたくないのだ、―しかしこれはうそだ!愛してるのも事実、読ませたくないのも事実だが、二つは必ずしも関係していない。＞ (筑摩書房版『石川啄木全集第六巻』の翻読)

啄木は妻に「読ませたくない」のでローマ字書きにしたと書いているが、実際、多くの研究者は「妻の節子は女学校で英語を学んでおり、ローマ字は読めた」(池田123)と指摘している。それでは、なぜ啄木はローマ字書きにしたのであろうか。ローマ字書きについての主な先行論を見てみよう。

啄木のローマ字書きについて桑原武夫は、「彼の上にのしかかるいくつかの抑圧(レプレッション)から逃れる」ために、つまり、「(1)それが家族の人々には読まれない、という意味で精神的、さらに倫理的抑圧から。(2)日本文学の伝統の抑圧から。(3)それらをもふくめて、一般に、社会的抑圧から。」逃れるためであったと解釈している。

この桑原の解釈について今井泰子は「しかし多分、啄木がローマ字の使用によって逃れえた最大の抑圧は、そうした外的な問題よりも内的な自負心や羞恥心の類であったろう。」と反論し、「ローマ字の使用は、実はノートが変わる数日前に始まる。そこには啄木自身のみじめな敗北感こそうかがえても、家族に読まれて困る類の問題は見出せない。」つまり「正直な自己点検」のために書いたのがローマ字書きであると読み取っている。

池田功は「はじめての日記論」と言われる『啄木日記を読む』で、ローマ字書きについて、前述の桑原の解釈を認めたうえで、海外滞在の時、インターネットのメールで文字化けのないローマ字を使った経験から、「少し慣れてくると、面白いのです。漢字仮名書きとは違って、ローマ字書きで書いた後は、自分だけが知っている秘密の世界を構築し、暗号で文章を作りあげたかのような軽い陶酔感がある」(124)つまり、「思いっきり書けるという書き手の心理状態による、癒し」のために書かれたのがローマ字書きであると解釈している。また、当時ローマ字書きが流行していたことに注目して「時代が要求していた表現」(126)を受け入れるためにローマ字書きにしたと解釈している。

池田の「時代」の流れの中で読むこのような解釈は的を得ていると思われる。池田の示唆を得て、今の時代であれば、それは新しい時代の記号と思われるイモチコンのようなものであろう。イメールまたはSNS上で文字の代りに使われるイモチコンは語り手の考えや気持ちなどをより詳しく生々しく伝えることが出来る。時には文字や口では表現しにくい内面の嘆きまたは喜びも巧妙に効率的に示すことができる。特に、若者世代においてイモチコンは文字に準じる記号として使用されている。現在、イモチコンはデジタルの新しい時代の記号として受け入れられている。明治期に流行ったローマ字は今のイモチコンの役割を果たしていたと思われる。当時、啄木が志していた小説も実は西洋のもので新しい時代の産物であった。啄木におけるローマ字書きは新しい時代の産物を受け入れようとする彼の先駆的精神によるもので、今の時代の若者が使用しているイモチコンのような感覚で啄木はローマ字を受け入れていたと思われる。

3.「ローマ字日記」の意味について

啄木は「ローマ字日記」で何を書きたかったのか、つまり啄木にとって「ローマ字日記」はどんな意味を持っ

ているかについて考えてみたい。

先ず、今井泰子の次の文に注目したい。

> 前年の四月末、啄木は小説執筆に専念すべく家族を函館に残して単身上京した。背水の陣による奮闘にもかかわらず、原稿は売れず、生活の目途は一年を経てもたたなかった。時代が自然主義の最盛期だったことも不幸であった。小説とは自伝的題材の中に「虚飾なき人生の醜悪(みにくさ)」(『赤痢』)をえぐり出すものだと一般に考えられていたが、啄木は、裸身をさらすにはあまりにも誇り高く、現実の醜悪さを首肯するには資性的にロマンチストすぎた。「なぜ書けぬか? 予はとうてい予自身を客観することができないのだ」(四・一七)とローマ字日記が告白するとおり、そうした時代の傾向に合致した作家たりうる人間ではなかった。下宿料の督促に絶えずおびやかされて、啄木は結局、この明治四二年三月から東京朝日新聞社に出社することになった。　(『石川啄木の手帖』170今井泰子)

啄木が前年度北海道の暮らしを打ち切り、家族を北海道の函館の友人頼んで、文学を以て身を立てるために上京したことについては前述したとおりである。そして、文学を以て身を立てるために多く書き上げた「原稿は売れず、生活の目途は一年を経てもたたなかった」「時代が自然主義の最盛期」になっていたが、啄木は今井が指摘してしるように「そうした時代の傾向に合致した作家たりうる人間ではなかった」、つまり「ロマンチスト」として「自然主義」のリアリズムのある作品が書けなかったのである。「ローマ字日記」を理解するためにはこういった啄木の身辺的な背景を知らなければならないと思う。

つまり、啄木は時代が要求している「自然主義」のリアリズムのある作品が書けなかったことから来る文学的な敗北感に苛まれていたのである。

特に、二月二十七日の日記に「出かける前に母からと郁雨君から久振の手紙、一中略一予の心は鉛―冷たい鉛でおしつけられた様になつた、ああ母！　いとしい妻！　京子！　母は三月になつたら何が何でも一人上京すると言つて来た、」と書かれているように、函館の家族を呼び寄せねばならないという抑圧に苛まれていたのである。

こういった文学的「敗北」による生活の困窮と家族への「抑圧」から逃れるために、啄木は前述したが東京朝日新聞社に勤めることにしたのである。「滝山町の朝日新聞社に出社した」(三月一日日記)ことから、啄木は基本給だけでも「二十五円」はもらうことになっていて、「東京生活の基礎が出来た」と言えよう。敷衍すれば、啄木は東京朝日新聞社からもらう基本給「二十五円」を「生活の基礎」にして、文学的再起をはかり、函館の家族を呼び寄せるつもりであったのである。

しかし、啄木の計画は思うままには行かない。次の日記を見よう。

> 「下宿屋へ今日までの約束だつたので、仕方なく佐藤氏に前借のことをたのむと、面倒だからと言つて、自分で二十五円かしてくれた」「九時頃出かけて、あゝ浅草に行つた。雨の浅草！つかれて腹がへつたので馬肉屋でめしをくつて車でかへる」　(三月十日、日記)

啄木は出社してから初めての給料をもらう前にすでに、「生活の基礎」(二月二十四日、日記)にするつもりであった「二十五円」を「前借」してしまったのである。「前借」しなければならない借金暮らしであるが、「腹がへつたので馬肉屋でめしをくつて」いる啄木である。啄木には節約精神などないようである。

当時の「銀行の初任給」が「三十五円」、「巡査の初任給」が十二円(一九〇八年(明治四十一)「銀行の初任給」が「三十五円」(注51　第一銀行の水準)、一九〇六年(明治三十九)「巡査の初任給」が十二円(注91月俸。諸手当を含

まない基本給)、一九〇〇年(明治三十三)「小学校教員の初任給」が十～十三円(注92月俸。諸手当を含まない基本給))程度であったことを考慮すれば、啄木の東京朝日新聞社からの基本給「二十五円」は実際函館の家族を東京に呼び寄せて、一緒に暮せる程度の給料であったと言える。

結局、「前借」したので、給料日に受け取ったお金はまたゼロとなる。啄木は給料日の日記に、「今日は社の月給日、二十五円受取つて、そして一目見ただけで佐藤氏に返して了つた、前に借りてゐたつ(ママ)たので、イヤな日だつた。」(三月二十五日、日記)と書いている。

「生活の基礎」をたてるつもりで東京朝日新聞社にはいり一ヶ月間働いたが、また借金暮らしになるしかない恐れが啄木を襲ったのではないか。啄木は日記に書いている。

> 「あゝ、自分は東京に来てゐるのだ、といふ感じが、　しみじみと味はれた。そして妻や母のことが思ひ出された。かの渋民の、軒灯一つしかない暗い町を、蛇目をさして心に何のわづらひもなくたどった頃のことが思出された。大きい都会、その中に住んでゐる人は皆生命がけに働いてゐる。……その中に自分もまぎれこんでゐる。……あゝ自分は働けるだらうか、働き通せるだらうか！」　(三月十二日、日記)

啄木は自分が「東京に来てゐる」ということを実感する。同時代を生きた石川天崖は一九〇九年の東京の様子について次のように述べている。

> 東京は東洋第一の都会であると同時に、また東洋第一の生存競争の激烈なるところである。地方のことわざに、食えなければ乞食をするということがある。東京においてはその乞食すらもできないのである。1)

当時の東京は「東洋第一の都会であると同時に、また東洋第一の生存競争の激烈なところ」であったのである。つまり、日清、日露戦争による地租増徴や消費税追加、物価騰貴など民衆生活は困窮を極めたところが東京であった。こういった東京のまっ中に一人立って、啄木は「妻や母のことが思ひ」ながら、果たして「働」いて「働き通せ」家族を養えるか不安に落ちいるしかなかった。

このような不安は不吉な体験もさせる。次の日記を見よう。

> 「面当(つらあて)に死んでくれようか! そんな自暴な考を起して出ると、すぐ前で電車線に人だかりがしてゐる。犬が轢かれて生々しい血! 血まぶれの頭! あゝ助かった! と予は思つてイヤーな気になつた。その侭帰つて来て休んで了つた。―中略―　京子の事母や妻の事が烈しく思出された。あゝ三月も末だ、そしてアテにしてゐた大学館がはづれて、一文なしの月末!」　(三月三十日、日記)

啄木が下宿先の本郷区森川町の蓋平館別荘から「電車」で京橋区滝山町四番地の東京朝日新聞本社へ「出社」したことについては前述した。当時の線路は人や馬などの動物が行き来する道路の真ん中または道路沿いにあったので、轢死事件がたまには起きたはずであろう。夏目漱石の小説『三四郎』に「三四郎は無言で灯の下を見た。下には死骸が半分ある。汽車は右の肩から乳の下を腰の上までみごとに引きちぎって、斜掛(はすかけ)の胴を置き

1) 橋川文三(1962)『日本の百年 7』、p.220―221

去りにして行ったのである。顔は無傷である。若い女だ。」とある。「汽車」は文明の利器であるが、以前の時代にはなかった非日常的な「イヤーな気」を体験させる。

啄木の偶然に出会った「電車」に「轢かれ」た「犬」の「生々しい血! 血まぶれの頭!」の姿もこういった不吉なそして非日常的な体験であったと思われる。

このような不安で不吉な体験の奥には常に「京子の事母や妻の事が烈しく思出された」し、「一文なし」という切迫さが啄木の責任感を圧迫していた。この圧迫と責任感は啄木にデカダンスの道を走らせる。

> いくらかの金のある時、予は何のためらうことなく、かの、みだらな声に満ちた、狭い、きたない町に行つた。予は去年の秋から今までに、およそ十三、四回も行つた、そして十人ばかりの淫売婦を買つた。……しかしそれらの女は、……まだ十六ぐらいのほんの子供なのも、…顔につやがなく、肌は冷たく荒れて、……わずかの金をとつてその淫部をちよつと男に貸すだけだ。それ以外に何の意味もない。……　(「ローマ字日記」四月十日)

啄木が「いくらかの金のある時」「淫売婦を買つた」のはフェミニズム側から非難されるかも知れないが、生理学的な理由であると言えよう。普通、人間は倫理的に都合のよくないところは隠すだろう。ところが、啄木はなぜあえて「去年の秋から今までに、およそ十三、四回も行つた」と自ら告白しているのか。このような告白の心理には北海道の家族は上京をせめて来るし、小説は売れないどん底の生活のなかでどうすることも出来ない啄木の現実があったと思われる。現実から逃れるためのデカダンスの心理は自虐的な自暴自棄のようなものであろう。啄木が偶然に出会った「犬」の「血まぶれの頭!」の傷痕は啄木の自虐的な自暴自棄の心理と合い通じるものかも知れない。このような自虐的な自暴自棄の心理は啄木に自害を考えさせる。

> 「みんな死んでくれればいい。」そう思っても誰も死なぬ。「みんなが俺を敵にしてくれればいい。」そう思っても誰もべつだん敵にもしてくれぬ。友達はみんな俺を憐れんでいる。ああ!なぜ予は人に愛されるのか? なぜ予は人を心から憎むことができぬか? 愛されるということは耐えがたい侮辱だ!
>
> しかし予は疲れた! 予は弱者だ!　一年ばかりの間、いや一ヶ月でも、一週間でも、三日でもいい、
>
> 神よ、若しあるなら、あゝ、神よ、からだをどこか少し毀(こわ)してくれ、痛くてもかまはない、どうか病気にしてくれ!あゝ!どうか……。」)　(「ローマ字日記」四月十日)

啄木の偶然に出会った「犬」の「血まぶれの頭!」の姿は啄木にとって自分の現実の一つの断面であったかも知れない。まるで、自暴自棄の心情で自分の「からだ」を「毀し」たくなる、「痛くてもかまはない」「病気にして」ほしいという自害の心理は前述した文学的敗北と家族扶養に対する圧迫から来たものであると思われる。こういった文学的敗北と家族扶養への抑圧は次の「ローマ字日記」により克明に表われている。

> 泣きたい! 真に泣きたい! 「断然文学をやめよう。」と一人で言ってみた。「やめて、どうする? 何をする?」「Death」と答えるほかはないのだ。実際予は何をすればよいのだ?　予のすることは何があるだろうか?　いっそいなかの新聞へでも行こうか!　しかし行ったとてやはり家族を呼ぶ金は容易に出来そうもない。そんなら、予の第一の問題は家族のことか?　とにかく問題は一つだ、いかにして生活の責任の重さを感じないようになろうか?　—これだ、金を自分が持つか、然らずんば、責任を

解除してもろうか、二つに一つ。おそらく、予は死ぬまでこの問題をしょって行かねばならぬだろう!　(四月十七日、「ローマ字日記」)

今井泰子が啄木における文学の意味について「文学一筋に生きて来た啄木には、それを捨てた人生に如何なる価値があるのか見当もつかなかった。」と断言しているように、「文学一筋に生きて来た」啄木が「文学」を「やめて」出来ることは何もなかった。文学的失敗は文学だけの問題ではなく「東京生活の基礎」(二月二十四日、日記)に繋がる問題でもある。啄木が自ら書いているように、「『Death』」を考えるほど啄木は窮地に落ちいたのである。つまり、文学的な敗北者から立ち上がるためにもがいている現状、それが啄木の現実であった。

また、啄木は「予の第一の問題は家族」でその「責任」から免れるために「金」が必要であることを語るが、「金」を「持つ」ことに自信のない啄木は家族への「責任を解除」してもらう方法を考える。

しかし、家族への「責任を解除して」もらうことが果たして「責任」から免れる方法であろうか。啄木自身もそれは本当の方法にならないことを知っているようである。だから、この問題は「死ぬまで」「しょって行かねばならぬ」と書いたのであろう。ただ、選択肢がないから意味のない方法を考えてみただけであると言えようか。

このように、「ローマ字日記」は啄木が文学的敗北と家族への責任に追い込まれた時、自虐的な自暴自棄の心情で、自分が処していた状況を忘れるために書いた非日常的な嘆きの語り物であったと言えよう。

4. まとめ